

女剣士アスカ

魔女の寵愛に墮つ心肉



PDF閲覧ソフトを「見開き」に設定されている場合、
ページは左 右の順で表示されます。

目次

プロローグ	三
第一章 触手に植えつけられる乳悦	一一
第二章 魔女に刻まれる牡悦	四九
第三章 王女で知る獣悦	一一一
第四章 下衆に教えられる牝悦	一五九
最終章 アスカの選択	二〇三
エピローグ	二五〇

主な登場人物紹介

アスカ	女剣士。近隣諸国にも名が知れた、禁欲的な傭兵。
ミレディー＝ミラボーン	魔女。妖艶にして好色な大魔道師。
ソフィリア＝ツド	王女。「白き宝珠」と謳われる、王国の美姫。

プロローグ

「ふう。ごった返しているな」

女剣士アスカは独りごちた。

隣国からの長旅を経て、ようやく着いた目的の村は人で一杯だった。

一分の隙もなく鎧を着込んだフルアーマーの戦士。複雑な紋様が描かれた重苦しそうなローブを着、魔道杖を提げている魔道士。簡素な貫頭衣に身を包み、腰に短剣、手に錫杖を持った神官。そして、王国の紋章が刻まれた清楚な鎧の王国騎士。老若男女問わない。

精悍な顔つきをしている者、ずるそうな顔をしている者、不安そうにしている者など、表情を見るに、心境も性格も様々の様だ。

「事件の発生からおよそ半月。そろそろ、遠方の強者も集まる頃だ。ますます盛っている時期なのだろうな」

人込みの中に入っていく。立ち並ぶ古ぼけた建物に目をやり、宿の看板を探す。日頃の習性から、足音を殆ど立てずに歩いていたと言うのに、何人かが彼女に目をやり、そのまま視線を固定した。アスカは込み入った場所でもよく目立つ。

清流を彷彿とさせる長い髪を持ち、キリリと横たわる眉、真っ直ぐに前を見据える切れ

長の目を配置する、凜とした美麗な顔貌。右目は眼帯なもの、それは汚点にならず、美貌の力強さに拍車をかけるアクセサリーだ。

全身を隈なく覆う厚地の濃紺防護服を着ているが、激しい動作の障害にならぬ様に結んで纏められた腕や足の曲線は実にしなやか。しかも長い。

防護服は腹部でも締められており、引き締まって狭まっている脇腹とよく育った大きなお尻の存在が、砂時計の括れを浮き上がっている。曇りない銀色の胸当てが覆う面積は広い事、胸当てが前に突き出ている事が、乳房の豊満さを示している。

「よお、あんたあ青光のアスカだな。あんたも魔女狩りか？ 昨日までは見なかったが、いま着いたのか？ ひよつとして、宿探しの最中なのか？」

やたら馴れ馴れしい男だった。知り合いどころか、見覚えすらないのだが。

凶暴な目をし、薄ら笑いを浮かべている、いかにも恐い物知らずと言った三十代位の男である。人の波に頓着せず、悠然と腕を組んで佇んでいる。

身長よりも少し低い程度の大剣を背負っている。身に付けている防具は鎧のパーツを最低限。下も薄着なのは、自身の筋肉に自信があるからか。そう思う位に、その男の肉体は逞しい。男の右手には、同じ様な男が立っていて、同じ様な顔でこちらを見ている。

「その通りだが。失礼、どこかでお会いしたかな」

「プロローグ」
無遠慮な態度に心中で眉をひそめながらも、ポーカーフェイスを保つ。アスカはいつも

通りの、落ち着いた低い声で訊ねた。

「いやあ、初対面さ。けどよ、これをきっかけにして、知り合いになるってのもいいんじゃないか？ この広い世界で実現した巡り合わせを大事にしようや」

相変わらず薄ら笑いを浮かべながら、大仰に手を広げる。

「すまないが、そう言うのは間に合っている。宿を探さなければならぬので失礼する」

「おいおい、この人出が見えねーのか？ 宿なんざ、どこもかしこも満杯だ。野宿も止めといた方がいいぜ？ 見ての通り、色んな連中がいるからな」

「奥歯に物が挟まった様な言い方だな。何が言いたい？」

「実は俺らは宿をとれてる。これでも女にや親切にするタチだからよ、親睦を深めたい女の一を部屋に迎えてもいいって、なあ？ 生憎、ベットは一つだけだよお」

最後の方は左右の二人に向けていた。各々、「ああ」だのと合いの手を入れた。酔っ払っているかの様な軽さだ。

「ご親切痛み入る。だが、まだ陽が高いから自分も見て回ろうと思う。今度こそ失礼」

踵を返す。反対方向の別ルートから宿探しをするためだ。遠回りにはなるが、目の前の男達に絡まれるよりはマシである。

「待てよ。俺らを外見で判断してないか？ だとしたら心外だぜ。女に甘いつてのは本当なんだぜ？ 俺らはみんな、数え切れない位の女に甘い思いをさせてきたもんだ。だから

よ、酒の一杯でも」

アスカが動いた。爆発的な瞬発力で音もなく飛び出し、男の眉間に白刃を当てる。

男の目が何度もしばたいた。縦一文字に顔を両断される寸前の状況に、何も言えず、何もできずただただ立ち尽くす。右にいる男も同様だ。息を呑んでいる。

周囲の雑音が放射線状に消えていく。殆どの者が固唾を飲んで見詰めている。数秒の沈黙が続いた後、アスカは刃を鞘に収めた。チン、と小気味よい音が鳴った。それが合図だったかのように、周囲から緊張が消えていく。

何事もなかったかのように、アスカは再度きびすを返した。

ブンツ！ キンツ！

鈍い風切り音。次いで、金属同士がぶつかり合う甲高い音。

アスカの右肩を守る防護服から皮数枚分だけ上で、大人の横幅程の幅をもった大剣と、女の細腕程度の細い剣が拮抗している。

「勝ったと思うなよ？ そこそこ名が売れてるからって調子に乗りやがって。こうなったら、力の差を思い知らせて、ベットの所で懺悔させてやるうじゃねーか」

「戦うと言うのなら受けて立つが村の外へ出よう。ここは人が多い」

二種の刃が小刻みに震え、触れ合った金属同士がカチカチ鳴る。

「プロローグ」
「うるせえよ。てめえに選択の余地があるか！」

男が吼えると、ただでさえ逞しい四肢の筋肉が膨れ上がった。

強力を発揮する男の剣は、毛髪の太さ程ずつアスカの剣を押ししている。このままいけば肩を斬り裂かれる。彼女は無表情だが、額に汗がぽつぽつ浮き上がる。

「無理だよ。お前のか細い腕でここまでやれただけでも上出来じゃねーか。抵抗を止めて謝れば、悪いようにはしないぜ」

男が勝ち誇る。その時。

ズジャツ！

大剣が地面にめり込んだ。肩を斬り裂かれる寸前、彼女が身を翻して剛刃をやり過ぎしたのだ。

女剣士はその勢いで半回転。両膝と頭を同時に沈め、低い姿勢で駆ける。男はすぐに剣を引き抜いて構えたが、構え終わった時には、白刃が喉笛に押し当てられていた。

「放っておいてくれと言われたら、そうするのも男の甘さだ。違うか？」

片手で男の髪を掴んで固定する。そうした上で、刃をじわじわ押し込む。曇りない刃はあっさりと表皮にめりこんだ。もう少し押せば皮が破れる。連れの危機だと言うのに、右手の男はおろおろするばかりだ。

「あ、ああ、そうだな。確かに、言われてみればそうだった。悪かったな」

男は擦れ声だった。顔面に汗がびっしり浮いている。

アス力は髪を離し、刃を収めた。

「さて、宿を探るか」

へたりこむ男達を無視し、歩き出す。

「待ってくれ！」

別な男の声だった。

「思っていた以上に厄介そうだな……」

部屋に置かれていたランプの火で、入手した森の地図を照らし、戦略を考えていた。武器の手入れと装備品の準備は既に済んでいた。

騒動の後、アス力を呼び止めたのはこの村で宿屋をしている初老の男だった。彼は彼女の事を知っていた。ファンなのだと言う。そして、屈強な男達を一蹴した手並みに大層感心したとかで、是非とも自分の所に泊まってくれと言ってきた。

地元の彼が言うのは、宿の状況は男達が言う通りなのだと言う。案内された時、初老の男が営む宿も満杯だった。しかし、男は家人用の屋根裏部屋を提供した。天井が低く、大人が五人も入れれば狭苦しくなる広さだったが、掃除も整頓もされており、清潔そうなシーツをかけられたベットもあった。彼女は丁寧に礼を言い、世話になると決めた。

「プロローグ」
残りの時間は、道具の補充と情報収集に当てた。村には道具屋があったが、商魂逞しい

大手道具店が出張で店を開いてもいた。しかし、足しておきたかった物は品薄で、十分な量を得る事はできなかった。

情報は十分に入手できた。地図もその一つだ。問題の森は、魔女がやってきてからガラリと様変わりしたそうなのだが、機を見るに敏な商売人が、入った者から聞き込みを続けて地図を作成している。完璧な俯瞰図ではないが、信憑性は高いらしい。

また、魔女退治に赴く有志や国軍を相手に商売する人間が少なくないために、露天商や酒場に行くとそんな話を幾らでも聞いた。与太話も混ぜられているだろうが、総合すると魔女は健在で、姫はまだ救出されていないらしい。

ふと、歌声が耳に入った。

この宿の一階は食堂と酒場を兼ねており、アスカが夕食を済ませた頃には人が集まりだしていた。おそらく、吟遊詩人が歌っているのだろう。男の声だが、高くて澄んだ綺麗な声だ。魔女が起こした事件の事を内容にした歌だった。

白き宝珠の姫が十九回目の誕生日を迎えた日。

みなが祝った。

国中が祝福し。

賢君は値万金の贈り物を贈る。

集められた賢者は無形の至宝を捧げた。

しかし、晴れやかな城は暗雲に。

身の程知らずの魔女が現れ。

賢者と認められぬ事に腹を立て。

姫君を浚って森へ引く。

暴拳に勇者が立ち上がる。

あまたの希望が邪悪を打ち倒す日は目の前だ。

要するに、魔女がこの国の姫を拉致し、自分の巢に引き籠もったのだ。それに対し、有名無名の強者が立ち上がった。

アスカはこの話を他国で知った。この村へくる途中に立ち寄った都市も街も村も、どこでもこの話でもちきりだった。

既に機密でないのなら、事態を収めた者へは、計り知れない名誉と褒賞が与えられるだろう。スポンサーは国で、魔女の跳梁で潰れた面目を取り戻す必要もあるのだから。

この村に滞在している戦士達は同じ事を考えているに違いない。無論、義憤から参戦する者も、他の思惑から旅立っている者もいるだろうが。

「プロローグ」
そして、未だ事件は収束していない。多数の兵士に勇猛な將軍、それに名高い騎士や導

士の増埒であつた誕生会会場に乗り込んで姫を浚つて逃げ延びた手際。国王が差し向ける討伐隊や、腕に覚えがある戦士達が悉く退けられている事実。魔女は名実共に「魔女」なのだと言う事を示している。

「どう攻めるべきか」

そんな事情を知つても、アスカは怖気づいていない。幼少の頃から、強さを求められる苛烈な環境で育ち、今では「青光のアスカ」と呼ばれ、近隣諸国の戦士達から一目置かれる程の剣士は、魔女の打倒と姫の奪還を実現させる気である。

その原動力は功名心でも金銭欲でもない。彼女は、自分を鍛え続けている。機械があれば自分がどれ程のものなのかを確認してきた。今回も同じなのだ。自分の力を試したい。純朴なその一心で動いている。

その夜、屋根裏部屋のランプはなかなか消えなかった。

第一章 触手に植えつけられる乳悦

鬱蒼とした森は天然の迷路であり、要塞だ。どこに敵が潜んでいるのか分かったものではない。

大気の不自然な震えを肌で感じ、死角から『それ』が飛来するのを察知したアスカは前方へ飛んだ。

ベチャツ、ビューツ、ベチャツ、ビュルツ……ベちゃつ。

一瞬前までいた場所が、汚らしい、白い粘液でドロドロになる。よほど熱を持っているのか、白い蒸気がもうもうと立ち上っている。吐き出したのは触手だ。うんざりする数が周囲でのたうっている。

「切りがないな」

もう何度目か。日の出と共に森に入った彼女は、何度も同じ敵と遭遇した。集めた情報は、オークやゴブリンと言った妖魔、ゴーストやデユラハンと言った魔法生物が多数徘徊しているとは示していた。

「第一章 触手に植えつけられる乳悦」
しかし、アスカが選んだルートにこんな生き物がこれだけたむろしていると言う情報はなかった。ただし、この怪生物が存在している事は聞いていたが。王都に本店を構える道

具店の出張店が、この白いドロドロの瓶詰めを商品にしていた。

『不感症も一撃！　どんな女もヒトヌリでイチコロ！　テクいらすの夜のお供』。そんな売り文句で売られているこの液体は、女性の性的感度を劇的に高める媚薬である。

効果の程は身をもって味わった。不覚にも頬に、少量浴びてしまったのだ。身体のもかしも、まるで燃やされているかの様に熱くなり、しかも僅かな刺激にも仰け反ってしまう敏感な身体になってしまった。甘ったるい倦怠感にもしかかれ、とても戦いどころではなかった。

売り文句は誇大広告ではなかった。幸い、手持ちの丸薬で治るものの残量は僅少。それに、必ず飲めるとは限らない。触手どもに服用を邪魔される可能性はいつもあるのだ。

不用意に間合いに入った触手へ突進し、アス力は刀を振るった。
ブシャーッ！

斬り捨てた触手から、血しぶきよろしく例の濁液が噴き上がった。よほど血の巡りがよいのか、間欠泉じみた勢いである。これまで何体もの同類を相手にした経験から、こうなる事は分かっていたので、女剣士は上体を右に反らし、余裕をもってやり過ごす。

「油断しなければ他愛ないものだが、延々と油断できないと言うのは気疲れする」
狙いをつけて吐きかけ、斬られれば周辺一体に撒き散らす。しかも、でたらめに生い茂り凹凸ができている草の上を這っているのに、移動速度は非常に速い。全く厄介だ。

彼女は斬っては駆け、斬っては駆ける。前方に開けた場所が見えた。木々に囲まれているが、中央は大人十人は入れそうな面積である。彼女はそこに駆け込んだ。

触手はしつこく追撃してくる。広い場所の中央で彼女が止まると、周囲に生える木々の間に身体を置いて通せんぼした。彼女の逃げ道が一つ、また一つと埋まっていく。木の間でうねる触手達は、その先端をアスカへ向けている。

「完全に包囲されたな」

心なしか、触手達が胸を張っている風に見えた。

取り囲む触手は四種類だ。

まず身体の構造から、先端が窄まっているタイプと、先端が大口となっているタイプに分かれる。別の端はどちらも細長くなっていた。蛇と同じだ。

後者の口内には歯の代わりにヌメル体液を纏った突起がびっしりついている。突起の大きさは不均一だ。大人の中指位の物があれば、赤子の親指位の物もある。

触手の身体的な特徴はまだある。体色だ。構造はその様に大別できるのに対し、色は緑か桃色かに分けられる。どちらにしる、言葉通りに緑色であるとか桃色であると言える可愛いものではない。徹頭徹尾毒々しく、濃淡から不気味な紋様も形成されている。

また、触手はどれも表面が粘膜じみっていて人間の口内と同じく粘液で湿っている。粘液の色はドス白い。体液と同じ成分なのかも知れない。量は、体表を潤わせると言うレベル

ではなく滴っている。

「だがな。追いつめられたつもりだろうが、そうとは限らんぞ」

刃を握り直す。体内の気力を漲らせる。集中力を高める。精神を張り詰めさせて肌を過敏にし、空気の微妙な変化を見逃さない。耳をそばたて微細な音も聞き分ける。

「む、くるか」

前方の触手が発射体勢に入った。細長い先端がビクビク震えている。先っぽの震えが特に顕著だが、全身が息んでいるかの様に震動している。見える範囲の触手達はみな大同小異の状態だ。死角のものも、そうなのだろう。肌に伝わる空気の振動で、そんな光景が自然と頭に浮かぶ。

更に意識を集中させる。一刻一刻が長く感じられ、見える物も見えない物も、どんな状態にあるのかが、手に取るように分かる。

ビューーーーーー

触手達の一斉射撃。

地を蹴るアス力。爆発的な瞬発力で地面に深い足跡を残しつつ駆ける。目標は、体液放出が僅かに遅れた正面の触手。

吐き出された媚毒液の帯をすり抜け、吐き終えて硬直していた隙を突いて胴を両断。断末魔の体液しぶきの射線を避け、傍の大木へ飛ぶ。重力の引き寄せに逆らい、頑丈な幹を

駆け上がる。

跳躍。

中腹辺りで幹を蹴り、女剣士は矢のような速度で対角線上の触手に迫る。そして一閃。トンボを打って着地すると、振り返る事なくまた手近の木に駆け上がって跳躍。一閃。

その繰り返しで異形を一体一体斬り捨てていく。触手達は、何が何でも体液を浴びせようとしていたが、彼女には全く当たらない。程なくして、群れは全滅した。

「ふう。終わったか。丁度よい場所が見つかってよかった」

周囲に動くものがいなくなってから、ようやく息を吐いた。細身の刃を振り、付着したおぞましい雫を払う。

「それにしても、敵の動きが気になる」

最初はそうでもなかったが、戦闘回数が増えるにつれて、組織だった動きが見える様になっっている。先ほどは、明らかに包囲して殲滅すると言う戦術を駆使していた。

触手の体液を売り物にしていた店員は、こんな生き物はこの森でしか確認されていないと言っていた事も頭に浮かぶ。各地を放浪しているアスカも、こんな生物は見た事も聞いた事もなかった。

「魔女が生み出したのだろうな」

妖魔はともかく、人工物である魔法生物などはそこかしこをうろついているいい様な身

近な存在ではない。

噂の中には、魔女は大魔道師クラスではないかという話もある。魔道に長けた者ならば製造が難しいそんなものも生み出せて不思議はない。

また、魔道を駆使すれば、生物だろうが無生物だろうが意のままに操る事が可能だという話もある。根城に近づく邪魔者を消すために、放し飼いでいる化け物どもを駒として操作しているという事はあり得る話だ。

「なら、本拠地までもう少しなのかも知れない」

身体状況、それに持ち物の残数と状態を確認すると、アス力は歩を進めた。

千歩は歩いた頃だろうか。また開けた場所にでた。今度のはもつと広い。王都にある王立劇場ほどはあろうか。大人でも数百人は集まれる広さだ。

前方に広がる木々の間に一軒の屋敷が見える。林立する木が邪魔なために全容は見えないが、かなり豪華な建物だ。アス力は直感的に、魔女の住処だと思った。

しかしその前、つまり彼女の眼前には巨大な存在が佇んでいる。見上げなければ顔も見れない巨人。彼女の頭は、その膝程までしかない。

「ウッドゴーレム……こんな規模の物も作れると言うのか」

身体中に木目が走る木偶人形と言ったそれには目も鼻も口もない。周囲の木の頂上から突き出たのっぺらぼうが、じっとアス力を見下ろしている。

ウッドゴーレムは木を素材にして製造できる魔法生物である。ひとかどの魔道士ならば作成も操作も難しくないらしいが、大きさと製造難易度や操作難易度は比例するとも聞いている。ここまで大きな物は前代未聞だし、これを操るとなると、一体どれ程の力量が必要になるのか。

何の前触れもなく、巨人が右腕を振り上げ 振り下ろす。

ドシンッ！

大地震さながらに地面が揺れ、大きく重たい音が周囲を震わせた。巨大な拳の矛先となっていた女剣士は、後ろに飛んでかわしていた。難なく着地すると背後に回りこみ、左腕の真下へ。

刃を上にし、片手で下から切っ先を支える。その体勢を維持したままで腰を屈め、伸び上がりながら真上に跳躍。

「ハアッ！」

狙いは肘の裏。組み木と同じ構造の部分。

分厚い身体に斬りつけるよりも、比較的脆い部分を攻める。強固な鎧を着込んだ戦士と戦う場合と同じだ。関節部分は弱点の筈である。

巨人はのっそりと顔を巡らせている。アスカの居場所をまだ特定していない。
ザンッ！

全身全霊の斬撃が左腕の半分を斬り落とす。肘から先がゆっくりと地面に落ちる。切り倒した大木が地面に倒れるのに似た轟音。また大地が揺れた。

アスカの居場所に気付いた巨人は、彼女めがけて右腕を突き出した。

家屋の壁が迫ってくるのと同じだった。女剣士は、慌てず騒がず冷静に拳を見据え、着地した瞬間に左へ飛んだ。

「風圧でもこの威力か！」

直撃こそ避けられたが、かき乱された大気の渦が襲い掛かった。風に遊ばれる木の葉とはこう言う気持ちなのかも知れないとアスカは思いつつ、武器を放り投げ、暴風の勢いに逆らわず地面の上を転げ回った。

起き上がって刀を回収すると間合いを取った。即座に状況を分析する。

「ウッドゴーレムの怪力も強度も侮れないが、攻撃は当たらなければ被害はない。動きは鈍重なので十分回避可能だ。攻撃をかわしながら隙を突いて、比較的脆弱な関節部を狙って四肢を落とせばいい」

身動きできなくさせればこちらの勝ちだ。結論づけて今度は脚を狙う。無造作に正面へ立ち、つ。回避されるとは思っていないかのように、ゴーレムは拳を振るった。彼女は緩慢な鉄拳を右に駆けて回避し、相手が腕を戻す前に左脚の後ろへ滑り込む。

「なっ！」

驚愕の呻き。

斬られて剥き出しになった左腕の上腕に木のうろじみた穴があり、その中から、緑色の触手が顔を出していたのだ。しかも、体液の発射態勢に入っている。細まった先端がこちらを捉え、ググツと膨らんでいき。

「っ……！」

発射。白くて太い粘液の帯がアスカに迫る。

予想外の展開に驚き、立ち止まってしまった彼女。回避運動が一拍遅れ。ベチヨヨヨヨツツツ！

粘っこい雫が、女剣士の眉間を叩いた。鼻が曲がりそうな生臭さを撒き散らしながら鼻の横、豊麗線を伝っていく。何しろ粘着度が高い液体なのだ。落ちる速度は非常にゆっくり。強烈な汚臭の漂うナメクジが這っているのと大差ない。

「くっ！ 抜かったあっ！」

早速、身体が火照ってきた。肢体の表面にあまねく、炭火の熱気が纏わりついている。就寝前のまどろみじみた眠気が身体を包み込む。

攻撃のために斜め前へ飛び出そうとしていた身体を無理矢理捻り、体勢を立て直す時間を稼ぐために後方へ飛ぶ。

「第一章 「触手に植えつけられる乳悦」
「しまった！」

地面に足をついた時、バランスを取れずに尻餅をついてしまった。平素ならありえない事だ。すぐに起き上がる。心臓の拍動がいやにやかましい。身体が思い。肌に纏わりつく熱が物質的な重さを孕んでいるかのようだ。一挙一動が億劫になってくる。

呼吸が乱れてきた女剣士アスカへ、木目の巨拳が迫りくる。相変わらず遅い。だが、大気を割りながら迫る巨大な塊は、心から余裕が消えた今では酷く恐ろしかった。避ければどうと言う事もない攻撃だが、当たったら致命傷だという恐怖心を強く感じる。

女剣士は意志力を総動員して恐怖心を抑え込み、刃を放り投げた。歯を食いしばって更に後ろへ飛ぶ。

飛んだ後の結果が、今度はもつと悪かった。足をつくどころか受身もとれず、勢いのままに転げ回った。

「まずいぞ、身体が……早く薬を……」

身体が『火照り』から『熱い』へと悪化している。全身からどんどん力が抜けていく。眉間から垂れてきた汚らしい白濁が瞼にのしかかり、視界が悪くなる。

彼女は力を振り絞る。蜥蜴の様に四つんばいになると、手近にあった、太めの木の幹に手をついて立ち上がった。膝は笑えばなしで、立っているのだけでも辛い。

滲む目で唐草模様の道具袋を視認し、震え始めた右手を伸ばす。ただでさえ隻眼であるのに、身体の異常が遠近感の把握を大幅に狂わせている。何度も空気を掴んだ末に、よう

やく袋の中へ手を突っ込めた。

「はやくっ……はやく飲まねば……」

手の震えが甚だしい。掴んだ物の感触がぼやけて伝わってくる。手は、どうでもいい他の道具ばかりに触れて、肝心の丸薬が入った小瓶に当たらない。

トサトサツ。

と、道具袋が草の地面に落ちた。

「な……んだと……！」

漁っていた手に痺れが走り、急速に感覚がなくなっていく。目を向けると、触手が右腕の端から端まで螺旋状に絡み付いていた。体液を吐きかけた奴だ。

悪い事はまだあった。ゴーレムの左腕から、別の触手が這い出ているのが見えた。それは地面に降りると、アスカを指して一目散に這い寄って来た。蛇と同じ様に全身を水平に波立たせ、サササツと草の上を移動している。触手の母体であるゴーレムも、地響きを立ててこちらに向かっていた。

「くっ、はやく……はやく薬を飲まなければ……！」

不恰好な四つんばいになると、無事な方の手で道具袋の底を持ち、逆さにした。ぶちまけられる道具の数々。丸薬の小瓶も転げ落ちた。

「第一章 触手に植えつけられる乳悦」

「あった……あったぞ、もう少しだ……くっ……」

希望で心が明るくなった時、粘液の一筋が額から伝って鼻の横を伝った。ただそれだけの刺激だったと言うのに、全身がサーツと粟立ち、一気に力が抜けた。

「しっかりとアスカ……しっかりとるんだ」

腹の底から声を絞り出して叱咤する。声は驚くほど情けない擦れ声だった。歯を食いしばって手を伸ばす。ひっきりなしに汗が噴き出す。そこへ、また、眉間から粘液の雫が流れ落ちた。

「はあううう………ああ………こ、こんな………こんな事で………え」

藁をも掴む思いで足掻いても、その時に生まれる身体の振動が濁液を走らせ、些細な白濁の流れ一つで、身体がわなないてしまう。

「ううう………もう来たのか………」

逆転への道を切り開けないまま、触手とゴーレムが到着した。

ゴーレムはアスカの髪を摘み上げて宙空に固定させ、二体の触手は上半身に纏わりついた。互いに先端をつき合わせて何やらごそごそ始めている。厚手の防護服越しに、環形型の化け物が蠢く様子が伝わってくる。

「このっ」

作業に集中している触手を掴み、放り投げるアスカ。発情体液の影響下にあるせいで、思った距離の半分も飛ばせなかった。情けなく思いながら、もう一体にも手を伸ばす。そ

の時、ゴーレムが動いた。

「うわっ……ぐっ……くっ」

アスカの脇に、こぶりな丸太ほどもある指が降りて来た。それはそのまま上へ滑り、彼女は万歳をする格好に。女剣士は腕に力を込めて抵抗したが、一瞬の拮抗さえ叶わなかった。上げさせられた手首が魔法生物の指の間に挟まれて固定された。

Iの字に拘束された女剣士の上半身へ、投げ飛ばされた触手が戻ってきた。元々いたものと協力し、作業を再開している。

化け物たちに対して、どうする事もできないアスカだが、その目はまだ諦念の濁りを宿していない。燃え上がるような意思の光で煌いている。

（機会を窺い……必ず目に物を見せてやる）

拘束された上に、触手体液による強制発情の症状は軽くないのだが、女剣士は絶望的な状況からの脱出を諦めていない。と。

ドサツ。

「なにっ」

「第一章 触手に植えつけられる乳悦」
不意に身体が軽くなった。そして、草の絨毯に重い物が落ちる音。見れば、胸当てが落ちていた。それは、留め金を用いて肩の所で留めていたものなのだが。落ちたベルトは破損してはず、千切れて落ちたと言う風ではない。

「……………まさか、外したとでも……………」

トサツ、トサツ。

また何か落ちる音。今度は両手の籠手だった。それぞれの留め金がある場所で、触手達が踊るようにくねっている。

「……………間違いない……………何と器用な……………丸腰にして鬨るつもりなのか？」

異形達は、身体を人間の指のように使って女剣士の装備を外していたのだ。

「なっ、そこまでやるのか！」

触手達を取り付いたのは防護服の結び目だった。それは上半身だけでも、左右の腕に二箇所と左右の脾臓部に二箇所ある。それらと腰の帯を解かれれば、アスカの上半身が裸になつてしまうのだ。

パラッ、ハラリッ。

触手はどんどん解いていく。細まった先端で結び目の隙間に潜り込み、身体を食い込ませるとうねうね動いて結びを緩くする。もう、両腕の防護服がだらんと垂れている。

「やめろっ！」

裸にさせられる羞恥と恐怖に駆られ、アスカは身を擦った。触手を掴んで投げたかったが、手はガツチリと拘束されていてビクともしない。

触手は止まらない。わき腹に移動して黙々と脱がしにかかる。身体が揺れても、振り落

とされるどころか姿勢がグラつく事すらない。

自然界の生き物でも、身体が特殊な作りであるものは天井に貼り付く事さえできるが、触手の肉体構造も同様なのかも知れない。だとしたら、もう成す術はないのか。

ふと、諦観の念が心をよぎったが、彼女は気を取り直すように首を強く振った。気持ちを新たにして、何とか化け物達を振り払おうと身体を動かす。しかし、
ふわあつ。

防護服の結び目が全て解かれてしまった。衣服が緩み、ひんやりした空気が熱くなっている肌に触れてくる。

「くうっ……んああ……」

甘い響きも含んだ呻き。アスカの口から漏れたものだ。触手の体液と恥辱で熱くなった身体には、ただの空気でさえも心地よい。身体の芯をそつと愛撫されているようだ。

「うあ………し、しまった、触手はどうした」

一瞬だけ陶醉したものの、すぐに正気に戻って異形の行方を目で追う。その時だった。
トサリッ。

とうとう帯までが落ちた。押さえ手がいなくなった防護服はゆったりと緩んでいる。大きくなくなった隙間から冷えた大気が入り込んでアスカの肌に纏わりつく。それと一緒に触手達も侵入してきた。

「第一章 触手に植えつけられる乳悦」

又メ又メの蛇じみた緑色の化け物は、彼女の身体を地面にしてそこかしこを這い回る。無闇に動いているのではなく、崩れた防護服にぶつかって、内側から弾き飛ばそうとしている風だった。

「ううっ……私の身体を這いずって………気持ち悪い………箒なのに」

触手は人肌の温もりをもっていた。身体は硬いが生き物の硬さだ。人肌の柔らかさを伴っている。絶え間なく体表を濡らしている薄白い粘液は女肌との摩擦を減らしている。異形と女剣士の肌の擦り合いは、アスカにまるやかな感触を享受させる。

元々、顔に発情体液を浴びせられていたのだが、今は上半身の全体に塗りつけられている状況なのだ。彼女の身体はますます発情し、異形が与えてくる感覚を快感として受け取っている。

平素でも比較的敏感なわき腹を又ルリと通られると、うなじがゾワリと粟立った。腋の下をくぐった際に腋窩を擦られた時は、背中がゾクゾク震えた。上半身に与えられる刺激は下半身も熱くさせる。

「くうっ……はあああ……んんっ………気を強く持たねば………負けはしないぞ」

歯を食いしばり、正気にすがりつく。必死の努力により、恥ずかしい声が出るのだけはどうか押さえられたが、それだけで精一杯だった。

バサッ、ズルルッ。

防護服が落ちてしまった。腰から下に力なく垂れ下がっている。

「っ！ し、しまった……」

上半身が完全に露出してしまった。

全容を現した乳房は洋梨型の巨乳だった。肉房は根元から少し垂れ、もぎ頃の熟れた果実を思わせる。それは見るからに肉が詰まった、真ん丸に膨れた球体だ。大人が掌を広げても柔肉がはみだしてしまっただろう。

赤い乳輪はツンと上を向いており、中央には赤子の指先ほどの小さな乳首がちよこんと飛び出ている。

乳房も乳輪も乳首も、触手の発情体液によって興奮している。乳房は張り詰め、乳輪はこんもり盛り上がり、乳首は少しずつ広く長くなっている。どれもが充血して、ビクビクと震えてもいる。

触手が這い回った跡も残っている。たわわな肉果実の白い肌も、膨れた赤部分もテラテラとした光沢を帯びている。場所によっては、ドス白い雫がたつぷりと残っていた。

それに加えて。気密性の高い防護服を着て、激しい戦闘を繰り返していたせいで出た汗も、肉洋梨にしっとりとした艶を付加している。木々の隙間から差す陽光が、化け物体液と発汗でツヤめいた熟乳を、鬱蒼とした森の中で浮かび上がらせている。

「第一章 触手に植えつけられる乳悦」

「あう、ああ……私の胸が……」

乳房を晒す羞恥に言葉をなくしている彼女。キビキビとした性格が現れた、背筋を伸ばした直立姿勢は、たわわな肉洋梨と、細い脾臓と腰が作り出す括れと言う、女の凸凹を作如実に示している。

胸元から下のお腹は鍛えられているだけに、肋骨が薄く浮かび上がる程の贅肉のなさ。あばらのドーム下側に展開する腹部は、うっすらと割れている。中央付近には、縦長のお臍が鎮座していた。

その、引き締まりつつも豊満な肉体に少しずつ赤みが差している。身体を蝕む熱が高くなっている何よりの証左だ。

ウネウネツ、クネツ、クネツ。

アスカから数歩の場所で、その先端をこちらに向けていた触手達がやたらめったらにくねり出した。彼女にはその意味が分からないが、どことなく喜んでいるように思える。

（触手に見られている……見て喜んでいる……私の身体を！）

カアアアツツツツツ！

羞恥で顔から身体までが沸騰した。強烈な恥の意識から、細くてキリツとした眉も、切れ長な目も弱弱しく八の字に歪んでしまっている。目頭が熱くなり、強い意志力を表す瞳が恥辱の涙で揺れる。顔には、いまだに白い媚薬体液がべったりと縦断しており、白い蒸気がくゆっている。

ギョルツ、ギョツギョツギョツ。

「ああ……うう……なにを……んあつ！」

触手達が再度よじ登ってきて、各々が胸の付け根に巻きついた。表面が絶えず又メ又メ体液で濡れているからか、締め上げられても苦痛はない。訪れるのは、じつとりと言う熱い圧迫感。

「あふつ……胸元が……あ、熱い……くう……」

触手がギリギリと締まる度に熱さが増していく。圧迫感も強くなり、まるで心臓が押し潰されそうだ。しかし、

「ああう　ツウ！　……んくつ……はああ……んんつ……」

痛くない。顎に力を込めても、すぐに口が開いて甘ったるい声が漏れてしまう。呼吸が荒くなり、背中にドツと汗が出る。

ググ……ググググツ……グググ……。

乳房の根元を締めながら、触手の肉体が膨らみだした。そこかしこに血管めいた筋が浮き出てきている。身体の膨張度合いが増すに従い、浮き出る筋も高く太くなっていく。

「こ、これはいつたい………つうあ………！」

「第一章　触手に植えつけられる乳悦」
触手の動きが変わった。それまではベルトを締めるのと同じ要領だったが、今度は車輪のように回転しながら締めつけてくる。

粘体液が介在しているので摩擦はスムーズだが、触手の体表に浮かぶ筋が凹凸となって乳肌を出鱈目に抉るのだ。

「んっ！ あうんっ！ ンンッ！」

根元が締めつけられているので、肉洋梨は木から垂れ下がる果実を髣髴とさせる。根元が揺さぶられる度に、肉房も重たげに揺れている。その度に、胸の中で甘い痺れが広がっている。

「擦れ　くうんっ……あふあ……ああ！」

乳房が根元から赤熱し、疼きが蓄積していく。それは熱と結びついて、熱くなるほどに狂おしい。

又シッ！ 又ピシヤッ！　ぐぐっ……たゆんっ。

化け物は畳み掛ける。先端を鞭のようにしならせて、膨らんだ乳房を打ちすえる。表面にびっしりついた肉筋の跡がつくのではないかと思うほど強く叩けば、表皮に触れるのみの弱さでぶってくる。

弱く打たれた時には、強くされた時の快感が思い起こされてもっと強くして欲しいと願い、強くされればもっと強くして欲しいと思ってしまう、

「んあっ！　何を考えているんだ私はあっ、こんな、こんな事で……あっっ！」

別の乳房への責めはまた違う。触手の先っぽで掬うように持ち上げられ、肉果実が上向

きの紡錘形に伸びきつたら離される。開放された肉房は自由落下で落ち、根元を引つ張りながらポヨンポヨン弾む。弾む乳肉は下から上へ波打っている。

「はあ、はあ、あ、熱いつ……んあ、乳首がつ」

弄ばれて、胸の表皮が伸び縮みする振動が先端まで波及した。体表レベルで擦られる乳首が一際熱くなっていく。今では赤子の指の半分はあるだろうか。

シユルルツ、ツンツ、ツンツ、ピンツ、ピツ。

「くああつ！」

触手が乳房を螺旋状に進む。張り詰めて瘤じみてきた筋が肉果実に食い込む。深い谷間を作りながら、さながら紐で縛ったハムのように、肉洋梨の全体を締め上げている。

そうして乳輪まで巻きつくくと、先端から何本かの細い枝が伸びた。髪の毛と同じ位の太さの肉枝は、そそり立とうとしている乳首の周囲に展開し、宙空で静止した。

「んつ……なんだと言うんだ……んつ、ふあつ！」

一本がしなり、乳首を弾いた。それを皮切りに他の小触手も順番に叩いていく。自身を鞭にして容赦なく打つものもいたが、撫でるようにそつとしたものもいた。

「はあつ、んあ、やめろ、乳首を、ううん！ ふあああつ！ そんな優しくさすられたら………くはあつ！ 強い………！」

静止を求めても触手達は聞く耳を持たない。弾かれる度に、肉端の充血度合いが増して

いく。感度も敏感になっけいき、与えられる衝撃が針小棒大に伝わってくる。

これではいけないと言う漠然とした危機感が、警鐘となって頭の中に鳴り響くのだが、Iの字に拘束されているアスカにはどうしようもない。弱小生物に嬲られるのをただただ甘受するしかなかった。

「っあ！」

腫れぼった乳首に細い触手が殺到した。根元から頂上を目指して絡み付いていく。全てが絡んだ後、肉柱がキリキリと締め上げられた。

「ふうっ、アアーツ！」

締めつけの度合いが上がるほど、乳首がジンジン疼いてくる。胸が切なく締めつけられて、意識がぼうつと霞みもする。そんな状態の中、触手に締められる肉端は赤子の親指ほどの大きさに膨れ上がっていた。

「ハアツハアツ……うああ……中に……あ……入って……！」

勃起した乳首に巻きついたまま、触手が柔乳の内側にめり込んでいく。同時に、乳房を締め上げる度合いが強くなり、内部へと進む異形が柔肉でミツチリと包み込まれる。

若々しい乳房の中へ、禍々しい触手が槍のように深く突き刺さっている。異形の体表に滲み出るヌルヌルの体液の量が増し、表面に浮かぶ筋の隆起も高くなっている。

にゅちゅ……ぎゅちゅ……にちや、むちゅ。

肉刀が前後に往復し始めた。限界まで乳房の中に入り込み、弾力に任せて外まで戻る。浮き出る筋による凸凹が、発情した乳肌をゴリゴリ擦る。乳房に巻きつく触手が、肉房をぎりぎり締め上げるので、内部を擦る触手も相当な圧迫を受けている筈だ。

「あうん！ 胸が突かれて、くうツ！」

左右の胸が、肉刀によって奥深くまでドスドス突かれている。下級魔法生物の突き込みは身体の芯どころか、頭の中にまでじいーんと響いてくる。

「こんな事、屈辱の筈なのに……………んあッ！」

普段なら簡単に一蹴できる弱小生物。それにより痴態を晒されている異常が、嫌悪よりも被虐の肉悦を覚えさせる。Iの字で拘束されて、成すがままになるしかない事実がそれに拍車をかけている。

「んあッ、中で、汁が、熱い汁が出ているっ、んンツ」

乳首に巻きつく触手から、熱くてトロトロの体液が漏れている。身体から滲み出るのは違い、より熱くて粘度が低い。次から次へと湧いて肉ぼっちに染み込み、それと同時にビキビキと張り詰めた触手の往復運動を助けている。突き込みの勢いがどんどんどんどん増していく。

「第一章 触手に植えつけられる乳悦」
「はあッ、はあッ、胸が熱いつ……………！ アソコも……………くあッ！ こんな感覚は始めてだ……………あううっ……………」

修行の日々を送っていた女剣士が味わう初めての官能。その相手は、鎧袖一触の化物だった。

発情体液をかけられ、散々に髑られ、敏感になった乳房は人間が相手の場合よりも濃厚な悦楽を、アスカに味わわせている。

「ふあつ、はあツ、ンンツ！」

身体中を蝕む熱と、激しい抜き差しが頭を白ませる。息が詰まり、目の前で星がチカチカ瞬いている。

「なっ、ナカでこれまで以上に膨れて……あッ！」

乳房に包まれながら出入りしている触手の先端がググツと膨れ上がり、ビクビクと震えている。表面に浮かぶ筋の谷間が深さを増し、滑らかな柔肉の表面を強く抉っている。

触手が肉果実を出入りする粘着質な水音と、アスカの喘ぎ声が周囲を満たす中。
「うあつ、あ、ああつ、アアー！」

ドブウツ！ ドビュビュビュツ！ ドプツ、ドプツ！

一番奥までめり込んだ状態で、触手の先端が爆ぜた。表面を濡らす体液や、先んじて漏れていたトロトロの汁など比較にならない熱い濁液が乳首を覆い、内部に巻き込まれた乳肌に染み込んでいく。

触手の白濁を受ける女剣士は、女の絶頂　性に疎い本人はそうと分らないが　を

享受していた。背筋が弓なりに反れ、足指が丸まっている。見開いた目の下にある口は

「あ」の字で固まっていた。内部では、甘くも鮮烈な電流が身体中を駆け巡っている。

一切抵抗しない美しい獲物の胸の中で、触手は思うがままに体液を吐き続ける。

「う……………あ……………ああ……………」

眉間の皺が深くなる。上気した顔は、乾いた触手体液でテラテラの光沢を帯びている。

長い髪は貼り付き、まるで男女の営みを終えた女のそれである。実際、ストイックな女剣士の凛顔は、色事の味を知った女の顔をしていた。

ぬぼ〜っ。

気が済んだのか、触手の先端が乳房の中から外側に離れていく。肉果実が元の洋梨型に戻っていくのだが、細長い化け物と乳房は粘っこい糸で繋がっている。白濁塗れの乳首と結ばれている糸は特に太い。

「はあ……………ああ……………」

長く、重く、そして恍惚とした響きを含んだ溜め息。普段の女剣士なら決して漏らさない類の息遣い。それを何度か繰り返した後、彼女が呟いた。

「ま、まだ……………熱い……………私の胸……………んっ……………」

「第一章 触手に植えつけられる乳悦」
胸の奥底に、まだ熱が停滞している。嵐が過ぎた後でも、乳房はまだ火照っているのだが、それとは段違いの熱量だ。熱いだけでなく、何かがこみ上げてくる感覚もある。

シユルルルツ、ギユツ、ギユツ、ギユツ。

大人しくなっていた触手が、再び胸の根元に巻きついてギリギリと締めつけてきた。散々教え込まれた乳悦がじわじわ復活するものの、しかし今度は様子が違う。

「おうっ……おおっ、くるっ！ ゆっくり何かが来る！ んあああっ！」

締めつけが強くなるのに比例して、確かに何かの奥からせり上がってくる。乳房もそれで満ちていくようだ。火照っている程度だった乳房が、グラグラに煮えた鍋のように熱くなっていく。

「熱い、ああ、熱いっ！」

だが悪くない。

乳房の中で熱いしぶきが爆発した時と同じ、未知の陶醉感も起こっているのだ。化け物相手にこんな気持ちになる事に背徳感もある。しかし、それは嫌悪の念にはならず快感を増幅させる調味料となっている。

「ふあああ、うんソツ、むね、ああっ、胸がっ！」

根元を縛ったまま、触手の先端が伸びた。ついさっきと同じく乳房へ螺旋状に巻きついて、細い肉枝を乳首に絡ませる。そうして、征服した肉果実を締め上げる。しかし、そのやり方は、根元から先端へ順に力を加えていくと言うもの。牛の乳搾りと同じやり方だ。

胸の奥から乳輪へ、搾るように触手が乳肉へめり込んでいく。乳首でも同じ風に力が加

わっているのだが、タイミングが乳房のそれと同調している。

「んああッ！ 触手などに、家畜の乳搾りと同じ事をされてっ、はううう！」

規則正しい搾乳愛撫は女剣士を追い立てている。されればされる程、胸の中が熱くなり意識がぼうつとしてくる。自分の異常な状況を自覚すれば、背筋がゾクゾクする。

それと共に、奥からやってくるものの存在感が大きくなっていく、それを出したいと言う欲求が一秒ごとに強くなっていく。

「ああっ、出る、出るうっ！」

放出の時は間近に思えた。もう乳輪まで満たされて、後は小さな肉ぼっちを上るだけなのではないのか。触手の動きも、激しさを増している。だが。

ギユチイイイイイイ！

触手が乳首の根元に強く巻きついた。順調だった流れが堰き止められると、そこまで達していたものが逆流でもしているのかと思う位に胸の中が張り詰め、どんどん煮えたぎっていく。

「アアッ！ 出したいっ、出させろっ！」

今すぐにも邪魔な触手を取り払いたかったが、両腕ともゴーレムが押さえている。身体を揺すっても、触手は微動だにしない。

ニユピシッ、ツン、ツン、ググッ…………… たゆんたゆん。

乳首の根元を縛ったまま、触手は自由な部分を使って責め立てる。螺旋状に巻きついた触手の間からムツチリとはみ出している乳肉を、その先端で激しく叩いたり、かと思えばピクつく乳首頭をちよんちよんと爪弾く。何かで満たされているであろう胸を持ち上げ、は落とし、洋梨型の乳房を何度も弾ませる。

触手の体表からとめどなく媚薬体液が出ているため、巻き付かれているアスカの身体は常時発情状態だ。それに加えて、肉悦を呼び覚ます責めの数々。

「ハアハアハア、だしたいっ、あア、だしたいッ！」

女剣士の正気はごっそり削ぎ落とされ、彼女は沸き起こる放出欲求の虜と化している。赤ら顔の眉と目尻は垂れ下がり、半開きの口の端からは唾液の筋が。

ギョルルルルルッ！

乳房の締め上げが強くなった。膨れ上がった体表の筋が、興奮して桜色になった乳房へ強く食い込む。キスマークよろしく、禍々しい化け物に蹂躪された印が刻まれていく。

目に映る赤い跡は被虐感を加速させる。異形に弄ばれている実感が、肉欲の歯止めを溶解させる。放出できない苦しみが、アスカの思考に亀裂を入れる。

お願いすれば聞き届けてくれるのではないだろうか。

何しろ、色責めをしてくる奴等なのだ。血だか体液からして、無条件で女を昂ぶらせるときている。いやらしい事この上ない。きつと、女を悶えさせる事が大好きなのだ。だから、もつと悶えると言う事を示してやれば よくされたら叫んでしまう箇所を教えてやったら喜んで責める筈だ。どうして欲しいのかを伝えたら、その通りにするのはないか。

心のどこかでうるさい叫びが聞こえる気がした。

それはとても大事な事のような気もしたが、内容がよく分からなかった。

詳細を探ろうとすると、途端に意識がぼやけてしまう。

心の中に、畳み掛ける囁き声。

我慢することなどない。

発情状態では戦えないのだから。

敵に奉仕させて、スッキリしたところで殲滅すればいい。

どうせ、ここに人間はいない。

ならば、密室で道具を使って自慰をするのとどれ程の違いがあるのか。

自慰などは誰でもしている事ではないか。

自分はした事がないけれど、皆がしている事を今して何の不都合があるう。
魔女打倒、姫君奪還の目的さえ忘れなければいいではないか。
だから。

思考の腐食に気付かないまま、彼女は口を開いた。

「こ、こんな事をされても私は屈服などしないぞっ！ 例え、胸の中でこみ上げてくる何かを放出させられてもだ！」

裏返った勇ましい叫びだった。

挑発し、気持ちいい肉責めをさせようという浅ましさで満ちた内容だった。

言葉が通じるかという問題や、快感責め以外の報復が実行される可能性もあるのだが、それらは思い浮かばなかった。

シユルツ。

乳首の根元を戒めていた触手が解かれた。乳首の根元で堰き止められていた何かが、小さな肉ぽつちの中に流入していくのを、アスカは明確に感じた。

「で、出るっ！ はアあ、出るっ！」

待ちわびた瞬間が、もうすぐそこまで来ている。状況を忘れ、歓喜に身を委ねる彼女。次の瞬間、触手の先端が乳首の先端をツンツと弾いた。

「アアッー！」

ピューーーーーッ！

緑色の触手が巻きつきが緩んだ勃起乳首から、乳白色の液体が噴き出した。虹のように大きなアーチを描いて、遠くに向かって飛んでいく。

快感は想像以上だった。我慢し抜いた後の排尿感にも勝る放出快感。自分の芯が液体となつて出ていくかのような錯覚に捕らわれたが、その背徳感も息が詰まる性的な爽快感に拍車をかける。

触手相手におためごかしを絶叫してまで求めた快楽を、女剣士は存分に堪能している。乳房の中で触手が体液を噴出させた時と同じく、目の前が真っ白になり、意識が眩む。

そんな中でも、自分の身体から何が出ているのかは理解できた。

「ツ、母乳が、妊娠していないのに私の胸から母乳が出てるっ！止まらない！」

触手に遊ばれる内に体質が変化したのだろう。化け物に身体を作り変えられた。陰惨な事実ではあるのだが、そう思うと絶望感よりも被虐感が湧き、肉体の快楽が増幅する。

「はあああああああ.....」

また、恍惚とした深い溜め息。湯にでもどっぷり浸かっているかのように、女剣士の顔は緩みきつっている。

ジュブウウツツ！

まだ母乳が出ていた乳首へ、膨らみきった触手の先端が突き刺さった。乳房はこれまでと同じく螺旋状に締め上げられる。内部の肉圧が高まる中、盛り上がった筋の凸凹を纏った肉棒がグイグイと進んでいく。

「んあうっ、乳首が、コリコリと擦られて……………っ」

柔らかいが硬い肉の先端に、充血乳首が押しつぶされている。乳首への刺激は乳房の全体に広がって、噴乳を果たして落ち着き始めた身体に熱と疼きを生じさせる。

「ジュブツ！ ジュンツ！ ジュブブツ！ ニュジユウツ！」

出し入れが始まった。最初の時に勝るとも劣らない猛烈な突き込みが繰り返される。

「んっ、激しいっ、そんな、だめだっ、そんなに強くされては、んあああああっ！」

弱小生物の所作であるのに、突かれる振動が頭の芯まで響いてくる。やはり力強い。刀を一閃させれば容易に切り捨てられる存在が、自分よりも遅く思えて仕方がない。

「こ、交互にされては、んんツ！」

右と左、全く同じに動いていた触手達が、右に深々と差し込まれたら左が引き、左が最も奥まで侵入したら右が離れるという風に、交互に突き始めた。一回の突き込みの威力は左右同時にされる場合に劣るが、一息つく事もできない連続攻撃は強烈だった。

「あうっ、擦れるっ、ふうんう、あああ……………ああ……………」

突かれる衝撃だけでなく、表面から隆起している凹凸で擦られるのも堪らない。媚薬体

液で敏感にされ、化け物にしかできない乳愛撫で蕩けさせられた乳房は、セックス慣れした女のものと同色ない貪欲さを示している。

擦られる度に起きる乳悦が、頭をじーんと痺れさせる。鬱血の赤い筋ができ、異形の形が刻まれる強さで肉果実を締めつけられているというのに、痛みよりも甘ったるい恍惚感を感じてしまう。

「あふっ、んんっ、はううんっ……！」

アス力は鼻をならして触手に身を任せている。触手の白濁を纏う裸身は、興奮で真っ赤に染まっていた。その表面には玉の汗が無数に浮かんでいて、肌に情交の色ツヤをもたらししている。うっすらと割れた腹筋と縦長のお臍は、氣息奄々の状態を反映してせわしなく上下している。

「ああ、また膨らんで……出すのか……また出すんだな……」

乳房の中で暴れる触手の変化を感じ取り、彼女は独りごちる。昂ぶった自分の体温よりも遥かに熱く、粘着質に富んだネトネトの濁液が胸の中で弾ける感触が、自然と想起された。感触だけでなく、鼻が曲がりそうな強烈な生臭さも鼻腔に蘇る。むわっとした白濁の蒸気が顔に当たる錯覚さえ覚える。

胸の奥がきゅんと疼いた。心臓の鼓動がどんどん速くなっていく。

「第一章 触手に植えつけられる乳悦」
「だせっ、お前の臭くてドロドロの体液を思う存分だしてみろっ！」

考えて言った言葉ではない。反射的に口から飛び出た命令だった。だが、言い終わると身体がふわりと軽くなった。

その言葉に応じたかのように、触手の抜き差しが加速する。左右共に息を合わせて、猛烈な勢いでガンガン突き込んで来る。

「私も出すぞっ、ああ乳首が膨れて……………出る、出るう……………んくうっ！」

ひっきりなしに受ける刺激は射乳を促している。乳房の内部を走る細い乳腺が、こみ上げてくる母乳でタップタップになっている様子が頭に浮かぶ。胸に感じる重い圧迫感を考慮すれば、タップタップどころか拡張しきっているのかも知れない。

「出したいっ、早く、うんんっ……………」

その状態で母乳を開放したら、水圧で乳腺が擦られる快感はどれほどのものだろうか。それだけが思考に上ってくる。

「ああ、出るうっ、はあああっ……………ああ、早くだせっ、くううう　　ツウ！　　ああ、出る、出るっ、出るうっ！　お前もだせえっ！」

ドビユウウウウ！　ドクドクドクドクドクツツツツツ！

ビクビクビクビクビクビクビクビクビクビクツツ！

叫んだ刹那、心臓の手前までめり込んだ触手達が汚らしい濁液を開放した。それとほぼ同時に、アスカが母乳を噴き出した。

しなやかな裸身がのけぞり、宙空で痙攣する。乳房はそんな反応とは独立的に、母乳を噴出させている。

二度目の噴出は一度目よりも快感だった。媚薬体液をしつこくすり込まれた事により、乳腺までもが性器に生まれ変わったのか。狭い肉管の中を母乳が駆け上がっていく事が、目が眩む快感を生み出している。

「あふあああつ！ 出るっ、出てるうっ！ 止まらないっ！ んあああああああ！」
声の限りに叫ぶ女剣士。

ビュルルルルル！ ビュツ、ビュツ、ビュルルルルウウウウウ！

乳首は、粘っこい触手体液を受け止めると同時に母乳を放出していたのだが、数瞬のせめぎ合いの末に母乳が競り勝った。

射乳の勢いに負けた触手が、遙か遠くに飛んでいった。どんな揺れでもものともしなかつたというのに、その飛んでいきようは至極あつけないものだった。しかし、地面に落ちても、吐き出した体液の糸はアスカの乳房に繋がっていた。

「あうう……んあああ……んふうん！」

乳白色の液体が、乳房の内部を広げるだけ広げて出て行っている。身体中に広がっていった熱も疼きも、全て射乳快感へと変換されているかのように気持ちよくて堪らない。

「第一章 触手に植えつけられる乳悦」
「はあああ………なんて快感なんだ………ああ………」

ドサリッ。

乳放出を終えたアスカが、ガクリと膝をついた。そのまま地面に仰向けに倒れ込む。冷えた草が、火照った身体に心地よかった。熱が引いていき、肉欲でぼやけていた頭の中が鮮明になっていく。彼女はハツとした。

「拘束が解けたのか？」

理解した後は早かった。転がっていた丸薬をひつつかみ、飲み込む。身体は瞬く間に回復した。身体を苛んでいた何もかもが嘘の様に消えていく。

「よし、いけるぞ」

附着する汚液を手で簡単に拭う。防護服を引きずる半裸では動き難いと判断したため、女剣士は素早くフンドシー丁になった。そこでゴーレムを一瞥。相手に反応はない。彫像のように固まったままだ。

巨大魔法生物には構わず、駆けて刀を拾う。その後、這い寄っていた触手達に向かった。化け物達に刀を振り上げた瞬間、無害な愛玩動物を殺すような後ろめたさを感じたが、かぶりを振って振り下ろした。

ドシン、ドシン……

地面を揺るがす震動。目を向けると、ようやく事態に気が付いたらしいウッドゴーレムがのろのろと近づいていた。アスカは、ゴーレム内の伏兵に注意しながら当初の作戦通り

に動き、敵を殲滅した。

「酷い有様だな」

全てを片付けた女剣士は身繕いをした。まずは、顔や胸に付着した不快な体液を手拭いで拭いた。それが終わると、フンドシー一枚の姿で防護服をはたいて触手体液を振り払う。服を着終えたら、身体の状態に装備品の残数と状況を確認する。心身が濃厚な倦怠感に包まれていて酷く重苦しい。その上、生命線の丸薬は尽きていた。

「一旦戻るか。予想外のダメージを負い、丸薬も尽きたのだから」

断腸の思いだった。無事に帰れても、また森に挑めば厄介な触手の相手を強いられる可能性がある。

そう考えた時、触手相手に晒した痴態の記憶が頭を掠めた。纏わりつかれていた感触がまだ肌に残っている。特に乳首が著しい。ふと、母乳が噴き出た時の事が頭に浮かんだ。それだけで、乳房だけでなく股間もキュンと蠢いた。

「私はまだまだ未熟なのだな……」

アスカは嘆息すると踵を返した。すると。

「そなたの帰参を、わらわは許容しておらん」

威圧感たっぷりの、落ち着いた低い声が木霊した。

アスカが周囲を見回すより先に、彼女の視界が白光で埋め尽くされた。

第一章 魔女に刻まれる牡悦

光が収まった。視界が元に戻っていく。

「ここは……あの屋敷の中か」

やたら広いホール。すぐ後に入り口と思しき扉がある。古めかしいが凝った装飾が施されていて高級そうだ。階段の下や壁にも壺や絵画と言った芸術品が配置されているが、同じく安物とは輝きが違う。周囲を隈なく照らす豪華なシャンデリアには、蝋燭やランプの温もりある明かりでなく、冷たさを感じる白い魔法光が灯っている。

「ようこそ。青光のアスカ」

いつの間にかホール中央に女がいた。額に嵌めたサークレットが印象的だ。丸い眉とやや垂れた目。柔和な顔立ちをしている。見た目は優しそうな麗人だが、瞳に宿る輝きは苛烈で、他者の侮りを許さないと告げている。

身体はスレンダーなもの、胸もお尻も熟れており、ウエストもきゅっと括れている。身に着ける衣装は露出度の高い漆黒のドレスだ。身体にぴったりくっついて、彼女の魅力的なラインをくつきりと浮かび上がらせている。衣装の縁には金色の糸で紋様があしらわれている、それが気品を追加している。

「ここが、お前の目指していた魔女の巣だ」

言う魔女が、横にも前にも突き出た豊満な胸を反らした。V字にカットされた胸元の中では乳房同士が押し合っていて、深い谷間が形成されている。

胸の下はダイヤモンド形にくりぬかれており、スツと引き締まったお腹と縦長のお臍が露になっている。わき腹とお尻の熟れ具合が形作る括れも相まって、同性のアスカも見入ってしまう造形美だった。

肩の丸さは特にそうだ。女性らしい柔和な曲線で、無骨な女剣士には決して得られない魅惑的なもの。

そんな彼女はワインレッドのマントを羽織ってもいた。肉の芸術品といった容姿と、その容姿を上品に際立たせる衣装。それらに追加されたマントは、女王と言っても差し支えない硬質さと威厳を付加している。

「外の様子はずつと見ていた。感服したぞ。お主の全てにな」

声も喋り方も優雅だった。まるで王族である。

「お前が魔じよ……いや、あなたがソフィリア姫をかどわかしたと？」

魔女と言いかけて止めた。目の前の人物を魔女と呼ぶのは失礼だと思ったからだ。

「初対面の人間を魔女と呼ぶのに抵抗があるか？ 律儀よな。だが、魔女と呼んで構わぬ

ぞ。その呼び方は気に入っておる」

柔らかい笑みを浮かべて続ける。

「いかにも。わらわが魔女ミレディー・ミラボーン。ソフィリア姫を浚った当人であり首魁だ。蛇足を言わせて貰うと、支配した妖魔や魔法生物を放っておるのも、お前を手こずらせた触手やゴーレムを作り、操っていたのもわらわだ」

何となく、「どうだ！」と言わんばかりに、胸の反り具合が増した。

「やはり。聞きしに勝る魔力。まさに稀代の大魔女です」

取り合えず調子を合わせる。噂通り一筋縄ではいかなそうだが、話合う余地はあるように思えた。話し合いで済ませられるのならそれでもいいとアスカは考え始めている。彼女は無闇に力を振るうのを好まない性格なのだ。

「ところで、姫様をお返し頂けませんか。多くの人間が心を痛めております」

他愛ないやりとりをしながら機嫌を伺い、切り出した。

「断る」

即答だった。にべもない。だが、それで機嫌を悪くしたという様子はない。

「わらわの足元にも及ばない愚図が『賢者』扱いというのは、今思い出しても腹立たしくての。それに何より、あの姫を手元においておくとか何かと楽しめる」

そこで一拍置き、ネチリとした視線で。

「お前が来たのも、あの姫を虜にしているからこそだからな」

「どうすれば、解放して頂けるのでしょうか」

「そんな方法は、あるとすれば一つだけだろうよ。お前がここへ来るまでにしようとしていた手段だ。わらわの眷属どもにとったものと同じものだ」

瞳に獰猛な光が広がっている。

「それしかないのですか……」

溜め息をつくアスカ。剣を抜く。

「始める前に提案がある」

目の鋭さは緩んでいないが、親しげな口調で言葉を紡ぐ。

「アスカよ。わらわの女にならぬか？」

「女……ですか？ あなたの情婦にでもなれと？」

「情婦でなく愛人だな。側室でも構わんか」

女剣士の眉間に皺が寄った。

「まさか。あなたは女で私も女だ」

魔女の眉尻がピクンと跳ねた。

「ふむ……呑んでくれるのなら見返りに糸目はつけんぞ。望む物は何でもやろう。金

品でも伝説の装備でも好みの男でも……力でも危険でも何でもだ」

「お断りする」

齒に衣をきせないで、きつぱりと断言する。もう猫かぶりはいいだろう。彼女は本性を見せているのだから。

ぞんざいな言い方をしたが、それで気分を害した様子はない。ただ、返事の内容に落胆している風ではあったが。

「ならば力づくで奪うのみだ……お前の心も……身体もな」

締め括りの言葉と共に、魔女が纏う空気が冷たくなっていく。

「お前が握る獲物はカタナと言う物だな。遙か東方の文化が生み出した剣だ。わらわの眷属を容易に切り裂いていた所を見ると、かなりの業物だ。その上……」

何もかもお見通しとばかりに、淀みなく続ける。

「魔力も帯びている。わらわの肉体は常人離れしているが、それでも十分斬れるだろう。

つまり、お前にも勝機があると言う事だ」

アスカが駆け出した。相手までは目算で二十メートル程。『青光』という渾名がつけられた俊足の剣士が本気になれば、瞬き数回分の時間で到達する。

魔女の口が小さく動いた。続いて手を前にかざす。その刹那、鋭い風切り音。駆けるアスカへ迫る。しかし、音はすれども飛来する物体は目に映らない。

異常な事態だが、女剣士は眉一つ動かさない。横に飛ぶ。音はアスカがいた空間を貫いて尚も直進していった。

迫っていた音はナイフが飛んできてくるようなものだった。おそらくは空気を圧縮させて放ったのだろう。

魔女の口に注意しつつ、その周囲を走る。次々飛来する不可視の刃をかわしながら少しずつ距離を詰め、刀の間合いに入れようとする。

「見えなくとも気配だけで避けるとは。そう言えば触手どもに囲まれた時も、まるで背中に目があるような動き方をしておったな」

魔女は狩人の目で笑う。確実に距離が狭まり、殺される可能性が高くなっているというのに、狼狽するどころか汗一つかいていない。

（もう少しだ）

あと数歩前に出れば、呪文詠唱が終わるよりも早く斬りつけられる。その事を気取られる危険を低めるために、これまでよりも前に出る速度を遅くする。爪の先程の距離ずつ間合いを削っていく。

「どうした。もう前へは進めないか？」

魔女は同じ攻撃を繰り返している。自分の魔力が尽きる前に、剣士の体力と集中力が切れるとでも確信しているのだろう。

（よし、今だ！）

いいタイミングが訪れた。ホールに来てからは最大限の力で床を蹴り、爆発的な瞬発力

で魔女に肉薄する。

狙いは細い括れ。その倍以上は太い大木でも一刀で斬り倒せる彼女に、肉と骨の単純な混合物など斬れない道理はない。刀が軌跡上に腰を捕らえ。

ズザザザッ！

女剣士は真横に飛んだ。無理な軌道修正だったために、まともに着地できず地面を舐める。だが、飛んだ瞬間に放り捨てた刀をすぐに拾って構え直す。

見据える先には触手の壁ができていた。森の中で煮え湯を飲ませたあの異形達。そのまま切りつけていても魔女は無傷だったろう。対するアス力は噴き出した体液をまともに浴びていた。

大きく離れ、化け物でできた防壁を見つめるアス力。ほどなくして、全ての触手は魔女が纏う漆黒のドレスへと吸い込まれて消えた。

「ふふ、よく避けた。本当に感心させられる」

罨が不発に終わり、その隠し種が看破されたと言うのに機嫌がよさそうだ。出した難問を解答された教師の顔で微笑んでいる。

「まいった。いやな予想が的中した」

剣士はずっと意識していた。自分の家にまで踏み込まれているというのに、戦力を出し惜しみするだろうか。まんまとホールという密室に入れたのに、なぜ妖魔なり魔法生物

なりをけしかけないのだろうか。

自慢げに聞かされた蛇足に対し、猛烈な違和感を感じもした。敵に手の内を知らせるなど愚の骨頂である。

「よりもよつて、媚毒満載触手の盾とは」

だから様子を見た。本気で斬りかかると見せかけた。受身を取れなかったのは演技ではなかったが。それ程の勢いで臨まねば手の内を見せはしなかったらう。

魔女は魔法を使わず、こちらをじっと見ている。アスカがどう出るのが楽しみで仕方ないと言う風だ。

「さて……」

アスカが頭を回転させる。触手の壁を斬り裂く事は容易だが、体液を浴びれば戦闘続行は不可能だ。回復の丸薬は使い切ったのだから。

媚毒が回る前に仕留めればいいとも考えない。そんな保証はどこにもないからだ。盾が破られたのを確認して後ろに下がれば、後は毒の回りを待てばよい。いかにも自尊心が高そうな魔女が「逃げ」などというみつともない事をするかはさておき、圧倒的に不利になるのという事実は不動である。

アスカは更に黙考し。

「打つ手なしか」

肺に溜まった空気を静かに吐いた。深い溜息だった。

「諦めると言うのか？ 興ざめだな。もつとしぶとい女だと見ていたのだが」

魔女は呪文詠唱を再開した。不可視の刃が再び剣士を襲う。今度は息つく暇のない連続攻撃だった。風を切り裂く音が幾つも聞こえてくる。

もう自分の所有物にする気は失せたらしい。容赦なく彼女の命を消そうとしている。一方の女剣士の動きは緩慢で、迷いに満ちて精彩を欠いている。

不可視の刃が彼女を捕らえだす。まず肩が裂けた。続いて右肩、左肩。突き刺さりはしなかったが、何度も身体に掠る。とうとうベルトが役目を果たせなくなり、胸当てが落ちた。金属のけたたましい接地音が鳴り響いた。

「見苦しい。早く死んでしまえ」

魔女は手を緩めない。反対に相変わらずもたもた逃げる彼女。防護服のそこかしこがり裂かれ、白い肌が外を覗く。流血している箇所もある。

しかしアスカは、苦悶の表情で逃げ回りながら、徐々に魔女との距離を狭めていた。

魔法を繰り出す女は気付いていない。警戒をしている様子もない。七面鳥撃ちに夢中になっっている。

（もう少しだ……もう少し……）

絶望している戦士を装い、慎重に近づくアスカ。

もう一步……もう半歩……もうゼロ歩！

それまでの脱力状態から、一瞬で全身に力を漲らせる。床を思い切り蹴った。

魔女は触手の障壁を展開。失望顔が一転し、心底嬉しそうに口元を開いている。

バサツ！

アスカは、ボロボロになって脱ぎ易くなった防護服を瞬時に脱ぎ、前方にかざした。濃紺服が醜い触手を包み込む。股間に禪のみと言う姿になった女剣士が刀を一閃。

斬り裂かれる触手の壁。

体液はアスカに届かない。撥水性能のある防護服が魔女の方へと跳ね返しているのだ。

アスカは防護服と一緒に肉の残骸を踏みつけ、奥にいる魔女へ跳んだ。

一閃。

ジュギャンツツツ！

熱した鉄板に水を垂らしたのと似たような耳障りな大音量。宙空で止まる刃。

「魔力防壁か！」

舌打ちしたい衝動を飲み込み、すぐさま二撃目を放つ女剣士。

魔女のドレスから新しい触手の群れが顔を出していた。この機会をものにしなれば、自分に勝ち目はない。

「砕け散れっ！」

心の底から念じつつ絶叫。深く踏み込む。

刀身が青白い光を放った。彼女の強い念が刃に籠もる魔力を増幅しているのだ。ジユギヤギヤガンツツツツツツ！

青光が不可視の障壁にぶつかり、貫通。薄布だけの女に迫る。次の瞬間、肉と骨を斬り裂く確かな手応え。

上がる白い血しぶき。

間に魔力障害物が挟まったせいで手元がずれ、斬り捨てるまでには至らなかったが致命傷にはなつた筈だ。

「な……に……」

呻いたのは女剣士。魔女ではない。

白い返り血を浴びたアスカの目が驚愕に見開かれる。血にしては、色は元より粘度も違う。遙かに粘つくく、これではまるで。

即座に跳び退る。だが、宙空に浮かんだ足を魔女ががちり掴んだ。その顔には死の影が全くない。凄絶な笑みを形作っている。

「素晴らしいぞ。やはり是非とも、わらわの女にしたい」

信じられない膂力でアスカを引っ張り、床に押し倒し、ぎゅっと抱きつく。斬られた箇所からドクドク漏れている白濁が女剣士の全身を染めていく。頬に頬擦りすらして塗りつ

ける念の入りようだ。

「ぐう……………あ……………」

身体が急速に熱くなる。四肢から力が漏れ出て行く。この感覚には覚えがある。森の中で不覚をとった時の事だ。これも媚毒体液なのだろう。だが、その時とは症状の進行速度も度合いも比較にならない。

「清廉かつ鋭利な面に赤みが差してきたなあ。可愛いぞお」

魔女の語尾が締まりをなくしている。可愛い盛りの子供を愛でる母親の声に似ていた。

「はなせ……………はなせえっ……………」

力を振り絞ってもがくが、魔女の細腕はビクともしない。握る刀を突き刺そうにも、密着されているせいでできない。よしんば傷をつける事ができても、媚薬体液が出てくるのでは火に油を注ぐのと同じだ。

「ふくよかな双胸だのお。まるでもぎ頃の果実だ。この肌のツヤと張り具合はどうだ。研鑽の日々を送る女武人ならではの輝きだのお。嫉妬を覚えてしまっぞ」

馬乗りになった魔女の手が這い回る。体液でヌメっていても構わず、隅々まで手跡をつけていく。その最中、斬られた身体が元に戻りつつあった。ドレスの中から現れる触手達が傷口に入り込み、血肉となつていているようなのだ。

「第二章 魔女に刻まれる牡悦」

「長い手足が優美な曲線を見せておるわい。これがしなつて、わらわの眷属を殲滅し、わ

らわにもこの様な大傷をつけたのだなあ」

汗でしっとりした脚を撫でた後、上腕から手の指先までを頬擦りする。

「これはフンドシと言う物だな。カタナを生み出した文化圏の股布だと聞く。大抵は男がすると言う話だが、凜々しいお主にもよう似合っておるのお」

発情させられているせいで、禪は肌にびったりくっついていていた。充血して膨らんだ花弁の形を浮き上がらせている。

愛蜜はコンコンと湧き出ている。股布を濡らし切っただけで止まっていない。股間のすぐ下の床に、粘液の水溜りができている。その水溜りには、アスカの肌を伝って落ちた魔女の白濁体液が混ざっている。

ぐっしりと濡れた禪の股間に顔を埋め、スリスリと左右に顔を振る魔女。顔がべとべとになっても微笑みながら続けている。

敏感になった大陰唇に硬い鼻先が触れると、間に布が挟まっているというのに、アスカの体内を甘い電流が駆け巡った。

平素でも敏感な肉芽はもっと酷かった。強制興奮でぷっくり膨れた分だけ、刺激にも鋭敏になっており、魔女の鼻先が触れただけでもギクンと背中が仰け反った。相手は愉快そうに目を細めながら、形よく尖った鼻のてっぺんで淫芽を執拗に擦り立てた。

「くっ……あ……あ………か、身体が………んあッ！」

媚液に冒された身体は、今や燃えているように熱くなっている。炎に包まれているようだ。そして性感に敏感。魔女の巧みなスキンシップを受けた箇所には、例外なく甘い痺れが起こり、溜まっていく。

「ういやつめ」

魔女の身体がすっかり元に戻った。切り裂かれたドレスもだ。彼女は何事もなかったかのように立ち上がる。

一方のアスカは白濁の海で仰向けに倒れたままだ。切磋琢磨する武人の肉体美と実った女の性美を同居させる女剣士は、禪一丁というあられもない姿。投げ出された手足と、時々ヒクつく身体が無様さに拍車をかけている。

身体には、ケーキにかけるソースのようにドス白い粘液が満遍なくかけられている。天井を向いても崩れない、張りに富んだ肉果実には特にべっとり付着しており、その深い谷間には大量になだれ込んでいる。

隙間から覗く肌は汗でツヤめき赤らんでおり、彼女を苛む甚だしい身体の興奮度合いを示している。身体の熱と媚薬体液の熱により媚液が白い湯気となつてくゆる様は、まるでアスカが、できたての上等な料理であるかのように見せている。

「では、儀式を始めようかのう」

白濁の海に沈む女剣士を見下ろしながら悠然と手をかけ、何事かを呟く。

周囲が薄暗くなった。煌々と光っていたシャンデリアに紫色の光が灯る。変異した空間のそこかしこから、おびただしい数の触手が這い出てくる。

朦朧とする意識の中でアスカは思った。自分は遊ばれていたのだと。始めからこんな魔法を使っていたら、剣だけが頼みの女など容易に倒せた筈なのに。

ままならない身体に鞭打って、女剣士は寝返りをうってうつぶせに。白粘液の又ト又ト感が不快だったものの構っていられない。むせかえる青臭さに襲われても、気力を振り絞る。そうして多大な苦勞をかけて四つんばいになった。まだ刀を握り締めて。

「ほう、まだあがくか。大した胆力だ。ますます気に入った」

魔女が呪文を唱えると、アスカの身体が独りでにYの字に立った。

「くっ、魔法か……！」

分かっていてもどうしようもなかった。見えない力で身体の至る所を押さえつけられているように、自分の意思では指一本自由に動かせない。

両手首へ向かって天井から触手が降りてきた。長い環形型のそれは手首に巻きつく。毒々しい緑と桃色がひしめく中で、白濁塗れの敗北女剣士が触手に繋がれている。

「いい眺めだの」

魔女は笑みを浮かべてそれを眺めている。獲物を完全に捕獲した狩人さながらに。

「う……………見るなあ……………」

いつもは凜々しい顔には、発情のピンク色がかかっている。その肌には白い粘液が。しかし、意思を込められる箇所は別だ。力を失わずに深い皺ができている目尻、食いしばる事で覗く白い歯。彼女が戦いを止めていない事の証左か。

輝きを失わない目は魔女に向けられているのだが、女剣士は周囲の触手達も意識している。彼女の身体を拘束するものもいるが、殆どの触手達はピタリと静止して、虜囚の美体を凝視している。

ただし、凝視していると言っても、それは彼女の判断だ。触手には目などありはしないのだが、どいつも一様に先端を向けている。

顎に伝った粘っこい雫が、喉を這って胸元に進んでいく。敏感になっている身体は、一部始終を感知し、背中が栗立ってしまう。

「乳輪と乳首がぶつくりだの……………おうおう、こんなにビクビクと震えて。いくら発情させられたからと言っても、屋敷の外で散々可愛がられたばかりだと言うのに。まだまだ物欲しそうにしておるわ」

魔女が形のよい赤い唇を近づける。

「近づくな……………んあっ！」

ちゅっ、ちゅむ、れるんれるん、んくんくっ、はむっ、ちゅっ。

粘液塗れの右乳房を両手で包み込み、掬う。口の高さまで持ち上げると慈しむように勃

起乳首を口に含んだ。生温かい口内に迎え入れると、唾液を乗せた舌で乳輪と乳首に絡みついた白濁を拭う。その所作は至極丁寧だ。荒々しさなど欠片もない。

「わらわの白い血で濡れたここを、綺麗にしてやろう。んっ……こくん……」

拭った濁液を、唾液と混ぜて飲み下している。乳輪ごと乳首を口内に取り込んだまま、魔女の白くて細い喉が何度も鳴った。異形ひしめく空間には不似合いな、上品な嚙下音が静かに大気を揺らす。

「くうっ……ああ……乳首がつ、乳輪が　ツア！」

アスカの背中がグンと仰け反り、瑞々しい肉洋梨が前に突き出る。

舌愛撫を受ける肉は更に赤熱する。感じやすくなっている身体は、熱が上昇するのに比例して更に敏感になっていく。舌のザラつきの一片一片が乳輪や乳首のどの部分を擦っているのかが分かってしまう。

（私の胸が、隈なく魔女の舌に足跡をつけられている……！）

嘗め回ったという結果だけではない。舌の微細な凹凸により感じさせられている甘い摩擦感は、とても鮮明だ。忘れたくても忘れられないのではないだろうか。

ちゅっっ、ちゅるるるっ、んくっ……はむっ、ちゅっっ。

「くあっ！　吸うなああ！」

上品な顔がみつともなく歪むのも気にせず、頬を凹ませて肉ぽっちを吸い立てる魔女。

吸うだけでなく、尖らせた舌先で乳首の先端をレロレロと舐めてもいる。それは息が続く限り繰り返され、息継ぎをした後も続いた。

「くくく、乳首がコリコリに凝り固まっておるぞ……んっ……わらわの口で悦楽を感じてくれておるのだな……あんなに強い女剣士が、舌一枚にこんなに震えさせられて」
魔女の端正な顔が、勝ち誇ってニヤついている。

「くう、そ、そんな事は……たかが胸を舐められただけ　ッ　ああ！」

氣息奄々の反論も終わりまでできなかつた。乳首を啜えたまま、魔女が首を後ろに引いたのだ。胸元から突つた肉果実が前方に引っ張られ、紡錘形にひしゃげている。

「うあああ！　は、はな……せううつつ！」

興奮で張り詰めていた肉房が伸ばされて、白濁塗れの表皮が引きつる。その些細な振動にさえも胸の中が熱くなつていく。

ズクン！　ズクン！　ズクン！　ズクン！

「あ………　ああ………　胸の奥から………」

母乳がせり上がってくる感覚。ここに来る直前に、散々味わつた肉の記憶が蘇る。

「乳が湧いてくるのだな。触手の体液を肉の先にたんまり浴びせられた事で、妊娠せずとも母乳が出る体質になつたのだ。性感を感じていれば感じていられるほど、多量にできるようになつておる。存分によがり、たっぷりだすがよいぞ」

両手で二つの肉果実を中央に寄せ、充血しきった乳首を二つとも口内に入れる。そうして、乳飲み子のように乳首を吸い立てる。

「んあぁッー！ー！」

魔女は、たわわな乳果実に開いた手の平を乗せると、牛の乳搾りの要領で奥から順に指で握り締めていく。屋敷の前で触手が披露したのと同じ所作だが、人の手　しかも倒そうとした敵に牝牛扱いされているという事実が屈辱を感じさせる。

「そ、そんな事をして無駄だ………私は、出さないぞ………」

搾られる度に、叫びだしたくなるほどの愉悦が胸の中で反響するが、歯を食い縛って啖呵を切る女剣士。だが。

ちゅっつ、ぎゅち、ぎゅにゅちっ！　ブジュジュジュツ、ギユリッ！

「んッアアア……！」

男を凌駕する握力で胸を搾られ、美しい容姿からは想像できない肺活量で乳首を吸われた。目の前で星が散り、気付いた時には絶叫していた。

胸の中が煮えたぎり、まるで全身が強烈に甘い電流で打たれたようだった。その猛烈な刺激の中に、なけなしの意地などはドロドロに溶解していく。

「恥ずかしがるな、アスカよ。本当は出したいのだろう？　気持ちよく、母乳を開放したのであるう？　それとも、本当に出したくないのか？」

邪ではあるものの澄んだ瞳が女剣士の瞳をじつと覗き込む。何故か目を逸らせない。アスカの瞳に、彼女の双眸と、額の中央で輝く宝石の緑光が鮮明に映し出される。

問われた瞬間、森の中で母乳を噴き出させた時の事が脳裏に蘇った。その光景だけでなく、その時に感じた乳悦までもが思い出される。

あの、魂までもが緩やかに蕩けていく妖しい快感。

「う……………ああ……………」

アスカは首を振れなかった。

思ってしまったのだ。もしも、首を縦に振ってそのまま放置されてしまったら、この肉の疼きはどうなるのか。持て余す欲求に身を焦がされ続けたらどれほどの苦しみなのか。

研鑽を続ける中で、苦しみと痛みは付いて回った。女剣士はそれに慣れ、耐えられる性根を獲得している。

しかし、快感は別だ。昨日まで体験した事がなかっただけに耐性がない。身体を蝕む甘い痛苦が解消されないと考えると恐ろしくなる。そして、解消される時の、心が融解していくような甘美感を考えると。

「ふふ、大人しくなったな。正直な娘だ」

女剣士は葛藤している。戦士としての矜持と肉悦と。口が無意味にパクパク動く。苦しげな表情を浮かべているが身体は反抗を示さない。

無抵抗な彼女を魔女が貪る。乳房を搾る強さも、乳首をちゅぱちゅぱと吸い上げる勢いも増していく。多くの異形が見守る中、妖女は女剣士に噴乳を迫る。

「んああ……………あううう……………くうっ！」

少しずつ、アスカの口から嬌声が漏れ始める。抵抗の言葉はでない。しかし、行為を完全に受け入れていると言う訳ではない。

白濁体液が飛び散っている顔は上気しているものの、目尻と眉尻には皺が寄り、喘ぎの合間に口が引き結ばれ、悔しそうに歪んでいる。

(こんな事、異常だと分かっているのに……………嫌だと思いつけない……………)

胸の奥からこみあげてくる圧倒的な圧迫感が心地いい。乳房の中に張り巡らされた乳腺が大量の母乳で拡張されている感覚が堪らない。

「ちゅぱっ、ほうら、もう少しだな。こんなに乳が腫れて、ビクついて……………ちゅるっ、まるで射精前の男根だ……………乳首は亀頭そのものだ……………ちゅっっ」

膨らみきつて普段の何倍も肥大化した乳首に唾液をたっぷり塗りつけて吸う。魂までもが魔女の体内に吸い込まれているような魔悦が背筋を撫でる。

「んっ……………ああ……………あ……………出る……………出るうっ……………」

女剣士の口が「あ」の字に広がっていく。独りで足指が丸まり、無機質な床がギリッギリと引っかかれる。

「そうだ、出すがいい。たつぷりと……心ゆくまで。そうして、わらわにお前の乳を飲ませておくれ……全て飲み干してやるぞ」

ジューーーーー

人並み外れた肺活量を駆使し、魔女が乳首を吸い上げた。暴風の中でたなびく旗と同じく翻弄される肉頭。妖女の柔らかい唇に何度も擦られ、舌のザラつきでレロレロとしつこく磨かれて。

「ああああああッ！」

アスカの手足が突っ張って 硬直。同時に、乳首が限界を迎えた。おびただしい量の母乳が敵の口内を満たしていく。

「んぐんぐつ、んむつ、熟したくだものよりも甘い汁だ。舌にずっしりとくる重量感も飲み応えを増させてくれる……ごくごく……」

言葉の通り、魔女は一滴残らず体内に流し込む気らしい。前に踏み込んで肉房の先端を深く啜え込んでいる。口の端から零れた分が、筋となって顎に伝っているが筋の太さは糸程度。床に滴る量はごくごく少ない。

「ああ……はううう……くふうあ……！」

放出快感と敏感な部分を吸われる快感。それに、殺そうとした敵に射乳をさせられた拳句に、出た体液を嬉々として飲まれる倒錯感。

触手相手にも似たような気持ちになったが、今の相手は知性ある女性。その分だけ湧き上がる暗い悦楽も大きかった。

ちゅぱんっ。

ほどなくして、魔女の口が離れた。母乳を出し終えて徐々に小さくなっていく乳首と彼女の口が乳汁混じりの唾液の糸で繋がっている。

「美味であったぞ。お前も、存分に快感を感じて……よかったであろう？」

指の先で唇と口元をなぞり、付着した乳液を拭き取り口に運ぶ。行儀の悪い行為ではあるのだが、砂糖菓子の粉を舐める子供とは違い優雅な仕草だった。

（私の母乳が魔女の体内に……）

アスカはその様子に見入っていた。他人の体液を嚙下しても嫌な顔一つせず、むしろ喜んでいいる風である。身体に巣くっていた疼きが解消された事により、正気づき始めているのだが、魔女の様子を見てみると親近感に似た感情を覚えてしまう。

（何を考えているっ、相手は敵だぞ！）

頭を振って戒めようとしても、湧き上がる感情は消えずに溜まっていく。と。

「どれ……乳を飲んだら、蜜も飲みたくなってきたな」

鼻先まで近づいて、細いががっしりした女剣士の両肩に手をかける魔女。

悠然と微笑んだ。口の端には乳白色の残滓がこびりついていた。彼女が自分の母乳を飲

んだ事を改めて思い知り、それと共にこれからどうするのであるうかと戸惑うアスカ。

魔女は両手に力を入れた。両肩を下に押し込もうとしている。やはり強力な膂力だ。射乳で消耗した身体では対抗できる訳がない。女剣士は力づくで膝をつかされた。すかさず無数の触手が這い寄ってきた。地面についた下腿に纏わりつきながら、床とぴったりくっついて枷のように固まる。

「なにを、する気だっ」

下半身に力を込めて身体を揺すっても、足を戒める触手はビクともしなかった。彫像のようにどっしりと固まっている。

魔女はアスカの背後に回ると仰向けに寝そべった。ぴったり合わさっていた太腿の谷間に手を差し入れて股を開きにかかる。

ググ……ググググ……ググッ。

白濁汁と女剣士自身の愛蜜でべちょねちよになっていた太腿が開かれていく。その間に自分の頭を割り込ませる魔女。

ぴちや……………ぴちや……………。

魔女の頬にアスカの愛液が垂れる。

「思った以上の濡れ具合だな。布に吸収しきれずに垂れておるわ……………んっ、ちゅむっ……………

……………ふふ、酸味が強くて美味しい蜜だ」

口を開いて滴る女蜜を受け止めると、舌の上でよく味わった後に飲み下す。

(飲まれてるっ、また私の体液が……………っ！)

見下ろせば、股の下から魔女の美貌がこちらを見上げている。またもや嫌な顔一つせず
に滴る汁を味わっている。

じわあああ〜っ。

まただ。また敵に情愛めいた感情を感じてしまう。それは胸の奥と股間をじんわりと炙
り、背筋をゾクゾク震わせている。

「よせっ、私のを飲むなあっ……………汚いだろうがあ……………」

「まさか。わらわにしてみれば、何にも勝る甘露だぞ」

両手を伸ばし、広げられた太腿の上部に掌を添える。逞しくも艶かしい大腿を、目を細
めて数回撫でると、お尻の方から手を絡ませて太腿の付け根を抱え込む。

「もつと味わわせておくれ……………」

常人離れた腕力に物を言わせ、自分の方へアスカの股間を下げる。

「くっ、離せ　ああ……………ああ……………」

腰に力を入れて踏ん張っても、少しずつ落下していく。愛液でぐっしより濡れた股の間
が魔女の鼻の頭に軽く触れた。そこへ舌が伸びてきた。濡れ布に浮き上がった大陰唇のワ
レメをそろっつと舐め上げる。

「くああつ！」

舐め上げは二度三度と続く。受ける度に、性器が引きつった震えを示す。腰から力が逃げ出していく。

「そうら、もう少しだそのまま腰を下ろすといい。遠慮はいらぬぞ」

魔女の声音は優しげだ。舌愛撫で蕩け始めた心身に染み入ってくる。そうした方がいいのではないかと思えてくる。

「さあ、わらわに身を委ねるのだ」

抱かれる腰が沈んでいく速度が速まった。アス力は泣き出しそうな顔をしていたが、抵抗はしない。

「いい子だ……存分に愛でてやろう……」

太腿の付け根に手を回したまま、ほっそりした指でぐしょぐしょの股布を左にずらす。ぼつてりした花卉が顔を出した。愛液でしとどに濡れており、興奮でヒクヒクと蠢いている。いかにも未使用品といったそれは形が整っていて、成熟した胸や尻とは対照的に青い果実を思わせる。

「うまそうな性器よのお。まだ男を知らぬ風であるのに、こんなに果汁が滴って」

蠕動する肉の間から、時々ぶしゅっと愛蜜が噴き出した。飛び散る雫は、間近で鑑賞している魔女の顔を汚す。

「み、みるなあ……………」

他人どころか自分でも殆ど見た事がない場所を凝視される上に、そこから漏れ出る発情汁を微笑んで受け止められている。屈辱的な状況だ。しかし、心の中には羞恥心とは違う感情が湧いている。自分の体液を飲まれている時に感じた、あの感情。

その証拠か。抗議するアスカの顔は悔しそうに歪んでいるが、その顔が纏う雰囲気は嬉しそうにも見える。

「ひいあつ！」

生温かくて又メル舌が肉唇を舐めだした。凹凸がある舌をべったりつけて、浮き出た曲線をゆつくりと這う。かと思えば、尖らせた舌先で何度も擦ってくる。

「柔らかいが仄かに硬いこの肉の感触。それに愛液の味が上乘せされ、なんとも舐め心地のいい事だ」

成熟した美貌が夢中で性器にむしゃぶりついている。女剣士の腰がビクビク震え、肉蜜が何度となくどぶつと飛び出る。女の汁で顔が汚されても魔女は微笑むだけ。

「どれ、そろそろ中の肉も味わうとしようか」

両手の人差し指をピンと伸ばし、散々舐めた大陰唇の頂上に添える。

「なっ……………！」

静止を求めるより早く、肉厚の唇がこじ開けられた。敵の瞳にサーモンピンクの肉花卉

が映し出される。

大陰唇を広げられている影響で小陰唇までもが左右に開いている。その間から、膣内の様子も覗けるようになっていた。中は蜜で濡れそぼっており、室内の鈍い光を受けてテラテラ光っている。びっしりある肉壁は、アスカの性的な興奮度合いを示すかのように、せわしなくヒクついている。

（見られてる……私の中をまじまじと……っ！）

女性器を暴かれた時以上の衝撃だった。だが、感じるのはショックだけでない。見られていると意識するほど、胸の中が妖しくざわめくのだ。

「これはまた……」

言葉を続けず、魔女は舌を伸ばした。口を大きく開け、唇と大陰唇とを限界まで密着させる。アスカの膣内の中に魔女の舌が侵入する。

にゆるり……じゅぶぶぶぶぶつつつ。

「はあああああ~~~~」

女剣士の顎がグンと上がった。半開きの口から舌が突き出て、長い長い嬌声も漏れた。熱っぽい吐息がとめどなく吐き出される。

ぬめる舌が内部に入ってくる感触は、おぞましさを甘ったるい痺れをもたらした。膣内を起点に全身へと波及していく。

「狭いな……やはり処女か」

膣口へ入って少しの場所　まるで膜で閉ざされているかのような狭い場所を、チロチ口と舐める魔女。何度もしつこく、自分の唾液を塗りつける。

「ふあっ……んっ……そんなにしつこく舐められたら……っ」

性器が熱くなっていく。甘い痺れも度合いを増して、腰から下の感覚が危うい。どろどろに溶けてしまいそうだ。その癖、性経験のなさを示す肉膜に受ける舌愛撫の存在感は大きかった。局所を舐められているだけなのに、全身をしゃぶられている錯覚に陥る。

れるれるる……じゅるるるっ、んぐんぐ。

ひとしきり処女膜を舐めると他の場所に移動した。肉襞の隙間を舌先でくすぐってまわり、次々に湧き出てくる愛液を口内で受け止める。喉が鳴る。その音は豪快で、躊躇いの意思などは微塵も含まれていない。

「ああっ……舐められて、飲まれてる……どうしてそんなに嬉しそうにできるんだ」
他人の体液など飲みたいものではない筈だ。だがそれ以前に、当人でさえも触れない場所に、口をつけるなど正気とは思えない。

「わらわはお前を欲しておる。それだけだ」

ジューーーーーッ！　ゴクンゴクンッ！　ブジュジュジュジュッ！　ングングッ！

一旦口を離れた後、唾液と愛液に塗れてヒクつく大陰唇に大口を開けてかぶりついた。

そして強烈な吸引。

「んはあああああつ！」

口淫でぐずぐずになった肉花壺が揺さぶられる。肉襷に付着していた愛蜜が、魔女の口の奥深くへと吸い込まれていく。母乳開放快感に似た吸悦は、自分の魂までもが吸われて食らわれている思いにさせる。

「んぐっ、お前の膣内を一瞬だけでも洩らしてやる、ちゅっ！」

大陰唇を広げていた指を離し、太腿の付け根をガツシリと抱え直す。頬だけで禪を脇にどけたまま、熱烈に吸い上げる。

愛液を洩らすなど無理だと思っただが、ひよっとしたらと思える勢い。自分の体液を喜んでする相手のその姿勢に、本当に吸い尽くして欲しいという思いがもたげてくる。

（どうしてそんな事を考えるのだ……魔女に身も心も捧げたいとも思っているのか……
……気を確かに持てアスカ！）

心の中に残る正気が叱咤するのだが、体液吸引快感は振り払えない。気を抜くと尻から力が抜け、開いた口の間から叫び声が上がってしまう。

「ふむ、こんなにしているのに潤いが消えぬとは……なかなか淫らだな」

あんなに吸われたというのに、魔女の口元はべちよべちよだった。

「ち、違っつ、私は淫らではないっ！」

剣士としての自分を否定するような言葉へ、声を張り上げていた。

「そうかな。ついさつき……デク人形どもに遊ばれる前までは、お前は確かに肉悦から遠い所にいた。しかしなあ」

股の下から、意味ありげな視線を寄越してくる。ネチリと心を触る目。

アスカは言葉に詰まった。少し前の事が想起される。媚薬体液で発情させられた拳句、相手が化け物なのをいい事に痴態を晒してしまった。そして今。魔女に快感責めされてわななしている。ここへ来た目的を忘れ、敵の愛撫に熱い叫びを繰り返している。自分の体液を飲み干す女に、温かい想いを感じている。

「理解したようだな」

黙りこくった様子に目を細める魔女。

「更なる深みを教えてやろう」

じゅぶつ。

「ひいっ！」

鈍い水音がしたかと思うと、後ろの穴が存在感で埋まっていく。魔女の指が尻穴に入ってきているのだ。

「そこは……だめだっ……ああッ！」

拒絶の言葉を聞いてもお構いなしに、ひんやりした指がズブズブと進んでくる。指は触

手のようにうねり、柔らかい指の腹や硬い爪が腸壁を引っかいている。繊細な内部を擦られているというのに痛みが起きない。舌で膣内を舐められていた時と同じような、心地よい感触が後ろの穴に満ちていく。

（何故だ、そんな所を指でまさぐられているのに、どうして気持ちいいんだ……！）

指が動く度に、ぴちゃぴちゃと言う粘着質な水音が起こっている。内部から滲み出ているのか、白濁媚液をたっぷり浴びせられた時に入ってしまったのかは分からないが。

いずれにしろ、後ろの肉穴を弄られて身体が快感を得ている現実是不変ならない。その異常性が、常識的な女剣士の心に強い衝撃を与えている。

れろんっ。

「はうッ………あああああッ！」

更に追い討ち。お尻の穴への指挿入で背筋が弓なりに仰け反っていた所に、女性器舐めが再開された。後ろの穴を弄りながら、肉花弁をがっぽりと啜え込んで舌を差し込んでい。処女膜まで舌先を突き刺し、狭い壁を下から上へ舐め上げる。

アスカのまあるい尻たぶがピクピク痙攣し、内股が断続的に引きつる。膣内からは愛液が間断なく湧いて出て、尻の水音の音量が増していく。

（頭が真っ白に……！）

意識にもやが降りてきて思考がおぼつかない。全身が燃えているように熱く、感覚が麻

痺しているかのように自分の身体が希薄に思える。それなのに、腰から下を蕩けさせている快感だけはやけに明確だ。

「はあ、はあ、はあ……ああ……くうああっ……」

「規格外のデク人形や触手どもをなぎ払う女剣士が、舌一枚と指一本で青息吐息か。余力がなさそうな外見だが、尻も膣もキュウキュウ締めつけてくる。達してしまいそうなのだ。いいぞ、わらわが最後まで面倒をみてやる。気兼ねなくイクがよい」

「『イク』……だと……？」

意味が分からなかった。

「そうだ、『イク』だ。今しがたや触手ども相手にお前が味わった境地も、これから体感する忘我の時間もその言葉で表現されるもの。覚えておくがいい」

魔女が女剣士の目を見据える。

「さあ、イク時間だ。イクがいいアスカ」

指の股で突つかえるまで入り込んだ丸い指先が、直腸の壁を優しく抉る。肉を隔てたその裏側では舌が踊っている。前からと後ろからの呼吸が合った責めが、アスカの肉体を追い立てる。

「うああっ、んんああああっ！」

『イク』と教えられた現象へ向かっていくアスカ。敵の手で、知らなかった所へ飛ばさ

れようとしている。

「イクのだアスカ、前と後ろの肉穴で悦楽を貪り、達してしまえ！」

「ああ……………アアー————ツ！」

ドプウツツツ！

膣内からドツと女蜜が溢れた。魔女は舌を引き抜き、抜いた舌を受け皿にして蜜を受け止める。そのまま口の奥へ流し込み、体内へ落とす。

アスカは目を剥いている。膝立ちの身体は真っ赤に染まり、小刻みに波打っている。

（これが、『イク』……………）

身体が溶けて消えていくような茫洋感。それが気持ちいい。

そう意識した瞬間、全身から力が抜けた。しつこくすり込まれた白濁が、噴き出す汗で薄まり、流されていく。

「くくく、堪能したか。どうだ？ わらわの女になりたくなっただであらう。首を振りさえ

すれば、毎日でも味わわせてやる」

襟を正して女剣士の前に立つと、膝立ちのまままで荒い息をしている彼女を見下ろしながら言葉投げかけた。

「つ……………」

文字通り心身が蕩ける甘い愉悦。これまで送ってきた、味気なくて辛い修行の日々では

決して体験できなかった感覚……。魅力的な境地……。

「アスカよ……」

手首を戒めていた触手がスルリと解けた。身体が自由になる。その彼女へ、魔女が手を差し伸べる。

「う……」

染み一つない滑らかな掌をじっと見つめるアスカ。身体が小刻みに震えている。魔女も彼女を上から見つめている。彫像のように動かない。そんな二人を、触手達が遠巻きに眺めている。

どれ位の時間が過ぎたのか。アスカの口が動いた。

「こと……わる……」

魔女の眉尻がピクンと跳ねた。

「なに？」

「断ると言ったのだ……」

苦しげに、だが決然と言い放った。

頷くだけで、あの肉悦を毎日与えられる。想像しただけで身体の芯から熱くなってくる誘惑だ。

しかし、そんな生涯は二十年近く続けてきた修行の日々や、剣士としての人生とは両立

できないだろう。

辛く厳しく、死にかけた事も一度や二度ではなかったが、長年続けてきた女剣士としての生き方は投げ出すには惜しいと思える。目くるめく愛欲の時間と剣士の時間を天秤にかければ、後者の方が僅かに傾く。そんな自分の性根にアス力は従ったのだ。

「ほう……」

アス力の瞳を覗き込む魔女。女剣士の目は快感にぼけていない。自分に挑んで来た時の輝きを取り戻していた。口が引き結ばれ、乾いた粘液のせいでテラテラではあるが、顔はとても凛々しく美しい。

「分かった。済まぬな、お前を見損なっていた」

胸の前に左手を運び、掌を水平にする。その状態で厳かに呪文を唱える。

「そして気に入り直した。ものにしたいたい気持ちが強まったぞ」

掌に肉棒が出現した。伸ばした中指の先から手の平の端までありそうな長さ、指を数本束ねたほどの太さ。色は黒ずんだ肌色。全身に、青い筋が何本も走っている。先端は傘のように張り出しており、他の部位が真珠大の瘤で凸凹しているのとは違い、表面がツルツルしている。男根に似たそれは、蛇のようにのたうち回してはいないが、魔女の手の上でビクビク震えている。

「第二章 魔女に刻まれる牡悦」

「それは一体……」

「すぐに分かる。すぐにな」

魔女がアスカの胸に手を添え、仰向けに押し倒した。股の間に身体をねじ込むと、ぐしよ濡れの禪を剥ぎ取る。

「な、何をつ！」

興奮で花開いた淫花が露になった。男を知らない清纯な肉花は、愛蜜に塗れてヒクついている。時々、その中央にサーモンピンクの肉ビラが見え隠れする。

「初めて全てを見るが……やはり綺麗な花だな。綺麗なだけでなく淫らで。こんなに花びらが腫れあがり、蜜をじくじく吐き出している。舌触りも蜜の味も、まだ舌の上に残っているぞ」

自分の女性器が舐め啜られた記憶が蘇る。肉にまでその感触が復活し、見られているだけなのに股間がじんわり火照ってくる。

「見るなあ……」

「恥ずかしそうだな。おそらくは自分自身でさえもろくに触れた事がないここを、あんなにしつこく舐めてやったのにまだ羞恥心を感じるか。可愛いぞ」

空いている手の指でチョコキを作ると大陰唇を左右に開く。内部の肉が丸見えになる。中は外側以上にテラテラな上に、ヒクつき具合も甚だしい。

「っう……」

唇を噛み締めるアス力。一度は通常状態に戻った息遣いが、徐々に荒くなっている。

「ま、また舐めるのか……？」

思わず質問していた。彼女の目は独りでに魔女の赤い唇を見ていた。訊ねられた時、口が開いて真っ赤な舌が現れた。唾液で濡れた舌は唇を軽く舐めたのだが、それを見たアス力の心臓がドクンと跳ねた。

「舐めて欲しいのか？ この気持ちのいい柔肉を舌で撫でて女汁をすする位なら、そうと望めば幾らでもしてやるがな」

親しげな微笑を浮かべて訊ねてくる。台詞には嘘を思わせる響きがない。ねだれば本当にしてくれそうだ。

「……だ、誰がっ……」

少しの間を置いて否定する。女剣士の語気は不必要に荒かった。

魔女はさして残念そうな顔をしない。剥き出しにした小陰唇に視線を戻し、その少し上を見る。血が流入してぷっくり膨れた陰核である。非興奮時の仮性包茎と同じく、上の僅かな部分だけが皮から抜け出して露出している。皮も肉も愛蜜と魔女の唾液を被り、濡れている。

「これはまた、立派な赤い真珠だのお」

大陰唇を広げていた二本の指をスライドさせて肉芽皮の端に置くと、ずり下ろした。

「何をす うああっ！」

陰芽の皮がズルリと剥かれ、裸にされた。皮がなくなった肉豆を魔女が凝視する。時々アスカへいやらしい笑みを向けてくる。他人の秘密を知るからこそできる、得意顔じみた笑顔だった。

アスカはますます唇を噛み締める。もう何度目だろうか。羞恥心で身体が燃えるように熱い。だが、その熱さが奇妙なほどに心地いい。

「今度は……そこを舐めるといふのか……？」

「いや。そんな手ぬるい事ではない。見ている」

ずっと持っていた、呪文で出現させた肉棒を振りかざす。振り下ろした。

丸みを帯びた先端とは逆の端は扁平であったのだが、その部分が剥き出しにされたクリトリスに衝突。充血し、敏感になっっていた肉芽がおぞましい触手の内部に呑み込まれた。

「くあああああっつっつっつっつっつッッッッッッッッッッッッッッッッッッッッッッッ！」

激しい絶叫。歴戦の女剣士の目が目一杯見開き、身体が大きく跳ね上がった。

柔らかくてぬめった肉に陰核がみっちり包まれた。包み込む肉壁はゆるゆると蠢き始めている。密着した肉粒へ向けて、とめどなく熱い体液が浴びせられる。体液には媚薬成分が含まれているか、包み込まれてやんわりと動かれるだけでも、そこを起点に全身へ性感が走り抜ける。

だが、それだけならまだ我慢できた筈だ。

熱過ぎるのだ。結合箇所が。何故か、ずっと昔に鍛冶場で見た、鉄が高熱でドロドロに溶かされている光景が頭に浮かんで消えない。

未だ嘗て感じた事のない衝撃に、身体が独りでに暴れ出す。しかしすぐ、何体もの触手達がたかつてきた。手首足首に絡みつき震える裸身を押さえつける。

「少しの辛抱だ。なに、身体を傷つけているのではない。傷つけてはな」
終了を心待ちにしているとわんばかりに、魔女が笑みを浮かべて見つめている。

「くお……………おお……………はあ、はあ……………」
やがて。鮮烈な衝撃が甘さを帯びてきた。

身体に残る強烈な衝撃の余波のせいで身体がビクンビクン震えるのに従い、取り付いた触手も揺れるのだが、それが妙に快感だった。まるで、棒触手がクリトリスの延長であるかのように、ひりつく気持ち良さを陰核に感じる。

「んああ……………はあっ……………ああ……………」
いつしか、アスカの腰が動いていた。両手首と両足首を緑や桃色の触手で床に縫い付けられている状態で、細い腰が上下左右にくねっている。風に揺れる草のように、そそり立つ棒触手も奔放に跳ねている。

「そろそろいいかのお」

アス力を拘束していた触手達が思い思いに退散する。仰向けに横たわるアス力の右隣に添い寝する魔女。その豊満な乳房を彼女の右腕に密着させ、なだらかな腹部を彼女のわき腹に、ムツチリした太腿を太腿に絡ませる。

「う……………」

呻くのとほぼ同時に、女剣士の股間に取り付いた触手がピーンとそそり立った。

「ふふ、わらわの身体でそんなに興奮してくれるか」

「な、なにを言って」

きゅっ…………。

「ひいつ！」

ほっそりした指が股間の肉触手を包み込む。ひんやりとした掌の体温。それでいて、上等な毛布に包まるのに勝る心地よさが腰の中にじんわり広がっていく。

「ハア、ハア、細くて柔らかくて、冷たい指が……………」

火照った部分を爽快にさせる。そう思った瞬間にハツとした。魔女が握るのは飽くまで股間に貼りついた触手だ。なのに、どうして自分が彼女の掌の感触を感じているのか。

「気付いたか」

鼻先で魔女が微笑んでいる。

「そいつはお前の陰核と融合したのだ。陰核がそのサイズまでに膨れたと考えて差し支え

はない。だから無論、これが受ける刺激はお前の身体にまで伝わるのだ」

しゅっ、しゅっ、しゅっ……。

握ったまま掌を上下させる魔女。植えつけられた肉棒は、魔女の手の中から頭二つ分は飛び出ている。その、先端である肉傘から根元までを白い手が規則正しく往復する。

「あう………はああああ………」

アスカの一部となった肉棒の先端から透明な汁がジクジク滲み出て、肉竿を伝って根元へ落ちていく。その途中にある魔女の白くて細い手にかかり、肉研磨を滑らかにする。

「ああうっっ！」

初めて味わう快感だった。胸を搾られて母乳が出る際の重く狂おしいものに似ているがこちらはより濃厚だ。性器を責められた時に勝るとも劣らない痺れが全身を包み込む。

魔女の手の中にある肉棒が一層張り詰めていく。心臓でも内臓されているかのようにドクドクと脈打っている。硬くそそり立ち、生命の息吹を撒き散らす肉竿が、妖女の白い手で扱われている。

「どうだ？ それは男が楽しむ快樂だ。気持ちいいだろう？ そら、わらわの身体の感触も一緒に味わうのだ」

勃起を擦りながら、豊かな身体を押し付けてくる。

「……っう………やめ………ろ………」

薄い布一枚を隔て、身体の柔らかさが密着している。始めは半身程度であったのだが、今では半ば覆い被さっている。洋梨型の肉房に、魔女の豊肉球がむにむにと当たる。

背筋が粟立った。相手が敵であるというのに、心の緊張が解けていく。

同時に、勃起の張り詰め度合いも上昇している。膨れれば膨れるほど、魔女の肉棒摩擦快感がより甘美なものになっていく。

「ふふふ、扱き甲斐のある男根だのお。こんなに太くて長くて、その上わらわの肉に素直に反応しておる。気持ちいいか、アスカよ」

「くっ、気持ちよくなど……っあッ！」

瞳に力を込めて否定しようとした矢先、魔女の親指の腹が先端をグリグリ抉った。汁を止めどなく噴くそこへ、指の腹の半分を埋めている。

苦痛はなかった。代わりに、落雷めいた鋭い刺激を感じる。不随意的に手が開いては閉じ、足の指が丸まってヒクついている。

「先走り汁がどんどん濃くなっていくのお。最初は透明だったのに、今では白いものが混じっている。出そうなのだなあ」

「でる……だと……？」

「そうだ。精液がでるのだ」

「馬鹿な……女の私から精液など……出る訳が……」

逃げようとしても、尻肉をがっしり掴まれていて逃げ出せない。掌に益々力が籠もり、ぎゅりつと握り締められる。

「うあ……………」

アス力は自分が捕食される気がした。

はむっ……………」

ゆっくりと降りてきた口が、先端の丸まりを呑み込んでいく。大きく開いていた口でもアス力の勃起にはギリギリだった。唇が肉幹の円周にべつとりかかり、舌が裏側をねつとり擦る。大きく張り出した肉傘にはそれだけで足らず、降下するに従い唇が巻き込まれていく。

「んああああッ！」

身体のほんの一部を唇と舌で包まれているというのに、まるで全身が呑み込まれているかのような錯覚を覚える。股間に目を向ければ、魔女は肉棒をズブズブと口の中に入れ続けていた。

唇と肉棒の隙間から唾液が垂れて、根元へ向かってつーつと垂れている。男根自体からも、元になった触手の性質からか汁が滲み出ている。見るからに粘着質で、それが増えるにつれ魔女の呑み込み速度が上がっている。

……………」
「ぐりゅっ。」

先端に硬い感触。まだ根元まで呑み込まれていないのだが、口内の終着点 喉奥についてしまったようだ。

魔女がえずく様子はない。こちらを上目遣いに見ている。正確にはこちらの瞳を。目が離せなかった。彼女の顔は紅潮しており、額に汗の玉が浮き出ている。サークレットの左右に陣取る髪が束になって張り付いていた。

頬はみつともなく窄められており、肉棒をきゆうきゆう締めつけている。その頬はもごもご動いているのだが、それは舌を左右に振って男根の裏側を執拗にねぶっているからだ。されるアスカのものには蜂蜜のように焼け付くような快感が蓄積していく。

こちらを見つめる顔のどこもが、超然とした女王には似つかわしくない淫蕩な姿を晒している。

んっ、んっ、じゅぼじゅぼっ、じゅるるっ！

こちらを見つめ、頬を窄めたままで頭を上下に振り始める魔女。髪が舞い、乱れるのもお構いなしに没頭する。柔らかさと硬さ、それにぬめりを帯びた喉奥に、何度も男根の先端がぶつけられる。

唇と舌が竿を締めつける手も緩んでいない。きゆうきゆう締めつけて竿の表面を隈なく研磨してくる。

「はあ、はあ、ああっ……………」

心の奥底まで忍び寄ってくる甘い衝撃が立て続けに襲ってくる。独りでに腰が跳ね上がった。してしまう。

ギユリユツ！

魔女の掌に力が籠もった。芸術品めいた造詣の手にしては信じられない力で、お尻を床に下げられる。反射的に腰が浮くことさえ許されず、一方的に快感を味わわれる。

「じゅるっ、んっ……肉棒が張り詰めて、苦しそうに呻いておるな、じゅぼじゅぼ、もう限界か。出そうなのだな」

魔女の言う通り、母乳噴出欲求に似た欲望が腰の中でうねっている。肉棒を刺激される事で、うねりが激しさを増していく。精液が出る身体になったという言葉を一度は否定したアスカだが、今はそんな気になれない。半ば以上、本当に射精してしまうのだと信じ始めている。

「わ、わたしの身体は……」

そして、肉棒の中で渦巻く欲求は、母乳のように単に出したいというものではない。何か、妖女の口内で出したいくて堪らない。肉竿を締め上げさせたまま、膨らみきったツルツルの先端を喉奥に擦り付けて出したいと思えて仕方がない。

股間に顔を埋めて頭を前後させている魔女の頭頂は酷く無防備だった。手を伸ばせば届き、掌で握り締める事も容易だろう。

「あう……………」

アスカの手が浮き 伸びた。丸い頭をガツシリ掴んで力づくで上下させる。魔女は抵抗しない。させるがままにしている。ただし、頬を深くへこませて、執拗に肉竿を締めつけ続ける。

じゅぼっ、じゅぼっ、じゅぶぶぶっ、んぐんぐっ、じゅっぽ、じゅるるるッ！

肉棒から滲み出る体液と魔女の唾液で、魔女の口を出入りするアスカのものはテラテラに光っている。口と棒が擦れる度に粘っこい水音が生まれては消えていく。妖女は時々吸引奉仕も行い、勃起をわななかせた。

「はあ……………出る……………もうすぐそこまで来ている……………」

うわ言のように呟きながら、ググツと膨らんでいく先端を喉奥に何度もぶつける。

「んむっ、出すといい、んくっ、出す時は『イク』と言うのだぞ、じゅぼっ」

奉仕を続けながら紡ぐ魔女の言葉には、抗い難い響きを感じた。

「ああ、イク……………出るう……………イク……………出るう……………」

射精の自己申告の合間に、命令された言葉が混じっている。『イク』という度に、女剣士の顔に浮かぶ恍惚が深さを増している。

最後の瞬間を感じ取った彼女は、上体を起こして魔女の頭を抱え込んだ。先端と喉奥を密着させてしつこく擦る。相手の事など頭になく、自分の悦楽だけを意識していた。

「イク……はうああ……イ……イクウウウウツツツツツツ！」
ビュルツ！ ドビュツ！ ビュルルルルツ、ビュ……！
我慢せず、アス力は吐き出す。望んだ通り、容赦なく、魔女の喉に。
アス力の腕の中で、妖女は放出される物を嚥下する。舌を蠢かせて張り出した境目や竿の裏側を舐めてより射精を促しながら。

「アアツ……！」

母乳噴出快感に勝るとも劣らない悦楽。誰かの温かい粘膜の中で果てる心地よさは、快感に輪をかける。もっと出したくて堪らなくなる。

アス力は魔女の頭を更に抱き締めて腰を振った。粘っこい水音が心を痺れさせる。女剣士は思う存分、気持ちがいい口の中で男の快楽を貪った。

「ああ……はあ……はあ……はあ……んっ、はあ……」

射精疲れで仰向けに倒れ込むアス力。胸がせわしなく上下している。

そこへ魔女が覗き込んできた。顔を少し傾けて口を大きく開ける。白く濁った粘液が舌一杯に広がっていた。

自分の身体から出た物を見せ付けられ、改めて自分の身体が変わってしまった事を思い知らされる。背中に冷たさを感じた時、

ゴクン……。

アス力が見たのを見た魔女が、口を閉じてそれを飲み込んだ。瞼を閉じ、首に手を当ててまるで喉で咀嚼するように。

「んっ……残り汁と思ったが、まだまだ粘着力が豊富だ……喉に絡んでなかなか落ちん」

唾液を送り込んで粘度を緩和させているのか、口がかすかに動く。

「喉を動かす度に、鼻に風味が上ってくる……粘っこさに見合ったイキのいい生臭さだ……身体が熱くなるぞ」

口淫していた顔は赤いだけでなく、汗でしっとり濡れている。風呂上りを思わせる美貌はドキリとするほど艶かしい。

「わ、わたしの体液を飲んで、あんな顔を……」

体液をすすられる時に感じる、情愛めいた感情がまた湧き起る。しかし、今度はより強い。股間の棒が芯から熱くなり、何度もビクンビクンと震えた。

「ふう……ようやく飲み下せた……射精はよかっただろう。これでお前は、女の喜びも男の欲も味わえる身体になった訳だ」

そこで言葉を切り、女剣士の股に目を向ける魔女。

「ほう、まだまだ物足りないか。流石、鍛えられた戦士は精力旺盛だ」

股間の物は天井に向かってそびえている。振り返ってはいるが、倒れる様子も萎む前兆も見受けられない。当のアス力は、魔女の口を見つめていた。再び口でねっとりと包まれ

て射精まで面倒を見て欲しいと思っってしまったている。

「……………う……………っ」
だが、ねだれる訳がない。殺そうとした敵に。自分の欲望処理を。

「何か言いたげだな。遠慮はいらないぞ。希望があるのなら言ってみろ」

魔女が言う。思わず甘えたくなる慈愛を感じさせる。殺されかけたというのに、嫌な顔ひとつせず敵の体液をすすり、快感を与えてくる魔女へ面はゆい思いを抱き始めたアス力には強烈な誘惑だった。

心臓が早鐘を打つ。喉元までおねだりの言葉がせり上がっている。だが、僅かに残る良心が歯止めとなり、色欲を吐露できない。

「希望はなしか」

と、興味をなくしたような顔の魔女。すつくと立ち上がる。

アス力は慌てた。このままでは放置されてしまうかも知れない。早く要望を口にしなければ永遠におあずけをくってしまう。多大な努力を動員して声帯を震わせようとし。

「ならば、わらわの好きにしよう……お前の童貞をもらおうぞ」

女剣士の腰にガニ股で跨り、股間にかかるクロツチをずらす。下着はなく、すぐに大陰唇が露になった。そこは充血してふっくらと膨らんでいた。左右に開かれ、中のピンク色の肉まで覗いている。

外の白い肉も、内の桃色の肉も鈍い光沢を放っていた。愛液である。魔女もしとどに濡れていたのだ。汁は尚も湧き出ており、直下でビクつく肉棒にツーツと垂れる。一度だけでなく二度三度と落ちていき、女剣士の欲望の権化をたっぷり汚していく。

「じつとしているのだぞ」

空いている手で勃起をそつと掴み、固定させると腰を沈める。ゆっくりと。その間も愛液のシャワーは降り注ぎ、結合を容易にさせる下準備を続けている。

ゴクリ。

アスカが生唾を飲み込んだ。パクパクと開閉する女性器は、どうしようもなく魅力的だった。この肉壺に包まれて自分の肉棒を研磨されたら……。男根を締めつける事にかけては口を上回る筈だ。相対的に劣る口でもあんな悦楽を享受したというのに、子種を吐き出させるのに優れた器官で責められたら……。

「はあ、はあ、はあ……………」

息が自然に荒くなる。魔女との戦いで浴びた媚薬体液は殆ど乾いている。そのため効果も大幅に減少しているのだが、アスカの身体から熱が消えない。

ぐじゅ……………。

魔女の愛液で濡れきった先端が、大陰唇にめり込んでいく。女剣士は抵抗せず、じつとその様子を見守っている。

「大きいな。見る、あまりに広がっているだけにわらわの肉ビラを巻き込んでしまっているぞ……んっ……ふふ、逞しいものよ」

嬉しそうに微笑む。それはアスカにしても同じだった。

「ああ……熱くて、ぐじゅぐじゅって……」

熱を持った柔肉。それが肉棒にぴっちり纏わり付いてくる。間に愛液が入り、締めつけに又メリを加えている。

じゅぶううう……。

ツルツルな肉エラの広がりに沿って大陰唇がぐわつと広がり 戻る。

「んああああああつ！」

肉段差の裏側が、花弁によってぐっぽりと啜え込まれた。肉の花びらは赤熱する勃起に勝るとも劣らない熱を帯びており、結合部からアスカへと伝わってくる。加算される熱により女剣士の身体は燃え上がり、肉壺に呑み込まれる快感を増幅する。

ずずっ……ずずっ……。

柔らかくて潤んでいる膣内を、肉棒でこじ開けさせられる。

「いいぞ。予想以上に、んっ、身体の中が満たされる……ああ、やはり人の肉棒はいい……

……しかしそれも、お前のような強くて美しい女のものだからだろうな……」

両掌をアスカのお腹へ移し、下半身の力だけで結合を深めていく。繋がる部分から愛蜜

がじゅわつと溢れ出て、肉棒の根元へ垂れ続ける。

ツン……。

勃起の頂上に、コリコリとした感触。柔らかい肉を割り開かされていた間には感じられなかった硬さだ。

「はあああ……子宮口まで届いたな……わらわの一番奥の感触はどうだ、ん？」

根元まではまだ距離があり、そのために魔女の腰は宙空に浮いている。その状態で彼女は腰で円を描いた。自然、肉棒の先が子宮口によってグリグリ抉られる。

「ああっ、アアー！」

コリコリとした硬い感触が、肉棒に焼け付くような甘い快感を起こさせる。反射的に腰が浮き、手足がピクピクと痙攣してしまう。

「まだ終わりではないぞ」

宙を掻く掌に魔女の掌が合わさった。局所は熱いというのに、握られた手はひやりと冷たい。アスカの体温が伝わっている筈なのだが、一向に温もりを帯びなかった。そんな魔女は、ぎゅつと手を握り締めながら更に腰を下げた。

ニユギユ……ギユリユツ………！

「第二章 魔女に刻まれる牡悦」
子宮口と接吻していた先端が、更に奥へと引き寄せられた。目に見えないほど小さい物しか通れない隙間に肉棒の登頂がめり込んでいく。

「ッ！」

アスカの目が見開かれ、身体が大きく跳ねた。

「亀頭を、わらわの子宮口で挟んでやる。普通の女では体験できないものだぞ」

子宮へと繋がる肉の亀裂に先端が嵌り込んでいく。膣内は愛液で潤い、またアスカの勃起からも潤滑油が滲み出ているのだが、それでも侵入速度は牛歩よりも遅い。

それが、子宮口の肉層から押される感触をじっくりと味わわされる事に繋がった。又メル膣肉に包まれていたのとは段違いの圧迫感だった。肉棒が食いちぎられかけているのではないかと思えるほどだ。胸が詰まり、息苦しくなる。

だが苦痛ではない。先端から根元までが甘い快樂でチリチリと炙られているかのように疼く。同時に、腰の奥底から射精欲求がどんどん湧き出てくる。

「初めてがわらわでは、もう人間の女で満足する事はできはしないぞ。腹の中に啜えこんだこの肉棒に、魔女とのセックスでしか味わえない愉悦を刻み込んでやる」

ずちゅ……ぬちゅ……にちゅっ……。

引き締まったアスカのお腹に両掌を乗せ、膝をついて黒衣のお尻を弾ませる。タイトな衣装で浮き上がった豊富な尻たぶが、何度も太腿を打つ。互いの潤滑油は豊富なので、魔女が主体の出し入れは至極スムーズで滞りが少しも起きない。

「いいぞ、肉棒のこの存在感……人間どころか化け物どもでもこうはいかない」

興奮の赤みが差した顔が綻んでいる。胸元では豊満な胸も嬉しそうに弾んでいる。

「ううっ……………あああっ……………！」

対照的に女剣士の顔には余裕がない。目が白黒している。体重をかけてお尻をペタンと下ろされれば、カリの部分までが子宮口にめっちよりと嵌り込む。肉幹が膈内で締めつけられる一方で、先端はそれよりも一段上の締めつけを受ける。一本の肉棒が、場所毎に違う快感を押し付けられている。

更に、引き抜かれる際に感じる圧迫感の緩和は、甘い果実に塩を振るとより甘く感じるのと同じように、次の瞬間に訪れる同時二段階快感の刺激を倍増させる。

べちゃん、にちゃっ、ぐちゅっ、ニユチャンツ！

魔女の腰振りが加速する。アスカの意識は霞み、腰には射精欲求が湧き起こる。口でされた時よりも遥かに短い時間で、より大きな火山の爆発を連想させる滾りが膨張している。空洞の膈内から断続的に、ぶしゃっぶしゃっとな愛液のしぶきがあがっている。

「なんだ、もうこんなに膨らませているのか」
女剣士の太腿に座り、円を描くように腰を回す。子宮口に当てて膨らみ具合を視ているようだ。

「やめ……………そんなことをされたら先端が……………っ！」

腰を上下されていた時よりも挿入が深まっていく。抉られる事で奥までねじこむ形にな

っているのだ。肉段差のみならず、その直下にあたる肉竿の一部までもが強烈に締め上げられている。

「はあ……深い……わらわの子宮にまで入り込んでいるのかも知れぬな。んっ……お前のものがあまりによいので、子宮が降りているようだからな……あふう……加えて、お前のものも大きさを増しておる」

宙空で震える二つの掌。それを魔女が握り締める。

「どうだ、童貞喪失と共にわらわに子を仕込まぬか？ お前の逞しいものから子種をたんまり噴き出させ、わらわの腹に送り込むのだ。あんなに臭く、ねばつく精液ならば……ましてや、子宮口に限りなく近い場所で射精できるこの状況ならば、きつと孕ませられるだろう……気持ちのいいセックスだと妊娠し易いとも言っしな」

挿入したままで上体を倒し、彼女の耳に自分の唇を近づけて囁く。

「想像してみる。自分の種で、敵であるわらわの腹が膨らんだ様子を……中にはお前の血を引く子供がおるのだ」

「あ……あ……」

快樂でぼやけた頭の中に、妖しい声が入り込む。アスカの脳裏に、臨月を迎えた魔女の姿が浮かんだ。布地がダイヤモンド型にくりぬかれて露出しているお腹が、自分との子供を宿している事でぼっこりと膨れている。

ビクン！

肉壺に啞えこまれている男根が震えた。

「ふふ、腹の中に啞え込んだものがビクビク震えておる。まるで、一刻も早くわらわに孕ませ汁を食らわせたいと言っておるようだ……そうだな？ ん？」

首筋をちゅっちゅと吸い、舌でれるれろと舐める。耳穴に熱い息を吹き込み、動物の愛情表現よろしく頬同士を優しくすり合わせる。口や顔でできる愛撫を繰り出しながら魔女は彼女の返答を促す。

「はあああ……」

心身が悦楽で染まっていく。股間に加わる鮮烈な快感と、顔に加わる優しい心地よさ。アス力はすっかり陶醉し、心に何も浮かばなくなる。鼓膜を震わせて入り込んでくる魔女の言葉が絶対の真理のように思えてくる。

女が女を妊娠させる。それに不自然ささえ感じない。射精の本懐 女を孕ませる事を遂げたいという衝動に強く駆られる。

「童貞を奪った女を、その場で孕ませたいだろうか？」

アス力はコクンと頷いた。目が酷く虚ろだ。異形や魔女相手に奮闘した時の煌きは曇りきつっている。

「第二章 魔女に刻まれる牡悦」
「いい子だのお……ならば、全身全霊で精を吐き出すのだぞ」

上体を起こし、握った手に力を込める。

「ゆくぞ。さあ、たんまりと精を飲ませるのだ」

子宮口に亀頭を嵌め込んだまま腰をくねられる魔女。左右からキツク包み込まれる亀頭とその下部は元より、肉棒部を締めつける膣肉の締めまりも増していく。体液が益々分泌されて、今やぬかるみ同然である。

「あふっ、んあっ、ああッ！」

魔女の腰回しに合わせてアスカの口から嬌声が飛び出す。締めまりのない口からだらしく舌が突き出ている。妖女と肉悦を分かち合うその様子に、歴戦の女剣士が持っていた凜々しさは微塵も感じられない。

「んっ……もつと興奮するのだ、わらわの子宮はもう少し降りる筈……お前の肉棒があと少しでも膨らめば、亀頭が子宮に顔を出す……はぁ……子宮におるわらわの卵に、じかに精液をかけるのだ」

握っていた手を離し、ビンビンにそそり立った乳首へ向かわせる。

「アアッ！」

「ここも好きだろう？ さあ、わらわの手で気持ちよくしてやるから、肉棒をもつと滾らせるのだ」

触手や魔女に弄られて快感を知った乳首が、指の腹で潰され、倒され、擦られる。

胸の奥から母乳噴出欲求が湧き起こり、それに伴い勃起の熱が上昇し、更に膨れ上がっていく。

「よし、もう少し………もうすこ………んくうっ！」

亀頭の頂きに感じていた圧迫感が緩んだ。

「さ、さきっぱが………飛び出て………」

「分かるぞ、子宮に顔を出しておる。今がわらわを孕ませる絶好の機会だ。お前に蓄えられた精液を、思う存分なかにぶちまけて見せろ………さあ」

腰をクイクイ振りたくる。結合部だけでなく太腿や尻を濡らす愛液のためにニチャニチャという摩擦音が響く。

「イメージしてみる。子宮に繋がった亀頭から出たお前のドロドロの精液が、わらわらの子袋をタップタップに満たす。ほうれ、そこにおる子の素が濃厚なザーメンで溺れておるぞ」

「溺れさせたい………わたしの精液で、あなたの中を満たしたい………ああ、早く、早くイキたい、早く気持ちよく射精して、妊娠させたい………っ」

上ずった声の、寝言じみた台詞だったが、確かに女剣士の口から紡がれた。

それを言った当人は、爽快感を感じている。身体が軽くなり、享受する快感が濃厚になっていく。

「よく言った………おお、お前のものはもう限界みたいだな。わらわの中で、早く射精した

いと暴れておるわ。最後の仕上げだ、こう言ってみる」

紡がれた言葉に、従順に頷く彼女。

「勃起ペニスでイクっ、ああ、化け物ペニスでイッて孕ませるウ！」

魔女は満足そうな笑みを浮かべて聞いている。

アス力は夢中になって叫ぶ。叫べば叫ぶほど気持ちよさが大きくなるのだ。

「あっ、イクッ、ああっ、ペニスでイクっ、妊娠汁を吐き出しながら、孕ませながらイクウウウウツツツツ！」

ドビユウツツツ！ ドブドブドブウウウウツツツツツ！

子宮内へによつきりと頭を出した噴出口から、おびただしい量の精液が噴出した。

「おおおおおおおツツツツツツ！」

常に優雅だった魔女から、不相应な獣声が上がった。

射精で飛び出した精液は濃厚で、子宮の肉壁にべったりと付着して、その熱量をもって焼き尽くす。付着した精液の臭いも強烈で、内部は精液の生臭さで満たされていった。

「イクウウウウウウウ！」

股間の放出が止まる前に胸からも母乳が噴き出した。魔女の顔も胸も汚していく。お腹の中と肌に浴びせられる熱い奔流を、彼女はじっと受け続けた。

「っっ………子宮に直接射精されると、こんなにも堪えるとは………母乳の匂い

も頭をクラクラさせる……相手が、わらわが認めた女であればこそかも知れぬが」

見下ろす先では、肩で息をしているアスカが大の字になって弛緩している。目が薄く開いているので失神はしてはいないだろうが、ぐったりしている。しかしまだ子宮内では断続的に精が迸り、乳首からもピュツピュツと母乳の噴き上げが起こっている。

「まだ出せるであろう？ 寝かせはせぬぞ。お前の魂に、わらわとの情事の良さをたんまりと教え込み、わらわなしでは生きられぬ身体にしてやるのだからなあ……何度でもわらわの体液や触手どもの体液を与え、発情させて仕込んでやろう……」

紅潮した顔で続ける。

「肉悦でわらわに縛り付けてやる」

魔女は嫣然と微笑んだ。瞳には仄暗い炎が宿っていた。

第三章 王女で知る獣悦

アスカが目を覚ました時、目に入ってきたのは見知らぬ天井だった。

「ここは……私は一体……っう……」

頭が軽くズキズキする。まるで濡れた衣服を着ているかのように全身が重く気だるい。だが、それを除けば普段通りだった。愛用の防護服を身に着けている。その状態で毛布にくるまっていた。

「そうだ、私は……」

意識が徐々に覚醒する。それに従い、思い出したくない記憶が蘇った。魔女に敗北し、散々痴態を晒した事。股間に男性器を生やされて何度も精液を搾り取られた事。失神しても魔女は腰を振り続け、目覚めても股間をぶつけてくる。それが繰り返された。

「……思い出しただけで身体が……」

火照ってくる。胸と性器が甚だしい。乳房の表面がジンジンと振動し、股間がじわあつと熱くなる。それを意識した時、アスカははっとした。慌てて股の間をまさぐる。

「ない……のか……？」

いくら掌を当てて探ってみても、男根がある気配がない。力強く押し付けて何度も何度

も触つてみたが、やはり何もないうだ。

「よかつた……私はまだ普通の人間でいられた」

敵により肉悦を教え込まれた事実が揺るがないのは苦しいが、身体が普通の女のそれに戻ったことは喜ばしかった。おそらくはその場限りの付け焼刃だったのだろう。各地を放浪する身でも、女の身体に男性器をつけたという話は聞いた事がなかった。両性具有信仰や、先天的な体質でというのならまだしも。

そう思うと気が和らいできた。身体の火照りも、深呼吸を続けていると徐々に収まる。

「さて状況を確認しよう。ここはやはり魔じょ……あの女性の屋敷なのか」

何故だか魔女と言うのに抵抗を感じたアスカ。呼び方を訂正し、周囲を見回す。女剣士が寝かされていたベットはとても豪華だった。真っ白いシーツなどは無地だが、清潔感に溢れている。

部屋の広さは一般市民の家ほどはありそうだ。古めかしい暖炉が据えられており、高級そうな調度品が幾つも並べられている。どことなく、魔女と戦ったホールにあつた物と似た雰囲気の商品が多かつた。天井から下がるシャンデリアには、見た目は冷たいが高光度の魔法光が灯っていて部屋の中を満遍なく照らしている。

豪華なだけでなく、部屋は掃除も行き届いている。ひんやりした空気は清浄で全く埃っぽくない。まるで涼しい林の中にいるようだ。

ベットのすぐ傍にあるフックには防具と道具袋、それに鞘に納められた刀が掛けられていた。状態を確認するとどれにも異常がない。どれもが何事もなかったかのようにそこにある。汚れも損壊も回復している。

（どう言う事だ？）

自分は間違いなく魔女の手に落ちた。言ってみれば捕虜になっているというのに、何もかもが無事であるなど奇妙極まりない。

ギイッ、カタン。

扉が開いて締まる音。目を向けると入り口に女性がいた。知らない顔だ。

「よかった。気がつかれたのですね」

鈴を転がしたような声だった。

枝毛など一本もない、清流のような金髪が印象的だが、優しげに垂れたつぶらな目も、咲いた花のように綻んでいる口も美しい。

身に着けるドレスは純白。腕には肘まで覆う純白のロンググローブを着けている。シルクか何かでできているらしく、表面はツルツルとしていて淡い光沢を帯びている。彼女の細くて繊細な手には良く似合っていた。

柔和な美顔も細い手も可憐だが、肉体の成熟度合いは少女の粋を超えている。上半分がドレスのカップから飛び出ている乳房の膨らみは、覆う布切れを内側から押し破らんばか

りのはちきれぶり。

ドレスとお腹の間にはコルセットを着けているのだろうが、それでも脇腹の窄まりようは見事であり、腰から下の広がりようは甚だしい。お尻の大きさが窺える。尻たぶも若さ特有の瑞々しさが溢れた柔肉なのだろう。

ドクンツ！

（な、なんだ……？）

不意に胸が跳ね上がった。トクトクと脈が早くなる。股間の奥が再度じんわり熱くなってくる。この変化は、彼女を見ていると強くなっていく。

あどけなさを残す綺麗な顔、白い乳肌の豊かな胸、形よく窄まった脇腹、細やかで美麗な指。気が付くと、スカートの奥に隠された脚線はどのようなものだろうと考えていた。

（私は何を……）

女性を見てそんな感情に捕らわれるのは初めての事である。

おかしな感覚に戸惑っていると彼女が近づいてきた。

「まだ寝ていてください」

胸をそつと押し、起こしていた上体を倒される。アスカは何となく従った。

小さな手はひんやりしていて、防護服が間にあるとは言え、温かくなりだした身体に心地よかった。

(いい匂いだ)

鼻先まで彼女が迫った瞬間、薄甘い香りがふわりとくゆった。鼻腔をくすぐるそれは心地よく、頭の中が軽く霞んだ。

「いま、搾りますね」

枕の端に落ちていた濡れタオルを拾い、ベット脇に据えられた棚の上にある水が入った器の中に浸し、絞る。絞り終えたそれは、寝かしつけられたアスカの額に当てられた。

「まだ熱がおありのようですから、安静にされていた方がよいと思います」
彼女が微笑んだ。

ドクンツ！ ドクンツ！

動悸が激しさを増した。

カアアアツツツツツ！

火照ると言うのでは生易しい水準まで体温が上がる。

(何だと言うのだ、一体……？)

身体の様子を怪訝に思っていると、眉根に皺を作ってしまった。それを見た彼女が慌てた様子で口を開いた。

「申し遅れました。私はソフィリアアツドと申します」

そう言うのと優雅に一礼。洗練された動きだった。

「ソフィリア」ツド……ソフィリア姫様！」

魔女に浚われた姫様だ。村で過ごした夜に聞いた『白き宝珠』の呼び方は、陳腐だが確かにぴつたりであった。この容姿を見た者ならば誰でも納得するに違いない。

そして驚く。どこの馬の骨とも分からぬ女へ丁寧に自己紹介する王族がいるとは。しかも、看護までしてくれた。

「はい。不甲斐なく魔女に捕われている弱い姫です……」
愛らしい目が悲しそうに垂れた。

「外の事は知っているつもりです。魔女は存外親切で、ある程度ですが自由を与えてくれます。外の様子を知る手段も寄越してくれております」

「ここから出る事は可能ですか？ それができるのならば、道中は私が護衛して必ずお城までお送りいたします」

アス力は話題を変えた。放っておいたら彼女は自虐を続けるだろう。捕われて、外界の様子を見ては心を痛めているに違いない。

送り届けるというのはでまかせではなく、本気でそう思っていた。世話をしてくれた恩返しという意味もあるが、好感を感じる人にはできるだけ手を貸したいと思う性格も顔を出してはいる。

「いえ……魔女が許している領域を行き来する事はできるのですが、魔女が許可していな

い領域に行こうとすると戻ってきてしまうのです」

「戻ってきてしまう？」

「私は未熟者なので確証はありませんが、以前に受けた魔道講義を頼りに考えると、おそらくは魔法で空間が捻じ曲がっているのではないかと思います」

そう言うと、オーケーサインを作って見せてくる。

「親指の先が現在地で、人差し指の先が目的地。本来ならば直線の端と端にある二点がこのように繋がっているのではないかと……色々試してみましたが、魔女の仕掛けを打ち破れずにいます」

「そうですか。分かりました」

アス力はベットから出て身支度を整えた。愛用の刀を鞘から出して具合を確かめる。自分にとって危険な武具をそのまま返すとは思えないが、見た限りでは贗物とも思えない。いつも通り曇りがなく、魔法光にかざすとキラリと反射する。

「それは、若しかして魔力剣なのですか？ 見た事のない意匠ですが」

王女の目が丸まっている。それは当然かも知れない。魔力剣は製造が難しい上に莫大な費用と時間がかかる。王族といえどもおいそれと所持できない希少品なのだ。

「はい。これはずっと遠方で作られた一振りです。私は魔法を使えませんが、ある程度なら、これに込められた魔法力を発揮させる事は可能です。これで魔女の仕掛けを破れるか

も知れません」

姫の顔が輝いた。

「宜しくお願いいたします、アスカ様」

「……私などの名前を何故？」

「ご活躍は拝見しております。とてもお強い方です。ですから、お世話できた事は光栄でした」

「そう………でしたか」

複雑だった。屈託なく褒められたことには何故か胸が躍ったが、様子を見ていたというのなら、魔女に敗れて痴声を上げていた場面も見ていたのだろう。

（いや、今はそんな事を気にしている場合ではないな）

しかし、アスカは思い直した。あんな無様を晒した女にも、蔑むどころかとても親切にしてくれたのだ。ぜひとも救い出し、本来の居場所に返してやらなければならぬ。

「ここです」

「第三章 王女で知る獣悦」
姫に案内され、すぐに問題の境界線までやってきた。そこは階下へ続く階段の踊り場だった。すぐ下には魔女と戦ったホールが見える。狂宴の舞台となったそこは、今は元の豪華な空間に戻っていた。

部屋を出て廊下を歩いていった時は、華やかな邸宅を案内されていると言う風だった。異常

な所は何一つない。そこかしこに夜闇が降りているといふのでも、触手が徘徊しているといふのでもない。

「失礼。一応、試してみます」

彼女が嘘をついているとは思っていないが、自分で確かめたいと思い、アス力は踊り場を進んだ。

果たして。階段を踏みしめて階下に下りた筈なのに、いつの間にか階段を上って姫が佇む場所に戻ってきた格好になった。三度試したが結果は同じだった。

「なるほど」

アス力は納得した。確かに彼女の言う通りだ。

「では、やってみます。少し下がっていて下さい」

従順に頷くと、姫は数歩下がった。

「ふう……………」

肺に溜まった全ての古い息を吐き出し、新しい空気を胸に詰める。意識を張り詰めさせながら刀を振りかぶる。更に精神を研ぎ澄まし、無形の結界を斬り捨てる自分を想像。目を閉じて、深呼吸を繰り返す。姫を送り返すんだと強く意識し。

「砕け散れっ！」

高めた意志力をその一言に変換し、渾身の力を込めて刀を振り下ろした。

ブンツ！

刀が物理的に風を切る音。それだけだった。

魔女の防壁を砕いた時には、あんなに派手な音が生まれたと言うのに。そして、その時には眩く輝いた刀身が、今はちらとも光らない。

「……………？」

打ち破れたとは思えず、アスカは何度も試した。が、結末は同じだ。ふと思いついて階下へ降りてみても、その結果も最初と同じ。結局は上ってきてしまう。

「面目ありません」

流石に、恨みや蔑みを受けてしまうだろうと覚悟して彼女は謝った。しかし。いいえ。助けて下さるうとしてありがとございました」

本当に、心から感謝している様だった。丁寧に礼を言う王族。

「……………恐縮です……………」

罵声を浴びせられた方が楽だったかもしれない。いたたまれなかった。女剣士の苦痛を察したのか、彼女がぎこちなく微笑んで言った。

「アスカ様。一度お休みになられたら如何でしょう。まだお疲れなのかも知れません」
「はい……………」

アスカは刀を収め、彼女に手を引かれるまま部屋に戻った。

「あら、もうこんな時間なのですね」

窓の外では陽が沈みかけていた。まだ僅かに茜色が残っているが、少しすれば闇色が濃くなつていく筈である。

「あの………どうか、はしたないと軽蔑しないでいただけますか………お願いがあるのですが」

おずおずと姫が切り出した。恥ずかしさを懸命に堪えている様子だ。顔が真っ赤で、真っ直ぐだった視線がうつむき気味になっている。

「なんででしょう？」

何を言われるか予想はつかないが、してやれる事は何でもしたい。

「ご、ご迷惑でなければ、アスカ様とご一緒に休ませていただけませんかでしょうか」

一瞬、言葉の意味を図りかねた。彼女の顔をじつと見て、それが寂しがり屋な子供のように見えた事で得心する。

（ああ、そうか………）

人恋しいのかも知れない。浚われて捕らわれている事、助けに来る者達が傷ついている事、他にも心を痛める要因はたくさんある。重荷が多ければ温もりが欲しくなるものだ。

他に誰かいる気配はない。幽閉されてから初めて話せる人間に会ったと言う可能性もある。それが嬉しくて、世話を焼いてくれたのかも知れない。

「はい。私などで宜しければ、お傍に控えさせていただきます」

「あ、いえ……同じベットで眠りたいと……」
ますますうつむく王女。声は酷くか細い。

そんな様子に、アスカの心が何故か高鳴った。

(またなのか)

そんな自分をいぶかしく思う。彼女を前にすると度々こんな思いになる。思い起こせば結界を破る際も彼女の顔がちらついて集中し切れなかった気がする。おそらく、そのせいで刀は輝かなかったのだろう。

「すみません、やはりお嫌ですよね。忘れてください」

沈黙を拒否と受け取ったのか、姫は取り繕うように笑った。

「あ、いえ、そうではありません！ 勿論、お引き受けいたします。一緒に休みましょう
姫様」

その言葉に彼女の目が見開かれ、口元が綻んだ。

王女に微笑みに、誤解によるすれ違いを回避できたとアスカも安堵した。

身支度を整え、二人は同じベットに横になった。シャンドリアは超然的に煌々と灯っている。姫が言うには明かりは消えないのだそうだ。

人工的な明かりの下、王女はすぐに寝息を立てた。しかし、アスカにはなかなか睡魔が

訪れなかった。眠りから覚めたばかりだからという事もあるだろうが、もっと大きな原因があるのを女剣士は自覚していた。

すぐ隣で眠るソフィリア姫だ。

（よくお眠りだ……こんな近くで……）

彼女の柔らかな存在感を意識すると心が落ち着かない。彼女の仄甘い体臭が鼻に入り続ける状況下で、身体がどんどん火照っていく。

目を閉じてみれば彼女の容姿が思い浮かぶ。それ以上の事も勝手に浮かんでくる。

無防備な彼女に触れる自分。服を剥ぎ、白く透ける美しい肌にも口をつける自分。彼女を組み伏せ、拒絶されても女の部分に自分の男根を突き入れる自分。カー杯腰を振って粘膜炎同士を擦らせ、そして清純な姫に自分の汚らしい熱い粘液を体内に注ぎ込む。

（そうだ、魔女が私にしたように、この魅力的な少女にも私が……）

魔女の中に包まれていた時の快楽。柔かくて又メ又メで、それでいてキュウキュウ圧迫してくる肉ヒダ。その中で精液を放つ快感。記憶が後から後から鮮明に蘇り、身体の火照りが増していく。体温が上がるだけでなく、刺激を求めて身体が騒ぎ出す。疼きという形をとって。

間近にいる獲物へ向かって、手が伸び

（ハッ、何を考えているのだ私は！）

そこで正気に戻った。

自分は一体何を考えていたのか。人格者の女性を性的に蹂躪するなど。しかも自分を頼りにしているというのに。

こんな事は初めてだ。何しろアスカは、女である事を無視して剣の修行に明け暮れていた剣士なのだ。男性に興味を持った事でさえ一度もなかった。ましてや女性になどは。しかし。

今は彼女が無性に愛しい。抱き合いたい。肌と体液を交わらせ、お互いの体温を交換したい。二人で快楽行為に没頭したい。股間が熱く重くなっていく。鎌首をもたげているかのように。

(股間が鎌首をもたげる?)

ギクリとした。慌てて股間をまさぐる。

「なっ!」

反射的に叫んでいた。

目覚めた時にはなかった物があったのだ。なくなっただと思っただけで安心していたそれは、禪を突き破らん勢いで硬くそり立っている。

「第三章 王女で知る獣悦」
「まさか……消えていなかった……ひよっとして、この感情はこれを植えつけられたからなのか……?」

根拠のない直感だが。男根を付けられたと共に男性的な性格も備わったのではないだろうか。だから、自分は心身麗しい姫に心を乱している。ありていに言うと言情している。

「アス力様……」

眠っていたと思っていた姫の声。

「も、申し訳ありません。騒がしくしてしまいましたね……何でもありませんので、どうかお休み下さい」

滑稽なほど声が裏返っている。これでは説得力などありはしない。

「あの……魔女に付けられたと……殿方のものがお辛いのでしょうか？ 私の脚に当たっておりますから存じております……どうか、お隠しにならないで下さい」

泣きたくなるほど優しい声だった。

「私は……王族なので全てを受け入れる事はできません……子宮は国のためにあるものですから……どうか、これだけで許してください」

ソフィリアはアス力の手をとった。ベットの縁に座らせ、自分はその前に跪く。

女剣士の股間を前にして、息を吸い、吐くという動作を何度か繰り返した。そして、胸元に手をかけた。

カップ部分の縁に指を差し入れて手を下げる。豊胸ははちきれんばかりに膨らんでいるため、ずり下ろすのもひと苦労のようだ。指に力を入れて励んでいるようではあるのだ

が、ちよつとずつしか下がらない。王女の綺麗な顔が赤らんで額に汗が浮いてきている。

「お待たせしてすみません……もう少しですから……」

申し訳なさそうに告げると作業を再開。それから少しして。

ぼろろんっ。

ドレスから双乳が解き放たれた。ようやく出られたと言わんばかりに勢いよく弾んでいく。色は透き通る白。染み一つない。輪郭は見事な球体だった。布に覆われていた時と違わない。そして見るからに柔らかい。奔放に跳ねる乳房は、まるっこくぽよよんとひしゃげているのだ。

胸が露になったと同時に、甘い香りが漂ってきた。添い寝していた時にも匂ってきた匂いよりも幾分濃く、嗅いでいるだけで股間の隆起がズキズキ痛む。

「すごい……綺麗だ……」

アス力は呟いた。瞬きも忘れて豊かな胸に釘付けになっている。

「そんなに見られては……恥ずかしいです……」

赤い顔の姫がアスカの身体へ手を伸ばす。上半身の防具を一つずつ外し、防護服を崩しにかかると。

（姫様に脱がされている……）

熱い想いを抱く女性に脱衣させられているというのは、気恥ずかしさもあるが奇妙な興

奮を覚える。胸の奥がざわめいて、股間の熱が高くなる。ベットに腰掛けたままでは外され難い時には身体を傾けるなどしたのだが、それも共同作業をしている一体感を感じさせ、身体の高ぶりを促進した。

「アス力様のお身体もとても素敵ですわ……」

現れた前半身を目にした彼女が、芸術品を品評する目で呟いた。洋梨型の巨乳に、うっすらと割れた腹筋。縦長で形のいいおへそ。括れた、脾臓と尻肉の境目。鍛えられた生命力が溢れる造形美を姫の目が順に撫でていく。

「そんな……」

女剣士から乙女の初々しさが滲み出る。自分の身体をまともに見られたのは、魔女を除けば姫君が初めて。あの妖女も褒めてくれはしたが、この少女の賞賛に感じる嬉しさにはずっと劣る。

「こちらも……こんなに盛り上がって……」

そう言う王族が見るのは、高く隆起する股間の白い山。真っ白くて柔らかな禪を貫かばかりに押ししている勃起の影である。

薄布一枚向こうに、普通の女性にはある筈のないものが存在するというのに、やはり姫は嫌悪の雰囲気的一片も見せていない。

「この下着は、どうやって外せば……」

腰周りを見渡しながら困惑しているようだ。それもそうだろう。この辺ではないものなのだから。

「こちらです……この部分を解いていただければ」

結び目を見せてやるアスカ。今の彼女には自分で脱ぐという発想は浮かばなかった。美しい姫君に脱がせて欲しいと願ってやまなかった。

スルリ。

白いグローブで覆われた細い指が禪の結び目を外し、股布を引き寄せる。脱がされる事を望んだ女剣士は尻を浮かせて、剥ぎ取られるのを助けた。

白布がなくなった後に、植えつけられた男根が姿を現した。

「ああ……これは……」

よく育った根菜類を連想させる、長く、太く、そして雄々しい肉棒。

肉幹の表面は赤子の肌と同じく瑞々しい肌色。見るからに硬そうで、持ち主の方へグンと反り返っている。その表面には青い血管が数本走っている。出鱈目に曲がりくねっている、内部ではドクドクと血が巡っている。

その先にある先端は、まるで大きく実った果実のようにぷっくりと膨らんでいる。色は綺麗なピンク色だ。全面的にツルツルしており室内の魔法光を反射して鈍く光っている。

肉幹との境目はグワツと張り出しており、釘の頭を思わせる。

（変化している……のか？）

魔女に付けられ、犯された時とは肉棒の見た目が違っている。より身体の一部らしくなっているという風だ。乾く事なく分泌されていた肉汁も出ていない。

（本当に、私は男性器を持つ女になるのだろうか……）

その異常性に暗鬱たる気分を駆られた時。

さわつ。

スベスベの何かに触れられた感触。少し冷たくて、繊細な何か。見ると、グローブの人差し指の腹が勃起の中腹辺りに触れていた。

「こんなに熱いんですね」

恐る恐るといった風だった所作が、次第に大胆になっていく。指一本から、親指を除く四指を束ねて表面をゆったりと撫で、ひとしきりそうすると掌全体で包み込む。壊れ物を扱う慎重さが籠もった軽い握りだった。

勃起は姫君の掌に余るサイズで、掌から頭二つ分は飛び出ている。

「アスカ様の体温がグローブを越えて伝わってきますわ……凄く熱い」

白い手はギンギンにいきり立つ肉根を往復し始めた。始めは肌一枚を圧迫する程度だった。力

「ああ……」

男根は、剥き出しの肉と言うよりは表面に薄皮が張られているという感じだった。それを介して、性感帯である肉棒の芯が擦られている。潤滑油が出なくなっても、この構造のお陰で快感を享受できている。

スベスベのグローブによる優しい摩擦は腰を甘く痺れさせた。この手袋は城の中でも身に着けていたに違いない。姫君を思い浮かべる時、誰もがこの装飾品を着けた彼女を思い出すのだろう。それをを用いて欲望の権化である肉棒に快感を与えてもらっていると思うと背徳感を感じてしまう。

「あつ！ 急に跳ねて……すみません、痛みましたか？」

「いえ、とてもよかったです……もう少し、強く握ってもらってもいいですから」

安堵の溜め息をつくくと、王女は言われた通りに握りを強くした。

ゴシユツ、ゴシユツ、ゴシユツ、ゴシユツ。

亀頭は皮がないらしく、グローブでは摩擦できないので手の終着点は張り出した境目までだ。そこと根元の間が往復区間となっている。

擦られれば擦られるほど勃起は熱さと硬さを増していく。グローブの手から伝わるひんやりとした体温が心地よかった。魔女によって一方的に犯された時も快樂を得たが、リラツクスして奉仕を受ける今の方が肉棒快感は上だろう。

「ビクビクと震えが激しくなってます……」

華奢な手の中で勃起が暴れるのと同時に、アスカの腰は甘く痺れ、下半身の感覚が怪しくなっている。そのくせ、肉棒に与えられる扱き快感は鮮明に感じられる。腰の奥底から精液がせり上がってきているのも明確に分かった。

「姫様、もう少しで射精しそうです……」

「はい、どうぞご遠慮なさらずにお出しになって下さい。最後まで、お世話させていただきますから」

病人を元気づけようとする医者のように微笑む王女。

その献身さは、今のアスカには猛毒だった。

ドクンツ！ ドクンツ！

心臓がうるさい位に高鳴る。今、アスカの瞳が写しているのは自分の股の間に跪いて、一生懸命に肉棒奉仕をしてくれる王女の姿。美しくて優しい姫君　心の中に湧き上がり広がっていく欲求。

「あ……………あの……………姫様……………」

他人に甘える事などしたことのない女剣士は、喉元まで出掛かっている言葉がなかなか放てなかった。良心の呵責もあつたかも知れない。告げようとしている言葉は、浅ましい欲望以外の何者でもなく、虐待めいた事なのだから。

「なんででしょう。お望みがあればなんでもおっしやっして下さい」

心中の激情を肯定してくれるような微笑。それが引き金となった。

「私のを……私の精液を飲んで下さいませんか……今も丸く膨らんでいる先端を口で含んで、射精で出てくるものを……身体に受け入れてはもらえませんか」

途切れ途切れに、だが最後まで言い切った。拒絶されるかも知れないという恐怖はあったが、ここまでお優しいお人ならひよつとして、という期待もあった。そして、その期待が現実になった場面を想像すると、股間の快感が濃厚になるのだ。

自分の体液を、しかもドロドロで臭くて、とても飲み物にはならないと知っている粘液を飲ませたがる心理は、確かに自分のものであるにも関わらず、どうしてもそんな事を求めるのは分からない。昨日までなら間違いなく嫌悪していた筈なのに。だが、今はそうしたいと強く思っている。

非常識なお願いを受けた姫は、

「分かりました。どうぞ、私の口の中で射精して下さい。全てお受けしますから」

ニツコリ微笑み。

はむっ、ちゅっ、しゅっ、しゅっ。

亀頭の先端に唇を重ねた。ぷりぷりと弾力ある可憐な唇は唾液で濡れており、肉棒がビクつく度に唇と先端がぬるっと擦れる。その度に、腰の痺れが深くなった。王女は啜えるだけでなく、又メル小さな舌を鈴口に忍ばせもする。小さな穴を、精液をねだるように舌

先で優しく掘ってくる。

「んむっ、ちゅむっ、いつでも出して下さい、遠慮なさらずに思い切り、んんっ、全て口で受け止めますから、んはあっ」

スベスベの純白の手が、ビキビキに起立した肉竿を根元まで扱く傍ら、温かい口内に迎え入れられた亀頭部が舌でねぶられる。

王女の頬は桜色に染まっている。額にうつすら汗が浮かび。目は艶やかに潤んでいる。息継ぎで吐き出される吐息は熱っぽい。王女も興奮しているのだ。

体温の上昇に伴い蒸発した汗が鼻腔に入り込む。ほの甘い体臭も混ざったそれは、アスカにはとてもかぐわしかった。

「ああ、姫様……………ひめ……………さま……………」

射精を求める肉棒がグン！と反り返った。表面に浮かぶ青筋が盛り上がり、自身を圧迫してくる華奢な白い手を押し返す。肉棒肌と手袋の摩擦で生じる快感が深まっている。

「ちゅるるるっ、んくっ、トロトロのお汁が先端から、ぶちゅ、むちゅっ、こくんこくん……………はあっ、これも全部飲みますね、アスカ様、んっ」

「ひめさまっ、飲んで下さいっ、私の浅ましが詰まった汁を！」

勃起から流れ出る物を嫌な顔一つせずにする王女。ちゅぱちゅぱと音を立てながら、何度となく喉を揺らさせる。アスカはすっかり心を開いていた。内心に顔を出し始めた、

平素ならば隠すであろう欲求を吐露し、姫に受容を懇願する。

「あ……出る…… ああ、出るっ……の、飲んでっ、飲んでひめさまっ！ 私の精液を、きつとネットネットで青臭い、私の汚い体液を飲んで下さいっ！」

艶やかなブロンドごと頭をガツシリ掴み、歯を食い縛った。

奉仕を続けながら、王女は上目遣いでアスカの目を見て頷いた。

女剣士のお尻がベツトから浮いた。

ドビユツ！ ビユクツ！ ドピユン、ドビユルツ！

「ああああアアアアッ！」

アスカの全身が宙空で痙攣する。姫の頭を掴む手が一際強張っている。

「んんっ！ んむっ、んぐっ……ごくごく……じゅるるるっ……んぐっ、ごくん……」

王女は瞼を下ろし、熱い奔流を静かに受け止めている。亀頭の境目まで唇を移動させ、精液が喉奥に当たるがままにさせている。

吐き出されたザーメンは酷くドロドロだ。雫の一滴一滴がヌルンと張り詰めており、その強い粘着力で口内のそこかしこにへばり付く。唾液を混ぜてもその強さはなかなか中和されず、喉を働かせて落とそうとしても、最後までしつこく絡みついてくる。胃の中に落ちてても、今度はそこに付着している気になってしまう。

「第三章 王女で知る獣悦」
「アスカ様の精液……んんっ……アスカ様の……」

呼吸をする合間に漏れる眩きは濡れていた。濃厚な汁を精飲しているにも関わらず王女の眉は悩ましげに八の字に垂れている。

「んむっ……はぁぁ……… 凄く濃かったです……今も頭がクラクラして……」

言いながら、唇の端から漏れた白い筋を右手の人差し指で掬って口へと運ぶ王女。

「全て飲むとお約束したのですから……」

しつこく指をしゃぶる。残滓も残さないつもりのような。その執拗さが、アスカには酷く淫蕩に見えた。

「まぁ……あれだけ出たのにまだ………」

姫の唾液でテラテラの肉棒は、まだ雄々しく隆起していた。王女の顔を向いた亀頭は、物欲しげに何度もヒクついていて。それは身体の勝手な反応ではなかった。

（姫様の胸……綺麗な白で、大きくて……柔らかそうで……）

ゴクリ……。

アスカは口内に溜まった唾液を飲み下す。それで喉は湿った筈なのに、カラカラに渴いている気がしてならない。心臓が早鐘を打つ。

彼女の瞳が写しているのは、王女の胸の谷間である。姫の清廉さの延長じみた真っ白いドレス。その胸元のカップからムツチリとはみ出した乳肉で形成された影はとても濃い。

見下ろす体勢のアスカには丸見えである。

それに、女剣士は欲情している。

「そんなに見ないで下さい……恥ずかしいです……」

熱い視線に気づいた姫が、恋人に見詰められて赤面する乙女さながらにほうつと息を吐く。そして。

「今度はわたしの胸をご所望なのですね……分かりました」

王女はドレスを脱ぎ始めた。豊満な胸を覆っていたカップも外される。繊細な手に引張られ、乳房の輪郭に沿ってゆつくりとカップが下りていく。肉果実の中腹にさしかかった時、胸の弾力で胸布は弾かれた。ハラリと落ちて胸の全貌が現れる。

アスカは息を呑んだ。待望の乳房は、宝石を彷彿とさせる白い輝きを帯びており、しかも染み一つない芸術度。それでいて、肉の柔らかさと温かさ、それに若さを感じさせる、形のよい丸い球体であった。

「はあ………はあ………はあ………ごくり………」

アスカの肉棒が益々硬くなり、まるで肉製の槍である。ピーンと反り返り、先端からじくじくと透明な汁が漏れている。

「まあ、ますます遅しくなられて………」

両手で両方の乳房を掴み、外に広げる姫。そのまま身体を寄せて、そそり立つ肉刀に近づく。

「ああ、姫さま……」

これからされることを頭に思い浮かべながら、瞬きしないでその瞬間を待つ女剣士。びと……むに……ぎゅっ、ぎゅっ。

肉棒の裏側を胸板に密着させると、掴んでいた乳房で肉刀の両側を挟み込む。仕上げは両手によるプレス。

「はあああつつつつっ！」

天井を向いて、咆哮めいた嬌声を上げるアスカ。目が潤み、蕩けている。

王女の胸肌はしっとり潤っており、肉棒の表面に吸い付いてくる。そこに、華奢な手による乳房圧迫が加わっている。植えつけられた肉棒の芯には、常にヒリつく快感が纏わりついている。

あられもない獣声を上げたというのに、姫は眉をひそめることさえしない。それどころかアスカが快感を得ていることに喜んでい風に見える。

「わたしの胸で気持ちよくなって下さっているのですね……嬉しいです、アスカ様」

柔らかい乳房ごしに、肉棒をこねる王女。加わる圧力が、勃起内部にじんわりと浸透していく。いちいち吸い付いてくる柔肌が拍車をかける。芯の甘い痺れがますます濃縮されていき、溢れんばかりの快感は腰にまで及ぶ。

「姫様あ……はああ……腰が溶けてしまっているみたいだ……」

熱いほどに温かく、存在感が怪しい。けれども、快感で満たされた牡棒の心地よさだけは明確に感じ取れる。

眼下では、姫が熱心に奉仕に励んでいる。豊満な乳房をムニユムニユとひしゃげさせて醜い肉棒へ快楽を味わわせている。

精力的に行っているためだろう。乳房も顔も上気している。うつすらと紅潮している清廉な肌はなんとも艶かしい。そこかしこに浮かぶ汗は、奉仕への真摯な思いの具現だろう。見ていると、彼女への愛しさが増していく。

「んっ、わ、わたしの胸の中ですます硬く、太く、長くなって……ドクドク脈打って……とても遅いのです……」

興奮して暴れる勃起を、柔らかいしつとり乳房で押さえつけながら呟く。肉刀の穂先を見つめる瞳が潤んでいる。膨れ上がった亀頭部分は、あと少しで可憐な唇に触れてしまう距離まで来ていた。

「ひめ……」

アスカの目は彼女の唇を映している。頭の中では、精飲された記憶が浮かんでいる。映像だけではない。飲んでもらった時に自身の肉が味わった快感と幸福感までもが、股間と精神に蘇っている。

「第三章

王女で知る獣悦」

だから、乳房から飛び出して寂しい思いをしている先端も包まれないと思った。湧き上

がる肉欲へ素直に従い、愛しの王女に懇願しようとし。

ちゅっ、ぴたっ、ちろっ、ぺろぺろ……。

「はうあっ！ 姫様の舌が私のものにつ」

喘いだ。おねだりする前に、彼女の方から舌をつけてきたのだ。

王族女性の積極的な淫行。王女自身も恥ずかしらしい。頬は真っ赤である。流麗な眉と優しく丸まった目尻が、困ったようにたわんでいるが、舌使いに淀みはない。胸奉仕の手も緩んでいない。

「そんなこと……わたしがしていることをおっしやらないで下さい……恥ずかしいです……勿論、アスカ様に献身するのが嫌という訳ではないのですが……んっ、お汁が……透明なお汁が出てきました……気持ちいいですね」

亀頭の先から滲んできた体液は王女の舌に纏わりついた。舌の動きにどこまでも付いて回る。先端と舌は粘っこい糸で繋がりに、離れ離れになることがない。

「はあ……味が濃くなっています……」

湿り気を帯びた声と、熱たっぷりの吐息を吐く姫。舌を動かしながら、自分が舐めているものを粘着質な視線で見つめた後。

「はむっ、んむっ、ちゆるるっ、んぐっ……はあっ、アスカ様の味……アスカ様のものの味……ぱくんっ、れるれる、ちゅっ、ちゅっ」

小さな口を一生懸命に開けて、肉刀の先端を口に含む。温かい粘膜空間内で、唾液一杯の舌が亀頭部をなで上げる。

尖らせた舌先で汁の出口をほじり、グワツと張り出した肉段差の円周を、ザラつきある舌の腹がネットリと触れる。奉仕の舞台が口内であるために湿り気が増しており、唾液塗れの舌は快感局所にしつこく張りついてくる。

「ああ、ああっ！ 姫様、姫様っ！」

アスカの肉棒は根元から先までピンと伸びきっている。腰の奥底から迫ってきた衝動は爆発寸前だ。滾った白いマグマが、肉棒の裾野に滞留しているのを感じる。少しでも心を緩めれば、肉棒内部を押し広げながら放出されるだろう。

胸と口に包まれたままで射精したい。

男性的な快感の味をしめたアスカは、剣士の目とはほど遠い呆けた蕩け目で白き少女を見つめながら、そんな浅ましさを当たり前のこととして肯定している。

「ひめっ、また飲んで、私の精液を飲んで下さいっ！」

ドビュルツ、ドブツ、ドクドクドクツッ！

胸奉仕で乱れてきた髪ごと頭を両手で掴み、握り締める。

手の中の王女は抵抗しない。瞼を下ろして、精液の流入を受け止めている。

射精精液を導くように、プリプリでヌメヌメの舌の腹が亀頭の裏側に据えられる。勢い

よく飛び出るザーメンは、舌の上を飛翔して喉奥へと殺到する。

「んむっ、んぐんぐっ、ごくっ……ちゅるっ、んぐっ……」

姫君はえずくことなく、器用にドロドロの欲望を飲み下している。その間も、両手で乳房をたわませる。頬をへこませ、ずずつと吸い上げ、内部からの放出を助けもする。

「ああ、いいっ、射精気持ちいい……姫様あ……」

自身の肉欲を根こそぎ引き受けようとしているかのような行動に、アスカの胸は打ち震える。射精は続く。

「こんなにたくさんお出しになれるなんて……」

ようやく終わり、肉棒を口から開放する。興奮の桃色が引かない顔で、王女は精力を賞賛した。そしてニッコリと微笑む。曇りのない、愛らしさ一杯の笑顔。

ドクンツ！ ドクンツ！ ドクンツ！

アスカの心臓が強く跳ねた。二度の連続射精で流石に萎えかけていた勃起が硬度を取り戻していく。

視線が、優しい微笑をたたえる清廉な顔から胸、胸からお腹へと降りていき、その先で止まる。

目はケダモノじみている。湖水の静けさを髣髴とさせる冷静な戦士のそれではない。はあはあとい息をつく彼女が、やにわに手を伸ばした。

「あ、おやめください、アスカさまっ」

腕の立つ女剣士の膂力をもって、ドレスを剥ぎ取る。一生懸命に世話をしてくれた王女の言葉には耳を貸さない。

「下着はないのですね……姫のここ、お濡れになっている……」

スカートの中には股布はなく、すぐに女性器が。清純な容姿に似合った、青い果実を思わせる花弁だった。染み一つなく滑らかな白。見た目ツルツルしている。

しかし、そこもやはり女の器官。度重なる性的な奉仕によってか、緩やかな開閉を繰り返している。肉花の間からは、トロツとした蜜が漏れている。大陰唇を湿らせ、肌を伝つてお尻の方へも流れている。

「見ないで下さい、見ないでっ！」

両手で顔を覆い、いやいやと髪を振り乱す。

アスカは嗜虐的な感情を覚えた。それはすぐに肉欲と結託した。

「私も、植えつけられた男の物を見させてしまったのですから、嫌がらないで下さい。それに、私のと違いとてもお綺麗ですよ、姫様のここは」

ベットに仰向けに寝かせて正対。左手の手の平を女性器と密着させて、中指を鉤状に折り曲げる。

ぐちゅっ。

「はぁぁんっ！ 指が、わたしの中につ」

王女の膣内は潤っているだけでなく熱くもあつた。アスカの身体も火照っていたが、彼女の体内はそれ以上。

「姫様も発情されていたのですね」

正面から顔を見据え、彼女に向けて囁く。王女はさらにイヤイヤと顔を振る。

そんな彼女にますます嗜虐心を感じ、指を動かした。短期間で集中的に経験した体験を思い出しながら指を動かす。アスカの胸の内は、恥ずかしがる王女に快感を与え、もっと困惑させてやろうという意地悪な心情で満ちていた。

「どうです、中をこんな風にされると背筋がゾクゾクしますでしょう？」

狭く、湿った肉穴の中を指の腹に這わせる。周囲を埋め尽くす肉の凸凹を擦り上げ、その輪郭を指紋でなぞる。指を動かすほどに、締めつけが増した。

「んぁぁっ、こんな、だめ、許して下さい……王女なのに、こんな気持ちになつてしまうなんていけないのに……ぁぁっ！」

「いいんですよ、気持ちよくなつて下さい。私の前で、声をたくさん上げて下さい……ここでは二人きりなのです……どうか、私にあなた様の可愛らしさを曝け出して下さい」

ぐちゅぐちゅという水音と、麗しい白い半裸がビクつく光景を心地よく思いながら、アスカは指を動かし続ける。

「そんなこと言わないで下さい、ああっ、いけません……か、身体が熱く……腰が切なくなつて　　ツうあ！」

指責めを受ける王女の息が荒々しさを増していく。形のいい巨乳がふるんふるん暴れ、指を差し入れられた股間が時々、ビクンツと浮き上がる。指と性器の結合部から漏れる愛液は、いまやシートをぐっしより濡らしているほど。

「堪らないのですね……私もです……今、二人で楽になりましたよう姫様」
指を引く。膣肉は未練がましく絡みつき、完全に引き抜かれる直前には大陰唇がぬーつと伸びていた。抜いた後も、指と性器は愛液の又メリ糸で繋がっている。

その指をしゃぶり、王女の愛液を一滴残らず飲み下すと、その手で肉棒の根元を掴む。
「いやっ、それは許して下さい。魔女の虜囚となり果てていても、わたしはこの国の王女です。子宮は国の物……結婚をするまではどなたかに捧げることはできないのです……分かって下さい、お願いです、他のことならばどんなことでも致しますから」

涙ながらに懇願する王女。散々、優しくしてくれた少女に女剣士は
。 。
ジユブリツツツツツ！

肉棒挿入を返事とした。

「あああツツツ！　いけません、抜いてくだ　　アアツ！」
こじんまりとした大陰唇をぐわっとな押し広げ、亀頭が埋没していく。何しろ小さな少女

の性器。外に張り出した肉傘をくわえこむ様子に余裕がない。花びらは咲き乱れる花と同じく横に広がりきっている。

挿入が進むにつれ、じゅぶウウウ、という粘着音と共に愛蜜がじんわりと溢れてくる。蜜汁は肉棒を伝い、挿入を助ける潤滑油の役割を務める。

「中が、広がって……こんなに太くて硬いものは入りません、裂けるっ、身体がっ」

「大丈夫です。こんなに濡れているのですし……魔女は私のものを苦もなく受け入れていました……だから、きつと姫様も……」

思慮深い女剣士は、おためごかしを言い聞かせながら腰を進ませる。中断する気持ちなどは微塵もない。断りを入れる配慮さえ浮かばない。男性的な肉欲に目覚めたアス力は、肉欲にそれだけ心を冒されている。

「いたいっ、アス力さまっ、許してっ、そこを破るのは本当に、あぁっ！」
ひときわせま気持ちいい場所に来た。

「姫様の処女膜……あの魔女にも奪われていなかったのですね……これが姫様が処女である証の肉膜……」

アス力の瞳に暗い炎は点った。

「ああ、この牡棒がなければ、これを貫くことはできなかつた……」

魔女に植えつけられた物に感謝の念が沸いてくる。初めはとんでもないことになったと

かい肉にミツチリと包み込まれるのも堪らない。アスカの顔はほころぶ。その一方で、愛液と混ざった破瓜の血が結合部から押し出されていた。

「はあ、ああ、処女でなくなってしまった……わたしは……ああ……」

「姫様すみません……でも、止められなくて……せめて、痛みだけは和らげてみせます」
彼女への想いと自身の肉欲を両立させるべく、乳房と乳首を責める手に熱をこめる。

子宮口まで届かせた肉棒は、すぐに抜き差ししたい衝動を堪え、その場で待機させる。

「んはあ……中が……お腹の中が満たされている……熱くてズツシリする存在感に……胸も熱くなってきた……んんっ、乳首が重たくなってきた……」

アスカの指の間で、乳首が充血し始めている。快感の興奮が蓄積してきた証左だ。平素のおよそ二倍ほどにはなっているだろうか。長く太く膨らんでツンと天井を向いている。

乳首を囲む、赤みがかかった桃色乳輪にも変化が。桃色がかかった白い乳房から分離してしまつたのではないかと思うほどに、ズイツとはみ出している。まるで表面張力が限界に来ている水のような。

「よかった、快感を感じて下さっているんですね」

腰をゆっくり動かし。ほんの少し、爪の先ほどだけ引き抜いて突く。力は殆ど込めず、突くというよりも触れるといった方が相応しい密やかさだったが。

「まずは、姫様の膣内と私の肉棒を馴染ませます」

胸と股間の内で渦巻く欲求を、これまでの人生で培った意志力で押さえつける。彼女の哀願を無視して処女を奪いはしたが、彼女への愛しさは消えていない。自分だけが満足するのではなく、王女にも気持ちよくなって欲しい。快感を分け合いたい。

「あつ、ああ、身体がふわふわして、ああ……」

心を込めた丹念な所作は効をなし、姫君の口から甘さが宿った熱っぽい吐息が漏れ始めた。大事な物を破られた衝撃で強張っていた顔から、緊張が引いていく。

「あんつ、こんな、膣内を擦られているのに……処女ではなくなったのに、わたしは」
「気持ちいいですね、姫様」

そつと心に触れる声音。肉欲に後押しされ続けた女剣士が久しぶりにだす、想いがこもった穏やかな声。

「あふんつ……そんな……国民のために婚姻を結ぶ前に膣へ人を受け入れて……んあつ、王女としての務めを果たせなくなったのに、わたしは楽しんでるの……ああんつ」

罪悪感の影が落ちているが、身体は快感を享受している。乳房が仄かに膨れ、肌が紅潮している。うつつすらと青い血管も見えてくる。

「楽しんで下さい……どうか今は……」

ゆつくりとだが、初めて膣口の寸前まで引き抜く。初めて男を知ってから時間を経過した膣肉は、名残惜しそうに絡みついてくる。逞しく張り出した肉傘により、多量の愛液が

かきだされる。

「あうう……お腹が引き抜かれるようだけれど……はあああ……」

まつげがヒクつき、お腹が小さく波打ち、口から深い吐息が吐き出される。

大陰唇から顔を出した亀頭の肉段差は女汁塗れ。破瓜の血はすっかり流れてしまったらしく、一箇所も赤くない。

「参ります」

丁寧な宣言の後、肉棒が再度王女の膣内へ消えていく。引き抜く時よりも長い時間をかけて、無垢だった内部を力づくで広げていく。

「んああっ、んんツ……お腹がまた満たされて……」

鋭角を描くカリが、膣内の凸凹を通る度に甘ったるい嬌声があがる。アスカにしる、膣肉にきゅーっと絡みつかれる快感に唇が震えている。

思いのままに腰を振りたい衝動が肉棒にのしかかってくるが、強靱な忍耐力を総動員して我慢する。

「はうう……あんっ、あっ、あ……あ……」

緩慢な出し入れを辛抱強く繰り返す内に、王女表情がすっかり和らいできた。抜き差しをされる際にでる嬌声は湿り気をたっぷり含んでいる。太ももと腕が切なそうにヒクヒク痙攣し、肉棒出入りでかきだされる蜜の量は増える一方。

「姫様…… ああ、姫様……」

肉棒との結合に慣れてきた彼女の様子に歓喜するアスカ。奥まで進入させた亀頭を子宮口とぎゅうぎゅう密着させる。

「そんなに押し付けられては…… あうんツ、んあああつ」

乳房から離れた両手を肩の横に移動させ、腕立て伏せじみた格好でお尻を上下させる。

「このまま一番奥で…… 私の精液を受け止めて下さい…… 膣内射精の味を…… 私によって体内に射精される感覚を覚えて下さい……」

「んああつ、だめ、お腹の中で射精されたら赤ちゃんが…… お願いです、それは許して下さい…… ンツ！」

「すみません、姫様…… もう、止まれません…… お許し下さい……！」

性欲を抑えて遠回りした分、射精欲求は溜まりに溜まっている。肉棒内部で起こっているひりつく疼きを快感に転換させたくて堪らない。散々経験した末に味をしめた射精を、この具合のいい膣の中で行いたい。

拒絶の言葉を紡ぐのとは裏腹に、王女の膣内はしきりに肉棒を締めつけてくる。先端のみを振動させているというのに、肉棒全体に甘い快感が焼き付いている。

「ハアツ、ハアツ、姫様っ、姫様っ！」

視界が白み、意識が遠のいていく。それなのに、肉棒に感じる快感と、射精欲求だけは

鮮明だ。

「膨らんでいる……わたしの子宮口を叩いているものが、ぐぐつと膨らんで……んあああ
あつ、だめです、だ……め……」

「ああ、姫っ、ひめえっ！」

ドクンツ！ ドクツ、ドクツ、ドクドクドクドクツ！

膨らみきった亀頭を子宮口に嵌め込んで、アス力は腰の力を抜いた。

「いやっ、熱いのが、あうああっ、精液はいけないのにつ、あううんンツ！」

流れ込んでくる灼熱感に戸惑っていたが、程なくして王女の身体が痙攣、脱力。

自分に散々尽くしてくれた王族少女の膣内で、女剣士は精を放つ快感に酔う。戦士らしからぬ呆け顔を晒しながら。緩みきった眉根と目尻。半開きの口からは舌が見え隠れし、悦楽の程をほえている。

「姫様の中に、私の精を……私の精液が姫様の中に……」

単純な射精快感だけでなく、慕う女性に自身の精を注ぐ喜びと、それを成し遂げた達成感も湧き起こる。それらは互いに手を取り合い、女剣士の悦びを深く、濃くしている。

「はあ……はあ……はあ、ああ……」

気がつくくと、眼下に王女が見えた。赤い裸身はぐつたりと弛緩している。その瞳には涙が。可憐な声を紡ぐ唇が震えている。

普段のアス力なら罪悪感を感じたことだろう。しかし、今の彼女は。

ズリュツッ！

激しい性交で外れかかっていた王女の衣服を剥ぐ。王族少女は、瞬く間に全裸同然に剥かれてしまった。

「これ以上なにを……」

身に着けるのは、太ももの半ばまで伸びる、縁にフリルがついた純白のハイソックスのみ。露出している肉体は熟しかけの少女の裸体。情事により赤く興奮し、噴き出た汗で潤った肌はツヤツヤと輝いている。

横向きに寝ている体勢のために、揉まれてくたくたの乳房は重力に引かれて紡錘形にひしゃげている。その先端は依然として充血しており乳輪は、はちきれんばかりに腫れている。中央の乳首にしる平素の倍近い長さ、太さに膨張し、天井を向いてビクついている。

そんな艶かしい身体を眺めた後、アス力の目が凝視するのは。

「ああ……」

最後の肉穴。尻タブの間にある。

自身の白濁と王女の液蜜の混合汁がこぼりと流れる上部で、ヒクヒクと息遣いを繰り返す皺に囲まれた尻穴である。そこは愛液と精液が伝ったらしく、白っぽい粘液でテカテカ光っている。

「ここを……ここにも私の体液を注げば……」

全ての穴に自身の存在を刻み付けたことになる。

愛欲の化身と化しているアス力はそう思った。

柔らかい尻タブを両手で握り、親指で皺穴を拡張させる。皺の一本一本が伸び、入り口がゆつと大きくなった。

「そこは……そこもだなんて……」

力が入らないのか、諦めたのか。王女は悲しそうに呟くだけ。暴れて抵抗しようという素振りはない。

「姫様もうしわけありません……でも私は……」
止まれません。

胸の奥から、腰の深淵から、心身が麗しい姫君への想い　愛欲が溢れてくる。
ニユジュブブツツ……。

後穴への挿入は意外にすべらかだった。膣内と同じく狭窄ではあるが。前者は、凸凹が豊富なだけに狭くても包み込まれる心地を感じさせたが、今は肉製の狭い筒の中に入れていると思わせる。

しかし、潤滑油は豊富だ。愛液と精液も穴の中に入り込んでいるが、尻穴壁からも挿入を助ける体液が滲み出ている。

「はあ……んんっ……っああ……お尻に、入ってる……人の性器が……」

姫君の様子は落ち着いている。膣内挿入した際の狼狽がまるで嘘のようだ。

「もしや、姫様……」

彼女はコクンと頷き、

「魔女が戯れにと……膣内を許す代わりに……お尻を……」

アスカの全身が止まった。冷水を浴びせられた心地だ。

あの好色な魔女ならば、この美しい姫を弄ぶというのはありえる話だ。その結果、尻穴という背徳の場所で悦楽を感じられるまでに馴致させることもあるだろう。

王族でありながら、そして清楚可憐の代名詞たりえるこの少女が、尻穴で快樂に浸れるというのは、魔女にとってはさぞや愉快なことだろう。

しかし、アスカが衝撃を受けた理由は他にある。

あの妖女でさえ、約束を交わしたとはいえ見逃した大事な部分を、自分は欲のままに蹂

躪ってしまった。

「最低だ……私は……」

これまでも負い目を感じることはあったが、魔女という比較対象ができた分、今回は重くのしかかってくる。だが。

キュンッ、キュンッ、キュンッ！

尻穴肉の締めつけ。途中で止まった挿入を促そうとでもするかのように、肉穴は勃起を誘ってくる。

「はううう……はあ、はあ……ああ……お尻……お尻に……」

ふと見れば、王女の頬がツヤツヤと紅潮している。涙で濡れていた瞳が、らんらんと輝いている。絶望を紡いでいた口からは、ふうふうと艶かしい吐息が。欲情している。

アスカにはそう見えた。自分に跨り腰を振っていた魔女の目に似た光が見える。グググググッ！

「あはあっ！ ああ、お尻が満たされて……んンツ！」

深く挿入すると、王女の背中が仰け反った。誤解しようのない嬌声がほとばしる。

「か、快感を感じてしまう……純潔を失ったばかりだというのに……不謹慎なのに……ああ、でも感じてしまう……わ、わたしは……」

罪悪感を感じている風だが、背徳の穴で悦楽を享受することを放棄する様子もない。その姿に、アスカは親近感を覚えた。

（姫様も異常を抱えてらっしやる……）

そもそも、触手と魔女に身体を弄ばれなければ、男性器を植えつけられなければ、自分はこのことをしていなかった筈だ。

姫君にしる、魔女にお尻を馴致されなければ単純な被害者でいられた筈だ。

(私達は、もう昔には戻れないのだろうな……)

王女は純潔を失い、お尻で悦楽を感じる体質になってしまった。

自分は、彼女の貞操を踏みにじり、男性器を植えつけられて男性的な性衝動を獲得してしまっている。

帳消しにする手段は、きつとない。

「姫様となら、どこまでも墮ちていきます……くうっ、ああ、姫様っ！」

肉棒をぴったりくわえこんだ尻肉壺で、一心不乱に快感を貪る。一刻も早く射精したいがために、ふくよかな尻肉へ何度も何度も下腹をぶつける。

「ふうんッ！ は、激しいっ！ お尻、擦られて、ああんんんッッッ！」

尻穴の開発は相当進んでいるらしい。力強い突きこみを受けても、王族少女は悲鳴をあげない。やめるように願うこともない。

ベットのシーツに涎の滝を流し、悲しみでなく法悦の涙で目尻を濡らす。興奮する裸身からは蒸気が立ち上り、芳しい体臭が周囲を満たす。

「でるう……姫様のお尻に出します……お尻の奥深くまでに私の精液を飛ばしますっ！」

「第三章 王女で知る獣悦」
肉棒にかかる気持ちいい圧迫感。お尻で抜き差しをされて喜びを示す王女の愛らしい異常性。肌に纏わりついてくる彼女の身体から上る汗の蒸気と体臭。

全てが渾然一体となつてアスカを昂ぶらせる。

「出して下さい、奥へ精液を……粘っこいお汁をどうか……ああ、たくさん出してえ！」
「姫様っ！」

尻タブを掴む手に力が入った。指の谷間に、柔肉がニユウツとはみ出す。そのままお尻を引つ張りながら、腰を突き出したアスカ。

ドビューーーーー！ ビュツ、ドビュツ、ビュククンツッ！

「あふうううンンンンツツツツッ！」

あられもない甘声を上げる王女。全身がピーンと突っ張り、ヒクヒクと痙攣している。アスカの全身も、根元まで挿入した状態で止まっている。

「奥まで熱いのがっ、何度も出たのに、ドロドロで、っあんツ！ お尻が熱いつ、お尻の中がネバネバの精液で、キャンツ、塗り込められてっ！」

姫君の自己申告に、アスカの獣性が猛る。もっとお尻の中を汚したい、もっと自分の体液を飛ばして、奥の奥までに自分の存在を刻み付けたい。

そうして、魔女に墮としめられた者同士の絆を築きたい。

放出が終わると、アスカは窪みが形成されるほど尻を強張らせて腰を振る。尻穴は、キツク締めつける一方で、どこまでも拡張して巨根を受け入れる。

「あふんツ、まだ硬いつ、太いつ、あっあ、ビクビクって震えてっ！」

尻穴内部の状況を王女は把握しているらしい。アスカの男根に言及しては、嬉しそうに濡れ声を上げる。

「また出しますっ、んっ、はあああ………出しますよ姫様………受け取って下さいっ！」
宣言と共に根元まで差し入れ、ぶるっつと震えた女剣士。

「んんんんッ！ お尻、お尻にまたあっ！」

汗みずくの裸身が派手に波打った。勃起を呑み込む尻穴の下にある膣穴から、多量の愛液がドプツと漏れた。

「これで………全部………」

口と膣と尻。女の穴に、自身の精液をたっぷり注ぎ込んだことに満足するアスカ。自身の体液を注入したことで、彼女との繋がりを得たという達成感もある。王女も満ち足りた風に弛緩している。これも喜ばしい。

蒸発した二人の体液と体臭に包まれる中、アスカは心地よい疲労感に身を委ね、まどろみの中に落ちた。

第四章 下衆に教えられる牝悦

「ちよいと、そのの旦那様がたあ……遊んでいきやしませんか？」

夜の帳が下りた頃。魔女の森に至近の村にて。宿屋兼酒場の陰から女の声がした。弾む調子の気さくな声だ。

呼び止められたのは男二人組。体躯以上の大剣を背負う逞しい中年男と、その連れだった。どちらもほろ酔いの赤ら顔をしており、機嫌よさそうに顔が緩んでいる。彼らはどの店に梯子しようかと相談していた所だった。

「おっ」

振り返った中年が感嘆の声。闇の中から現れたのは、飾り気のないサーモンピンクのワンピースを着た女性だ。歳は三十前後だろうか。額に嵌めたサークレットと、胸元でチラつく黒曜石のペンダント、それにツヤツヤしたルージュを引いた赤い唇くらいが、装飾らしい装飾と言える。

しかし、顔貌は美貌。眉もまなじりも人懐っこく垂れており、微笑の形を作る口元が顔全体に色気を醸し出している。

肩は女のたおやかさの具現である撫で肩。胸元は野暮ったい布を内側からぎゅうぎゅう

押し上げている。お尻も同様だ。身体の線を見せ難くする衣装であるのに、女のセックスアピールを十二分に見せ付けている。

色も好みそうな中年男の目が瞬いた。鼻の下がデレっとなび、唇の両端がつり上がる。酒による呆けは吹き飛んだようだ。連れの男も同じである。

「見かけねー顔だな。ここは初めてか？」

「はい。夕方についたばかりです。魔女に挑む勇者様方の、夜の慰安をさせて貰えればと思い……ギルドへの面通しも済ませましたので、早速ご奉仕をと思っていた矢先に、遅しい旦那様方をお見かけし、これはと感してお声をかけさせてもらいました」

愛想のいい笑みを浮かべる女に、男達のニヤニヤが深くなる。

「なかなかの眼力だ。俺等は今日も森に入って妖魔どもを蹴散らしてきた所だ。ほら、これがその証だ」

美人に持ち上げられた男達はすっかり上機嫌。大の男の掌にさえ乗せきれないほど大きな皮袋を見せ、ジャラつかせる。どうやら硬貨で一杯らしい。

おそらくは、森で狩った獲物を商人に売って得たのだろう。肉や皮や骨などは、食材にも装備品の素材にもなる。しかも、今この村は人で満ちており、お金と物の流れは活発である。商才にしろ戦闘術にしろ腕に覚えがあれば幾らでも稼げる状況だ。

「まあ、すごい。こんな勇者様にお尽くしできるなんて、女冥利ですわ」

手を合わせて大仰に驚く女。普通の者ならばやゆにも見えるそれは、低いがよく通る声と美しい容姿がそう見せない。男達はすっかり上機嫌だ。

「それじゃあ、決まりだな。お前、いくらだ？」

「すみません。お相手するのはわたしではないのです。この子で……」

彼女が出てきた陰から、一人の女が進み出た。古ぼけたフードで全身を包んでおり、そのせいで容姿の詳細が分からない。胸の隆起とお尻の大きさ、それと僅かに見える繊細な口元から女と分かる程度である。

「なんでえ、その格好は。一人は主婦みたいな服で、もう一人は砂漠超えの旅人。器量はともかく商売女らしくねー服装だあなあ。おい、顔を見せてみるよ。気に入らねー時は、おかみ、お前に相手してもらいたいもんだな」

硬貨袋を揺すりながら横柄に言う。

「さ、旦那様にお顔をお見せして」

死角になっていたために男達は見えなかったのだが、促す女の目は薄く笑っていた。フドの女は少しのあいだ硬直していたが、おずおずと顔に手をかけた。

「な………につ………おい、コートを脱いでみるっ」

現れた顔に目を剥き、男が命令。命じられた女の身体がまたもや止まり、男でなくワンピースの女を見る。女は頷いた。

フード女の眉根が寄り、まるでガラス欠け入りのワインでも飲み干すように喉を鳴らし、震える手をボタンに伸ばす。

全てが外された時、締めつけをなくした皮の被服が肉体の流麗なラインに沿って落ちていった。

「まじかよ……………本物じゃあ、ねーよなあ……………右目がある……………」
皿になった目の中には、『青光のアスカ』が映っていた。やってきた初日に優しくしたのに、手ひどく振った女である。

眼前で佇む容貌は、会った時と変わりない。清流を彷彿とさせる長く清廉な青髪も、濃紺の防護服も、その上に付けられた鈍い銀光を放つ防具もそのまま。

ただし、右目にある筈の眼帯がない。噂によれば彼女は隻眼らしいのだ。また、普段ならキリツと上がり気味である柳眉も目尻も困ったように下がっている。顔はほんのり上気している。

「気に入ってもらえたようですねえ。隣国の『ラバハ・キア』で流行している仮装遊戯という趣向です。人気の女剣士アスカさんをモチーフにしました。当人には内緒ですよ？」

「なかなかいい。分かった、この娘を買ってやる。いくらだ」
「では、これくらいで」

横目で女剣士姿の女を一瞥した後、指で金額を示した。大剣の男とその連れが金袋の中

を確認して唸る。それは、二人の手持ちの全部だった。まるで分かっていたかのように、一の位に至るまですっかり同じである。

実際、女将は知りつつ提示していた。彼女の正体は、魔女ミレディー＝ミラボーン。その類稀な魔力と魔道技術をもってすれば、袋の中身を把握することなど造作もない。

そして、防護服に甲冑をつけた女の正体もまた本物。魔女に敗れ、救おうとした王女の純潔を奪った女剣士アスカその人であった。

（諦める……諦めてしまえ……こんな私などを抱くことに、所持金の全てを懸ける価値などないだろう？）

思案する二人組みを見つめるアスカの心中は穏やかではない。

相手のことは覚えている。村に着いた早々、絡んできた連中だ。悪い印象は変わっていない。よりにもよってこんな男達に抱かれるなどは御免である。

しかし、断れない理由がある。

（姫様……）

憂いを帯びた瞳が、女将に扮した魔女の額に向けられる。サークレットの中央で輝く寶石の中に、ソフィリア王女が幽閉されている。

彼女が開放される条件は一つ。女剣士が娼婦となり、魔女が指定する男の相手をすることだ。

だが、魔女が示したことはそれだけでなかった。

但し、これでは一方的過ぎて面白くない。お前達に利益も与えようと思う。
利益？

相手が、こちらの言い値では承諾できないと言った場合はそれでおしまいだ。
おしまいと言うと、男の相手をする事となしで、姫様を返して下さると？

そうだ。それと、どんな結果になっても王女の純潔を戻してやる。

純潔……まさか、そんなことが……。

可能だよ。お前が無理やり破ってしまった膜を再生させるなど簡単だ。

ニヤリと笑った魔女の顔は今も明瞭に思い出せる。

アス力は王女の処女を奪ったことに罪悪感を感じていた。力づくで襲いかかった時も、
今と同じく恋慕の念は確かにあった。だが、だからと言って強引に貞操を奪ったことは許
されない。罪悪いがいの何物でもない。

真面目で優しく、愛国心と王族の自覚に溢れる彼女の心中はいかほどであろうか。あの
一件後も、彼女は変わらず接してくれている。静寂の湖水めいた穏やかな表情をたたえて
いる。しかし、胸の内も同じとは限らない。

（過去の過ちを取り返せるものならば取り返したい……けれど……）
好きでもない男達に抱かれるのは嫌だ。しかも、王女の眼前で。

魔女に男根を植えつけられて男の快楽を教え込まれたアスカ。その影響で、親切な王女に男性的な好意と劣情を抱いている。

今のアスカは女であり男でもある。男女関係に義理堅い男性が、恋人に操を立てたいのと同じく、王女に対して貞操を貫きたいと心の底から思っているのだ。

(諦めてしまえ！ せっかく稼いだ金なのだろう……！)

声に出さず、目で叫ぶ。と、二人がこちらを向いた。話がまとまったらしい。

「その額でいいぜ。ほら」

(まさか！)

絶句する女剣士の前で、二人の皮袋が差し出された。

「金を稼げるあてはあるが、この女を抱ける機会はこれっきりかも知れねーからな」
ネチリとした好色な笑み。

「ありがとうございます。さすがは歴戦の勇者様 豪胆ですわあ」

朗らかなリップサービスを行う魔女。かまびすしいのに、目の前が真っ暗になったアスカの耳には殆ど聞こえなかった。

「では、こちらに。お部屋を用意してありますので」

一行が訪れたのは村はずれにあるあばら家である。今夜のために、魔女が一瞬で作り上げた物だった。

扉を開いて中に入る。部屋の四隅に備えられた蠟燭立ての蠟燭と、天井の中央に下げられたランプが、オレンジ色の温かな光で部屋の隅々までを照らしている。部屋の中央にはありふれた簡素なベット。他には家具も装飾品もない。

板の床には塵の一つも落ちていない。部屋の中は、鼻の奥にツンとくる蠟燭が燃える匂いと、新築の木造住宅から匂ってくる木の匂いで満ちていた。

みずばらしい外見からは想像できないほどに整然としており、過ごすのにストレスがかかるどころかリラックスできる空間である。

「ほう。ほったて小屋のわりにやあ、いい所じゃねえか。けど、こんなとこ、あつたっけか。噂も聞いた覚えがないが」

「まあまあ旦那様。そんなことよりも、この子を楽しんで下さいませよお」

「それもそうだな……しかし、見れば見るほど、あの小生意気な女剣士に瓜二つだ……げへへへ、たっぷり楽しませて貰うぜえ」

だらしなく下卑た顔は、醜いことこの上ない。こんな男に抱かれなければならないなんて。背筋がぞーっと寒くなり、立っているだけで心臓が早鐘を打つ。

（嫌だが……やるしかないか……）

覚悟を決める。姫様の前で男の相手をするという意味でも身を焼かれる思いだが、自分の苦痛よりも王女の処女膜を復活させることの方が大事だ。

だが。

(身体は開いても心だけは……姫様を想う気持ちは忘れないぞ)

魔女の額で輝くサークレットの宝石を見やり、心中で力強く呟いた。それは、これから与えられる感覚を他人事として受け流すという宣言だ。自分が心底、心と身体を許すのは想いを寄せる姫様にだけ。他の男になどは決してしない。

「じゃあ、最初は脱いでもらおうか」

ドカツと腰を下ろし、相棒の長剣を壁に立てかけた中年が命令する。彼から少し離れて座るもう一人も頬杖をついてこちらを見ている。

(くっ……こんな連中に肌を晒すなど)

恥辱で目が眩みそうだが、今の自分は身体で男を楽しませる商売女なのだから、要求には従わないといけない。

震える手で防具の留め金を外す。普段なら戦士としての意識を刺激する、パチンという軽快音も、今は酷く惨めな気持ちにさせられる。

「おっ、いかにも悔しそうって顔をして……へへ、なかなかいい演出じゃねえか」

男達は上機嫌だ。自分達を袖にした『青光のアスカ』にストリップをさせている気になっっているのかも知れない。鎧を脱ぐという行為だけで、喜色を浮かべさせていることに唇を噛み締める女剣士。奥歯をキツク噛みながら脱鎧を続け、全ての防具を床に置いた。

「よおし、次はその野暮ったい服だ。さあ、脱ぐんだ」

尊大なもの言いに猛烈な抵抗感を感じたがぐつと呑み込み、防護服を結ぶ紐に指を寄せ、手足を締めるそれを一本一本解いていく。

結び目が一つ解ければ、その部分の締めつけが緩む。部屋の光源により仄かに温められた、森の中特有の湿り気たつぷりの空気が肌にそつと触れてくる。

（私は、本当に裸になろうとしているのだな）

衣服の守りが薄れるのを感じると、自分が今晚何をするのか否応なく意識させられる。ベツトに腰掛けてこちらを鑑賞している二人の下卑た視線が拍車をかける。両者の目は、獲物を捕らえて勝ち誇る狩人のそれである。

「どうした。早く脱げよ」

結び目を全て解いたアスカの動きが止まった。あとは濃紺の衣装を剥ぐだけなのだが、それができない。手を胸元に伸ばすまではできたが、だらんと垂れ下がった袈裟の直前でプルプルと躊躇している。

娼婦としては不適切な行為だと頭では分かっているのだが、王女への義理や、女を金で抱くゲスな男に無防備な素肌を見せたくないという反骨精神が邪魔をしている。

「恥ずかしがらずに。お客様がお待ちかねよお」

アスカの横手、部屋の壁に寄りかかって成り行きを眺めていた魔女だった。サークレッ

トの宝石部分を、にわか娼婦の目の高さに置いてこちらを見つめている。

(姫様……)

自分がこうしているのは王女を解放し、壊してしまった物を復元させるため。それを強く思い、胸の内で渦巻いていた激情を押さえ込む女剣士。

ばさり。

アスカの手で剥がされた厚手の防護服が、身体の線に沿って滑り落ちた。

「おっ……おおおっ……おおおおおっつっ！」

首の付け根から下の白い裸身が見る見る露になっていき、それに比例して観客から歓声が上がった。

オレンジ色の、揺れる光に照らされる染み一つない白い肌。肩は角ばっているが、垂れる洋梨型の肉房は丸くてポリウム満点。下着はなく、ツンと上を向いている乳首とそれを囲む乳輪は剥き出しである。

縦長のおへその横に位置するわき腹はキュツと引き締まっており、まあるい桃尻の量感を強調してもいる。

「いい身体してるじゃねーか。見たことがない、いやらしい下着をつけてるしな」

今のアスカが身に着けているのは、下半身の秘所を守る黒い薄布のみ。黒猫禪といわれる物の意匠に似ているが、素材が異なる。綿のみを素材にしているのでは出せない光沢と

硬質を纏っている。

半柔半硬なそれは、禪というよりも紐ハイレグビキニめいており、皺一つ作らずに股間の前面を覆っている。

（見ている……何て目で見ているのだ……）

獲物に照準を定めるケダモノじみた血走った目。身体の前半身を視線で舐めて歩いている。その熱烈さは、見られている肉体に物理的な圧迫感を感じるほどに強い。

特に感じるのは胸と股。男二人によつて、乳首がツンツン突かれている錯覚を感じ、下着の奥に隠している蜜穴に指が入れられているかのような心地にさせられる。

「はあ………はあ………身体が熱く………」

視線を意識するほど、意思とは無関係に身体が火照ってくる。羞恥心による肉体の赤熱もあり、全身に汗が浮かびだす。

「おい、後ろを向いてケツを突き出せ……モタモタするな、早くしろっ」

背後のあられもなさは承知しているため、アスカの反応は鈍かったのだが、せきたたられて渋々言われた通りにする。クルリと後ろを向くと、手の平に膝を乗せて前屈みに。

「よしよし。前だけでなく後ろ姿も上等だな」

「第四章 下衆に教えられる牝悦」
突き出されたお尻は、たつぷりとした尻たぶが鎮座している。禪だけに柔尻面にあるのはTバツクじみた縦紐と丸尻と腰の境目を渡す細紐のみ。

それらは尻たぶらの谷間を慎ましやかに走り、あるいは量感溢れる尻肉を困うだけ。肌の白に対する黒として、プリンと張り出した丸みの輪郭とふくよかさを強調している。

「ああ……お尻も……見られて……」

男達の様子を見れない分、前面部を見られていた時よりも感じる恥ずかしさが強い。それに何より、肌突き刺さる視線の気配も熱かった。

ふと見ると、魔女がニヤニヤ笑っている。額の装飾品も真っ直ぐにこちらを向いている。ならば、そこに監禁されている王女も見ているということだ。

（姫様、これは違うのです……決して、自分から見せたいと思っただけでは……）
心を許した相手に対して不義を犯している罪悪感がのしかかる。軽蔑されただろうか、それとも親切を仇で返した人間の無様な姿を、誰にも見られない密室であざ笑っているのだろうか。

「もういいぜえ。こっちを向け。そんで、いいと言うまで頭の後ろで手を組んでろ」

二人がのっそり立ち上がった。緩慢な足取りでアスカの目前までやってくる。鼻先まで近づいても男達は下卑た笑みを隠そうともしない。

「ひゃうっ！」

出し抜けに、顎から首にかけて柔らかく又メった感触。村に着いた直後、愛刀を急所に突きつけてやった男が、汚らしい舌で舐めてきたのだ。もう一人の男は背後に回り、反対

側の同じ箇所を、やはりネ口ネ口と舐め出した。

「ううっ……そんな所を舐めるなあ……あううっ……」

不快な口臭交じりの生温かい吐息が頬や首に吹きかかる。蝸牛じみた舌ののたくりと相乗効果を発揮して、背筋をゾワツと粟立たせ、アス力に寒気を起こさせた。

汚辱感で反射的に首が動くが、動いた先には別の男が待ち構えていて、そいつの舐めから逃れようとしても、その先では元の男に捕まってしまう。

「くくく……なかなかの演技じゃねーか。まるで、男に縁がなさそうな本物のアス力を、弱みを握って好きにしているみてーだぜ」

調子に乗った二人は、砂糖菓子舐める子供の執拗さで舌を動かす。

「汗のしょっぱさ……それに、汗まじりの身体のいい匂いが堪んねー。甘くて、汗臭くて……それに、この肌の柔らかさときたら……本当にうめえ」

いやいやと首を振る、娼婦らしからぬ抵抗さえも楽しんでいる素振り、女剣士の匂いと味を貪る男達。

ほどなくして。

（嫌だっ……姫様も見ているのに……イヤな筈なのに……）

王女のことを意識すると、悪寒が甘い痺れに変わってしまう。羞恥心によるものだと思っていた身体の火照りが甚だしくなっていく。薄布で守られた女穴の奥底が、時折キュン

と切なく疼き、内肉部が熱くなる。

喜んで体液をすすられると、アスカ自身も嬉しく思ってしまう性格が災いしているからだった。たおやかな王女に飲んでもらった時だけでなく、魔女にすすられた時もアスカの肉体は同様の反応を示している。

惨めな状況、好ましさなど欠片もない相手。なのに、身体が心から離れていく。

「おっ、乳首が勃つてきやがったぜ」

ハツとした。確かに、胸の先で佇んでいた肉の突起がむくつ、むくつと徐々に立ち上がり、硬度と体積を増幅させている。

「あ……あ……乳首が……」

目視した途端、意識が胸の先端へ。ますます血が肉突起に流入し、膨れ上がった乳頭はたわわな肉洋梨の全体を震わせるほどに震える。興奮で感度が増した泣き所には、微細な振動にさえ、疼きが蓄積していくというのに。

「旦那さま方あ。その子は母乳が出る体質でしてねえ……妊娠も出産もしていないのですけど、コリコリって気持ちよおくされると、ビューツって粗相をしてしまう仕方のない身体で……気をつけて下さいませよ？」

「な、なにをつ！」

アスカの顔色がまともに変わった。どうしてわざわざ、そんな本当のことを言うのか。

「ほうほう、そりゃあ注意しねえとなつ、と」

石めいた固い指で、隆起を続ける肉豆を摘む中年男。

「うくつ……………くひいいい！んあああ！」

捕らえた乳首を指の腹をすり合わせて擦る。敵の手により開発された乳首の感度は良好だ。優しさの欠片もない指摩擦にも、あられもなく叫ばされてしまうほどに。身体が勝手に熱くなり、じわつと汗が噴き出す。

「へえ、無愛想だった綺麗な顔が崩れちまった。乳が出るだけでなく、ここは相当に弱いらしいな……………ほれっ」

「あうつ、そんな引つ張られたら……………くふッ！止める、それ以上は伸び　ツウ！」

勃起乳首を引つ張り、たまに指の腹で擦りながら、若い巨乳を手前に引き寄せる男。興奮の赤らみと汗の光沢でツヤツヤし始めた柔乳が、前方に突き出た紡錘形になる。

「胸が……………胸の奥から……………くる……………ッ」

火照りから煮沸へ移っていく乳房。奥から、ず〜んという鈍い圧迫感が迫ってくる。射精の前兆に似たそれは、母乳がこみあげてきていることを示している。

（いけない、このままでは……………母乳が……………こんな男達の前で……………姫様も見ているのにつ）

耐えなければと思っても、身体は刺激に支配されている。人の嫌がることをする下賤な男に導かれているというのに、母乳噴出衝動が止まらない。

「う……あうっ　む、胸を揉むなあ……はうんっ……」

背後にいた男が、上げられた脇の横から手を通し、乳房を鷲づかみにしてきた。そのま
まややわやわと揉む。加熱させられていた胸が、ますます熱くなっていく。熱く滾る胸を揉
まれる快感もある。

「やめろっ、私に母乳を出させるなあっ！」

殆ど絶叫だった。しかし、顔が快感でたわんでいるのでは、威力などありはしない。む
しろ、気持ちよさを必死に否定する強気な娘という雰囲気醸し出し、相手の嗜虐心を煽
る結果しかもたらさない。実際、男達のニヤニヤ笑いも手の悪戯も加速する一方だ。

「このおっ」

羞恥と快感と屈辱で湯だったアスカは、自分の立場を忘れて思わず手を解き　間髪入
れず、彼女の目線上に魔女のサークレットが割り込んだ。その下にある目は、約束を忘れ
たのかと語っている。

「くっ……！」

奥歯を噛み締めながら手を組み直す。こんなことは終わりにし、男達に床を舐めさせた
い気持ちで一杯なのだが、そうしたら自分の過ちを正せる好機がふいになっってしまう。

「ただでさえデけえおっぱいが、ぐっつと膨らんできて……しかもこんなにピンク色だ……
乳首もすっかりコリコリで、こりゃあ近いなあ」

乳輪ごと乳首を擦っていた男が、熟れた美巨乳が相方の手で刻一刻と形を変えている光景を見ながら呟いた。

（出てしまう……ああ、姫様に見られているというのに……こんな連中の手で……）

男の感想は的を射ていた。アスカは乳房の煮え立ち具合に意識が眩みかけている。その熱は、興奮で桃色がかった乳房をグニグニ揉みしだかれる快感を増幅させ、意識の白ませに拍車をかけている。

胸は重い充足感で満ちており、限界まで拡張した乳腺は、たつぷりと抱え込んだ母乳が噴き出す瞬間を今や遅しと待ちわびている。

意思の力ではとても止められない。本当に嫌なのだけけれど、これから起こることを心で拒絶していても、身体は男達に従順だ。

「いやだ……出したくない……はあはあ、出させないでくれ……やめてくれ……っう」

「つねねーこと言わずに、思い切り出しちまいな。『青光のアスカ』の母乳……喜んで飲ませてもらうからよお……」

しつこく責めながら、汚らしい濡れ舌で顎の下を舐め始める。背中にいる男もそれに続いた。乳首を擦られ、胸を揉まれ、更に顔を舐められる。どれも、おぞましい筈なのに、嫌悪感よりも、胸を起点に起こる熱と快感の心地よさの方が勝っている。

「ああ……はあはあ……あつ、あ、嫌なのに……あ……あ、出るう……母乳出るうッ！」

爪先が伸び上がり、裸身がギクンと跳ねた。下劣な男達に前と後ろから挟まれる中、摘まれていた乳首から乳白色の体液が迸る。

「おっ、すげえ勢いだな。まるで噴水だ」

白い汁帯は乳首を責めていた男の腹部にぶち当たる。衣服がベトベトに染め上げられているというのに、男の顔は綻んでいる。

「うあああッ！ 止まらないっ、出るのが止まらないっ！」

男二人の手は、未だに休むことなく動いている。そのせいで、快感の閾値で噴出してしまふ母乳は一向に枯れない。

目の前で星がチカチカ瞬き、キーンと耳鳴りがする。心を許した相手にされているのではないのに、全身が甘ったるく痺れている。

顕著なのは、母乳を噴出させている乳首と肉房自身だ。苛んでいた熱さは静まらず、肉豆と肉果実を刺激される快感と、射精快楽に似た母乳噴出快感の度合いを高めている。胸が丸ごとグズグズになって溶解しているかのような悦楽が頭に響く。

「じゃあ、味わわせてもらっせえ」

意識が朦朧とする中、あくんと開かれた大口が目に入る。上唇と下唇が、ぬとつく唾液の糸で結ばれていて、まるで格子がかかっている風だ。白い体液を撒き散らす肉先端に、ゆっくりと影が落ちる。

「ひいつ、く、くるなあ　　アアッ！」

中年男に母乳をすすられる。考えただけでゾツとするその現実が実現した。男は赤子と同じく乳輪まで口に含み、頬を窄めて胸勃起を絞り上げる。

背後で胸揉みに耽っていたもう一人も参加する。両方の乳房が、金で女を買う下衆達にしゃぶられる。

じゅ〜っ、ずじゅるるるっ、んぐんぐっ、ちゅ〜、ちゅ〜、んぐっ、んぐっ。

湿った吸引音が部屋に満ちる。

「っああう、くうううツツツ！　吸われてる、私の母乳が飲まれているツ！」

お腹を空かせた赤ん坊のように二人は夢中だ。先端に加わる刺激により、母乳はとめどなく飛び出ている。乳腺を拡張しながら汁が駆け抜ける快感と、ちゅうちゅう吸われて飲まれる快感がアスカの頭を白ませる。

気持ちよさのあまり、反射的に、子供を抱擁する母親と同じく男達の頭を抱え込んでしまおうアスカ。それに気を良くした二人の吸引が強まる。

「はあああ、は〜っ、やめろ……離れるお……」

そうは言っても、彼女の細腕はますます彼らを引き寄せているのだが。

ぼやける頭の中で一抹の不安がよぎる。体液を喜んで飲まれる倒錯感に身体が悦んでしまっている。息が弾み、心臓の鼓動が煩い位に早まっている　　気持ちいいと思い始めて

いる。

大切な王女が見ているというのに、身体を貪られても心までは迎合しないと決意したにもかわらず、決意が肉の悦楽に侵食され始めている。あんなに嫌だと思った男達への嫌悪感が薄まっている。

「うへへへへ、甘くてコクがある乳だぜ。こりゃあ、酒よりもずつとうめえ」

みつともなく頬を窄めて母乳の出口を締め上げながら、前のめりに伸びた肉梨巨乳を乳搾りの要領で揉む。

「つう……こんな……牝牛扱いされているのに……ふうあ……ああ……」

背筋に妖しい痺れが走る。中年達の頭を抱え込んだ手が勝手に動いて、彼らの髪をわしやわしやとかき乱す。吐き出す吐息がいやに熱っぽい。

「んんっ？　ほう、乳を飲まれて大分きもちよおしくなつてたんだな」

ちゅぽんと口を離れた男が、ニヤケながらアスカの目を見て言った。

「な、何を……私はこんなことで気持ちよくな……」

実の所はギクリとしたが取り繕う。こんな男の手で、しかも母乳を出さされ、飲まれていたことで快感を感じていたなど、知られたくない。

男のニヤニヤが更に深くなる。その時、視界の端で何かが動いて

「ひゃうっ！　な……あっ……あふう……」

股間をピンと覆う特製黒猫禪の上を、無粋な硬い指の腹が這う。そこは花卉の上当たる所であり、つまりは大陰唇の膨らみをなぞっているのだ。

黒い下穿きの前面は、花びらの間から滲み出る蜜汁で湿りきっていた。肉花にぴったりと張り付いて、男を知らない無垢な形を浮き上がらせている。肉の浮き上がりは、年齢相応に肉厚ではあるが、蕾のように慎ましやかだ。

「こりゃあ、随分とガキっぽいまんこだなあ…… 処女みてえだ」
指を舌にして執拗に表面を舐め回し、中年男は形を確認する。

「はあ…… ああ…… 指が…… んっ……」

胸を弄られていた時から切なく疼いていた場所に、甘いむず痒さが起こる。内股がヒクツ、ヒクツと痙攣し、蜜汁の出が多くなる。しかし、仄かな刺激であるために充足感は得られず、逆に肉の不満が蓄積されていく。

「処女ですわよ。ですから、旦那様の手で穴の喜びを教え込んで下さいましな」
傍観者でいた魔女が嘴を突っ込んで煽る。

「ほう！ 本物のアスカも処女だろうと思ってたが、この娘もそうだとはな。ますます本物を相手にしている気分になるぜ。やっぱり買ってよかった」

男はしゃがみ、黒布の眼前に顔を持ってくる。

「くくく…… すっかり腫れちまって…… 処女のくせに、一人前にヒクついてらあ」

「あああ……見るなあ……」

「おっと、頭の後ろで手を組んで大人しくしてるよな……ふむ、なるほど、ここをこうすれば解けそうだな」

初めて見る下着をしげしげと見つめ、構造を理解すると指を伸ばした。

ぬらあああ……。

アスカの股間から黒い禪が引き離されていく。肉花卉と下着の裏側を繋いでいた、何本もの粘っこい筋が名残惜しそうに糸を引いている。粘糸はどんどん細くなり、やがて消える。ぐっしより濡れた下着は、部屋の隅に放り投げられた。

覆いがなくなったことで、溜まりに溜まっていた股ぐらの熱が、愛液と汗が混じった上気と共にむわぁんと開放される。

「甘酸っぱい匂いだぜ……いかにも処女って感じのいい匂いだあ」

小ぶりな肉花卉に鼻の尖りを触れさせて、部屋の端でも聞こえそうな鼻息を立ててスン嗅いでいる。

「か、嗅がれてる……じっくりと腰を据えて……私のあの部分の匂いが……姫様にも嗅がれたことがないのに……はあああ……」

腹の底がかあつと熱くなる。抵抗が禁じられている状態で、自分の秘めている場所を暴かれ、触れられずに蹂躪されることに奇妙な快感を感じてしまう。

姫様が見ている前で、ゲスな男にされていると叱咤しても、そうすればするほど身体が反応をしてしまう。

今も、殆ど縦筋である花びらの間からとぷつと蜜が零れ出て、男の鼻先から眉間やらを
広範囲に汚した。男の機嫌は悪くならない。むしろ喜色を浮かべている。

「どれどれ、おおっ、中はピンク色かあ」

二本の人差し指で左右の花弁を外側に伸ばし、広げられた肉穴内部をまじまじと観察している。

「上も下も皺のコブで一杯だ……ちんぽを突っ込んだら、満遍なく擦ってくれるだろうなあ……しかも、もうぐじゅぐじゅで……絶好調発情中って感じだ……セックスなんて興味ないって顔してる処女のくせに、スケベな穴を持つてるもんだぜ」

「私はそんな女では……お前達なんか何とも　　ううッ！」

反論の言葉が、上ずった悲鳴で締め括られた。青い蕾の中に、中年男の舌が差し込まれたのだ。

「そんな……あッ、ひいつ、舐めるな　　んんッ！　くうっ、あああああッ」

唾液でぬるついたプリプリの舌が、我が物顔で狭い腔内を渡り歩く。下着越しに性器の形を確かめていた執拗さが可愛く思えるねちっこさ。内部に広がる肉溝の全てに、男の舌の感触と汚らしい唾がすり込まれている。

「じゅるるっ、匂い通りに甘酸っぱい汁だぜ。しかも、だんだん味が変わってきてる……牝汁の味にな……肉穴の凸凹を一つ一つ舐められるのは、そんなに興奮するか？ ん？」

「馬鹿なことを……私は興奮など……あふっ……」
大嘘である。

身体は甘い痺れに包まれ、内股にはひっきりなしに愉悦の痙攣が起こっている。舌の形に拡張している肉穴内部は射乳直前の胸と同じく煮立っており、慣れ始めた大きさに不満を抱いているらしく、もっと長く太いのが欲しいと、疼きとして心に訴えてくる。

ねだれば、もっと太いもの 股の間で膨らんでいる物を挿入してくれるだろう。王女でない男の手管によって心地よく震えてしまうことでさえ罪深い、身体の反応は止められない。触手や魔女にそう慣らされてしまったのだから仕方がない。

しかし、自分から性行為を楽しもうと動くのであれば、それは想いを寄せる王女への明確な裏切りなのだ。

汚らしい男に快感を感じさせられていることを恥に思う感情よりも、もっと奥深くにある譲れない一線を意識して抵抗するアス力。男の後頭部を再度抱きかけていた手が、頭の後ろでガツシリと組み直される。

「だいぶほぐれてきたなあ……ナカは熱々のグズグズ、ベロをぎゅうぎゅう締めつけてくるぜ……どうだ？ もっと太い肉だともっと気持ちよくなれるぞ？ 気持ちよくなりたい

だろう？」

処女膜をれるれろと舐めながら、いやに優しい誘惑声で言うてくる。

「くっ、馬鹿にするな……うふう……犯したいのならばさっさと犯せ……お前の方こそガマンできないのではないか？ んくっ……こ、股間の男性器ははちきれんばかりに膨れているのが見えているぞ」

下半身に顔を埋めている男を女剣士の顔でキツと睨み付け、凜呼とした声を浴びせるアスカ。

「言うじゃねえか。ここはもう、オトコが欲しくて涎をだらだら垂らしてるのによお……まあいい。身体への下準備はこんなもんでいいだろうからな」

言うや否や、逞しい腕で彼女を抱きかかえ、ベットに仰向けに寝かせる大剣男。アスカは股を開いて膝を立てる格好になっている。手は頭の後ろで組んだままだ。

「これから、お前の穴を立派な牝マンコにしてやるよ」

衣服を脱いで全裸になる男。醜い性格に反して、身体はすこぶる逞しい。筋骨隆々で割れた腹筋が特に印象的だ。

「第四章 下衆に教えられる牝悦」
そして、その延長線上にある男性器。既に興奮で硬く膨れ上がっている。肉幹は、浅黒い肌よりも更に黒ずんでおり、皮の終端より先には紫がかかった亀頭が頭を出している。ぐつと張り出した亀頭冠はキノコの傘を彷彿とさせ、ツルツルとした全体が、オレンジ色の

明かりを受けていやらしく輝いている。

（私のよりは小ぶりだが……なんと禍々しい……）

「びびったのか？ 心配するな。俺が相手をした女の大半は、最初はそう思ったさ。けどな、俺は女には優しいタチだからよ。最後には、もっともっとよがってたもんだぜ」

これからお前もそうしてやる、と目で続け、膝立ちでにじり寄ってくる。

鍛えられた肉体と大勢の女を鳴かせてきたという性器に、アス力は威圧感を感じた。

（異物が自分の身体に入る……それに、生涯で一度だけの破瓜をこんな形で体験しようというのだからな……臆するのも仕方がないか……武人の自分でもこれなら、可憐でお優しく、国を大切に思う姫様が感じた恐怖はいかほどのものか……それでも事後も、愚かで野蛮な私に変わらず接して下さって……）

同じ境遇になり、改めて自分の罪深さを思い知り、同時に彼女への想いが深まる。

「いくぜえ……なに、痛いのは最初だけだ。すぐによくなくなるからな」

むじゅり……。

ビチビチに膨れ上がった亀頭が、仰向けの肉筋にあてがわれ、めり込んでいく。愛液でぐしょ濡れ状態にある一対の花びらは、おぞましい侵入者にぴったりとくっつきながら左右に開いていく。

「くっ……」

異物が侵入する様子を見つめながら、歯噛みするアスカ。それまでの興奮が鎮まってい
く。それだけの嫌悪感。膣内が肉棒の形に拡張している感覚も不快でしかない。

「ううっ……………あくっ……………」

男の腰が迫ってくるのに比例して、身体の内部に猛烈な圧迫感が生じます。まるで、頭
のてっぺんから爪先までを、極太の芯棒で無理やり満たされていくかのよう。長い間修
練に明け暮れていた女剣士にも初めての痛苦だ。

「力を抜け。オンナなら誰もが通る……………苦しくても始めだけだ。じきに、オトコのこいつ
が病みつきになる……………つと、へへ、ここが膜だな……………おらっ！」

一旦、腰を止め、先端が当たった場所をツンツン叩き、最後にズンと腰を突き出す。

「……………ツああああ！」

鋭い痛みが全身を駆け巡った。流石の女剣士も目を剥き、身体が勝手に跳ね上がる。受
け止めたベツトが耳障りな音を立てて軋んだ。

「へへっ、ごっそさん。いい破き心地だったぜ」

舌なめずりをする男。苦痛に喘ぐ様を見ても、その瞳には憐憫の欠片も生じない。むし
ろ、してやったりという喜びが浮かんでいる。

（こんな男に……………私の初めてが……………っ）

覚悟を決めた筈なのに、後から後から心の中に悔しさが溢れてくる。痛みのでした

涙の意味合いも変化している。

男はアスカの細腰をガツシリ掴んで引き寄せせる。破瓜の痛みが残る身体は、太い腕の膂力にあっけなく屈服。男女の結合がより深くなる。それに伴い、棒と穴の合わせ目から赤い鮮血がジクジクと漏れ出てくる。

「ふう……以外に深かったな。根元まで必要になるなんざ、いつ以来だっけなあ」

胸の中に溜まった空気を深呼吸で吐き出す。その仕草には満足感が滲み出ていた。達成感といってもいいかも知れない。勃起性器の裾は花卉の峰とびったりくつついている。

「お腹が……一杯に……あんなものが……」

処女膜を破られた痛みはまだ尾を引いているのだが、そんな状態でも膂内に居座った巨肉棒の存在感は明瞭だ。ずっしりと重く、か弱い女壺を自身の形で型抜きしている。

結合部を見ていると、毒々しい勃起の全容が思い出される。あのようなグロテスクな物が自分の体内に入り込んでいると思うだけで、吐き気を感じる。

もしも、目の前の相手が王女であるならば同じ物でも違った感じ方をしたかも知れないが。ふと、傍観者に徹している魔女の額に目がいく。

（もう、姫様の前で醜態を晒すことはないだろう）

先ほどまでは翻弄されてしまったが、今、男には嫌悪感しか感じない上に、身体も快感とは対極にある感覚に包まれているのだから。想い人に痴態を見せずに済むと思うと安堵

感を感じる。

「どうした、動かないのか？ 私の中で肉棒を擦り、気持ちよく精液を出したくて堪らないのだろうか？ 私の中でお前の物が何度も震えている。これはその証拠だということ位は分かるぞ」

心理的な余裕ができたことで、挑発めいた言葉を紡ぐ女剣士。唇の端が不敵に吊りあがっている。

「言うじゃねえか。確かに、処女マンコの具合よさにちんぽがヒクつきっ放しだけだよ。いやあ、ただの娘の穴じゃねえなあ。まるで本当の戦士か何かのナカみてえだ。鍛えられた女っていうのか？ 仮装っついて、ここまで拘るとは恐れ入る」

筋肉中年の唇の両端が上がり、と同時にアスカの蜜壺の内部で肉棒がグツと膨らむ。

「話が逸れたな。でだ。心配してくれなくとも、今から楽しませてもらうさ」

硬く熱い牡棒が、処女を喪失したばかりの膣内をゆっくりと行き来する。蝸牛の歩みよりもずっと遅い。粘着質で鈍い水音が周囲に響く。

(なんだ……身体が……)

痛みが徐々に溶けていく。代わりに、甘い痺れが蜜壺にじんわりと広がっていく。苦痛で冷えていた肉体も、少しずつ熱を取り戻している。

ぐちゅっ……………ぬちゅっ……………にゆる……………ぐぽうっ……………。

それから数分、遅い抜き差しが繰り返された。ゆったりとした動作なのに、男の顔は真っ赤になっっている。額には汗の雫が幾つも滲んでおり、歯を食いしばった様子は、痛みに耐えているかのよう。しかし、それにしても表情に緊張がなく、むしろ綻んでいる。

「あう……………つう……………あふう……………こんなことが……………くう……………」

余裕綽々だった女剣士の吐息が艶かしさを帯びている。中年と同じく顔が赤らんでいる上に、頬に汗が滲んでいる。ただし、表情は対照的　悔しそうな顔だ。

「だんだん気持ちよくなってきただろう。俺の棒とお前の壺が馴染んできたのさ。感じるぜえ、俺のチンポを包む壺肉が嬉しそうにきゅきゅ抱きついてくらあ」

「そんな馬鹿な……………私は、お前など好きでもないのに……………なのに　はううう……………あんなに痛かったのに、どうして……………こんなことに……………あつく……………」

認めざる得なかった。今や膣内は熱く燃え、牡勃起が出入りする度に甘美な搔痒がもたらされる。蜜壺の熱は全身に波及し、肉体が熱の塊になるほど快感が増大していく。頭が霞がかり、意識がぼんやりしていくことも悦楽の純化に拍車をかける。

「見られているのに……………姫様に見られているのに……………」

出し入れを続ける男は、事情を知らないだけに一瞬怪訝な顔をしたが、受け入れがたい現状を前にしてのうわ言と判断して無視した。

「どうだ、こいつがセックスの味だ。俺が教えてやってるんだ」

相変わらず、いやらしい速度で動きながら得意顔で言い放つ。無理やり感じさせられることで濡れたアスカの瞳をまっすぐに見つめながら。

「違う、私は気持ちよくなど……気持ちよくなどなっている筈はない……！　こんなのは最低だ……気持ちよくなんか……くふう……あ……ひいつ！」

髪を振り乱し、聞き分けのない幼女じみた否定を繰り返す彼女に、ズンと重い一撃が加えられた。それだけで、聞き苦しい抗弁があられもない嬌声に変化する。

「そうかそうか、そりゃ悪かった。これでもおらあ女には優しくする夕子だからなあ。お前のような強そうで美人な女には特にな……お前には見えに覚えのないことだが、お前が化けた女にはちよつと借りがある。これから、そいつを晴らさせてもらうぜ」

暗く笑い続ける。

「もうそろそろ本気を出していいだろう……大いに鳴かせてやるぜ、アスカ。恥をかかせた男のチンポで女冥利を味わわせてやるよ！」

自身の亀頭冠　ほんのり赤い透明の汁でヌラヌラだった　が顔を出すまでたつぷり引き抜き、容赦なく突き入れた。

「はうあああつつつつつ！　んんっ……くひいんんんううう！」

男も凌駕する凄腕剣士の口からみつともない悲鳴が上がった。根元まで入ると、腰が数秒間硬直。重い勃起肉の充足感に、アスカから甘い鼻息が漏れる。ズルズルと引き抜かれ

る際には名残惜しいと言わんばかりの牝声が。そして、もういちど深々と刺し抜かれた際には、家屋を奮わせる牝鳴きが木霊した。

「なんて声を私は…………… ああ、でも…………… くううつつううう！ はあ…………… はあ…………… 声が出てしまう…………… こんな情けない声、聞かせられないという ううんんツ！」
奥に当たれば頭の芯まで揺さぶられ、引き抜く際には膣肉を限界まで引きずっていく。膨れ上がった肉棒は内部をみっちり埋めているのだが、後から後から湧き出てくる愛液のせいで、男の動作は滞らない。

宴から離れた場所にたたずむ魔女は、愉快そうにこちらを眺めている。その額では、王女を封じ込めた宝玉が鈍く輝いていた。

つい先刻した決意も、姫君への想いも忘れてはいないのだが、男によって享受させられる快感は圧倒的だ。意識を集中しようとしても、すぐに気が散ってしまい、魅惑的な感覚が心を占領してしまう。

「見ないで下さいっ、見ないで……………」

恋人に醜態を見られた乙女と同じく、魔女の額に向けて哀願するアスカ。その時、男の手が胸に。

洋梨型の巨乳は、性的な興奮によって一回り大きくなっていた。普段は白い肌もすっかりピンク色。浮かぶ汗によって更にツヤツヤと輝き、蒸発した汗と一緒に空気中へ溶け出

した女の体臭が漂っている。

肉房がそんな状態であるのならば、先端も同様だ。表面張力で張り詰めた水面と同様に桃色がかかったピンク色の乳輪はぐつと張り出し、中央に位置する乳頭は平素の二倍ほどにも膨らみ、見るからに赤熱しているそこは、断続的にしゃくりあげている。

「なんだ、女將に見られるのが嫌ということなのか」

「ようやく得心したという顔の男は、彼女を見やり。」

「あいつは楽しそうだぜ？ もっと乱れて楽しませてやれよ」

「キョーーーーーッ！」

泣き所をまた責めてきた。

「ちがう、彼女では　くあああつ！　ち、乳首はっ、今は、っ、摘むな　あふうああ

ああつ、む、胸も駄目だつ、だめえッ！」

ただでさえ、牝牝の交尾で身体を緩まされているというのに、触手や魔女に飼いならされた胸を弄られては。

「第四章 下衆に教えられる牝悦」
興奮で勃起した乳首は、男の手荒い摘み上げにも大いに悦んでしまう。頭のとっぺんを突き抜ける鮮烈な快感が頭を焦がし、正気を吹き飛ばす。男は乳頭を摘んだままで、伸びた巨乳を上下に振りもする。普通なら痛みを感じるだろうに、胸の芯にまで訪れるのは目が眩むほどの深い快感だ。

反対の乳房は、大きく広げた五指で荒々しく揉まれている。垂れ気味の房は男の手の平にも余り、ゴツゴツした指が沈み込む度、柔肉がその指の間からむにゅりと飛び出す。

汗ばんだ肌は、吸い込まれるように中年の掌にぴったりくっついていて、肌同士が離れ離れになり、フルンと元の形に戻る瞬間の微振動がいやに心地いい。

「あふう……見られているのに……はあ、はあ、はあ、はあ、ああ、こんな男にされているのに……んああっ」

ズンズンと身体を揺さぶる牡の抜き差し。

粗野に扱われても牝の悦びを感じる泣き所。

胸と膣を快感で一杯にされている今、アスカの気力がどんどん萎えている。男への敵愾心はしぼんでしまっている。

「姫様、すみません……ふああ、許して下さい……こんな男に醜態を晒してしまつて……面目ありません……んくうッ！」

身体の反応を止められないのであればせめて、と思いつく謝罪。しかし、その言葉を紡ぐ度に、胸の奥が妖しくざわめきだす。責められる最中に王女の顔を思い浮かべると剛棒に突かれている股間の奥底がキユンとざわめく。

「ははは、謝つて感じてるのかよ。朴念仁なおぼこかと思えば、本性はとんだ変態だあな……おらおら、もっと謝りな。金で女を買う男によがらせられてごめんなさいってな」

「ああ、ごめんなさいっ、こんなゲスに気持ちよくなっでごめんなさいっ！」

強迫されての惨めな台詞。それを口にするほど、快感が大きくなっていく。触手達や魔女はおるか、想いを寄せる王女との時間でも感じたことのない、身体の昂ぶりが起こってしまう。

「今度は俺にだ。村の中で恥をかかせてごめんなさいと言えっ」

「すみませんでしたっ、大勢の前で体面を潰してしまっ……折角のお誘いを断ってしまっ……」

言いなりのアスカに、剣士としての面影は微塵もない。そこにいるのは肉棒に抗えず、背徳の快感に打ち震える弱い牝。

「くくっ、よしよし、素直にいったご褒美だ。たっぷり受け取れ！」

咆哮を上げた直後、正上位で繋がるアスカの身体に覆いかぶさる。自分の腕で彼女の肩を深く抱き締め、自分の胸板と彼女の豊満な乳房を強く密着させた状態で動きを止める。流れ込んでくる男の体温が奇妙な安堵感を感じさせ、鼻腔に入ってくる汗交じりの体臭が何故だか心地よい。

壺肉を征服している肉竿も、子宮口に嵌り込んでいる亀頭も気持ちよさそうにビクビク脈打っている。

「うおおおおおおおおおッッッッッ！」

「あつ、はあつ、あああああツツツ！ あ……………出てる……………」

最後の膨らみを見せた亀頭が、愛液でぬかるんだ子宮の口に精液を吐き出した。処女膣の狭気持ち良さで醸造されていただけに、放出される牡汁は極めてドロドロ。子宮の入り口がゼロ距離から牡工キスを浴びせられる心地を刻み込まれる。

牡棒は断続的にしゃくり上げ、その度に濃厚な汁を撒き散らす。程なくして、愛液で潤った凸凹の膣内はドス白い粘液で満たされていく。牡汁は肉皺の深い所まで入り込み、自分の体臭と質感を誇示している。

（精液が……………男の種が私の中に……………妊娠してしまう……………）

下らない男の子供を宿してしまう。それはとんでもないことであるのに、お腹の中に広がる濁汁の熱さと奇妙な充足感は止まらない。危機意識は、王女へ謝罪している時に感じた不可思議な快感となり、前者らと結託し、心身を弛緩させる。

「はあ……………はあ……………はあ……………んっ……………あ……………」

出し抜けに、粘液と肉の存在感で満たされていた体内に空虚感が訪れた。肉棒が引き抜かれたのだ。それと同時に、女の肉穴からドロツとした塊が零れ落ちるのが分かった。膣肉の下側をゆっくりと滑り、開閉を繰り返す腫れぼった大陰唇をこじ開けて、未練がましく肉花に纏わり付いた拳句、ボタツと落下している。

「見る」

横柄な態度で、アスカの鼻先に勃起を突きつける中年。処女膜を破り、幾度となく膣内を出入りしたそれは、精液の粘っこい白とトロツとした愛液に塗れており、所どころにピンク色の染みができていた。

自分を乱れさせた痕跡を目の当たりにした女剣士は、牝牝の生々しい汁と、錆びめいた血の匂いを漂わせるそれに釘付けとなる。見ているだけで、胸の奥がぼうつと熱くなり、興奮した乳首と同じく、全身がわななないてしまう。

「金で買って、処女でなくしたチンポだつてのに、物欲しそうな顔してるなあ」
「なっ……誰がそんな……出鱈目を」

侮蔑の言葉にハツとして反論する。だが、胸の鼓動は煩い位に早まって落ち着かない。「強情じゃねえか。嬉しくなっちゃまうぜ。こっちはまだ手加減してるんだ、そうこなくちやなあ……おい、お前も混ざれよ。折角ナマの女を楽しめるのに、いつまでも独りでそんなことしてんなよ」

もう一人の男は部屋の隅であぐらをかいていた。衣服を脱ぎ捨て全裸だった。天井を向いている自分の肉棒を、アスカが穿いていた、愛液でぐしょ濡れの黒猫褌で包み込んで。

男はそれで自慰に耽っていたらしく、黒い下穿きは精液のドス白さで汚れている。染みの広さを見ると、射精回数は一度や二度ではないと思える。

「第四章 下衆に教えられる牝悦」
「私の下着が……あんな風に使われて……はあ……はあ……」

精液でドロドロの黒い禪。それを間に挟んで握り締められている勃起は、ピンとそそり立っている。男はまだまだ欲情しているのだ。脱ぎたてだった下着だけで。自分の恥ずかしい体液をたっぷり含んだ下穿きでそうなっているとと思うと、自然に息が乱れた。

「尻の穴、好きだったろ？ やるよ。二本挿しといこうぜ」

「あらまあ、流石は旦那様。穴を区別しないで楽しもうとはお見それ致しますわ　お尻をお楽しみならこれをどうぞ。滑りがよくなり、一層たのしめますよ」

女将が透明な小瓶を差し出す。内部は液体で満たされている。アスカには見覚えがあった。触手や魔法の体液である。あの、女を発情させる媚薬汁。

「お、用意がいいな。ほら、こいつを使えよ」

相方に放り投げ、受け取られる。厚いガラス瓶が掌とぶつかる軽い音が、異様なほど明瞭に聞こえた。

「四つんばいでこっちにこい」

仰向けに寝そべり、逞しい肉の敷物となった男が手招きする。断ることができないアスカは、犬と同じ格好で歩み寄る。一歩進む度に、牡肉棒が去った牝穴から愛液と精液の混合濁液が垂れた。

「よし、そのまま腰を沈めろ。手で俺のもって穴に入れるんだ」

真上に来た彼女に命令する。アスカが自身の純潔を散らし、身勝手な膣内射精を行った

男根に指を絡める。肉棒は熱く、牝の体液でヌルヌルしており、そしてとても強張っている。

（私の手で、私の中へ挿入させる……………でも……………どうして胸が詰まるのだ……………）
屈辱であり、汚らわしさの極みである筈なのに、胸の中が歓喜めいた衝動で包まれていく。肉竿に添えられた手に、精液交じりの愛液が移ってくる。

「ああ……………熱い……………」
牝の味を知った大陰唇の中央に、未だに性汁を纏う亀頭を迎え入れる。性交を一度済ませていっても、花弁は蕾と同じく慎ましかったのだが、女慣れした勃起の径に合わせ、口一杯に啜えさせられている。

「あ……………あ……………ああ……………はああ……………」
亀頭冠まで呑み込むと、アスカは手を離し、ゆっくりと腰を沈める。二人の一体化度合いが大きくなっていく。結合箇所からジユブツと溢れる汁は、破瓜の血や精液の残滓よりも愛液の割合の方が高くなっている。

「中が……………満たされて……………」
根元まで迎え入れた時、アスカから溜め息が漏れた。再びやってきた充足感は酷く甘ったるい。自分の体液をすすられた時以上に、相手に好感を感じてしまう。

「あううっ！ 後ろからも……………ッ！」

瞼を閉じて感触を味わっていた最中、お尻の穴に清涼感が起きた。もう一人の男が小瓶の中身を塗りつけていたのだ。

男は尻穴の入り口にある皺の谷間にまで丹念に媚薬汁を塗りつける。入り口の準備を済ますと、潤滑液を中指にたっぷり絡ませ、今度はお尻の内部に指を入れた。又ル又ルを帯びた指は、狭い内部を何度も行き来する。

「うああ……そんなに塗られたら……ふあああッ！」

発情体液は早速猛威を振るつた。お尻の内部が、性感帯の膺や胸に劣らないくらいに熱くなり、肉で満たして欲しくて堪らなくなる。そこに、

ジユブブブブブブブブブブブツ。

待望の勃起が侵入。この男のものは、アスカはもとより大剣使いのものと比べても一回り細い。だが、代わりに長い。お尻の奥深くまで満たすほどに。

自分の恥ずかしい体液つきの下着に、異様なほど欲情していた変態男と一つになっている。普段であればとても正気ではいらねえだろうが、発情したお尻を満たしてくれる物の持ち主には悪感情が湧いてこない。

(いやではないなど……こんな連中に遊ばれているのだぞ私は………なのに………)

前後の肉穴を占拠した二人は、息を合わせて動き出す。前の穴が奥まで満たされれば、後ろの穴が空虚で満たされる。後ろの男が深々と腰を突き入れれば、仰向けの男はアスカ

ノ腰を持ち上げて挿入を浅くする。

「はあっ、あふう、ああ、くう、姫様が見ているのに……申し訳ありません、姫様、ごめんなさいっ！」

魔女はしゃがみ、アスカの目線に自分の顔を合わせている。無理やり処女を奪ってしまふほど想っている姫君に見られているというのに、貞操を省みないことで生じる背徳的な旨みの味を占めてしまっている女剣士は、不貞を働く甘美を貪る。

「ただでさえ、処女喪失したてのキツキツまんこだったのに、うはあ、堪らねーな！。ツンと済ました顔してたのに、実際はド変態じゃねえかよっ！」

五指を目一杯広げて、ぶらぶら揺れていた巨乳を捕らえると力の限り握り締める。

「くうううっ変態ですっ………アスカはど変態です………んんあっ………」

変態という烙印も、今のアスカは受け入れてしまふ。そして、快樂の炉への薪とする。

「おらっ、まんこケツ穴を掘られてイク所を、よがり姿を見せたくない女将に見届けてもらいなっ！」

乳首を執拗に擦り上げる。お尻を楽しむ男は、縦長に垂れた乳房を横から握って揉んでいる。搾乳場面の再現である。ただし、快樂スポットと化している二つの穴を責められているだけに、快樂の度合いは比較にならない。

「はあ、見て下さい姫様………こんな下劣な男達に大事な穴を二つも抉られ、あなたに

も搾らせたことがない胸に触れさせて……………んふう……………い、いく所を……………あなたをお慕いしているのに、お金で女遊びをする男などに絶頂させられる所を……………ああ、どうか見ていて下さいいい」

言い切ったアスカは、心身がふわりと軽くなつた気がした。身体を覆う熱量はいよいよ大きくなる。牡棒にズンズン突かれる衝撃で起こる濃密な陶醉感と相乗効果を起こし、背徳悦と肉悦の記憶を彼女の心と肉体に刻み付ける。

「それっ、またナカ出ししてやるっ、下の口で種汁を飲みながらイキなっ！」

子宮口が叩かれ、同時にお尻を出入りしていた肉棒の根元が尻タブに衝突した。

二本の先端から、熱い濁液が放出される。圧倒的な熱を帯びる体液は、膣とお尻の中を覆い尽くす。

「んひいつ……………ナカもお尻も熱いので満たされて……………姫様が見ている前で、男の精液を、二箇所から身体の中に……………いいつ、こんなの初めてで……………堪らないっ……………んはあああ、くるう……………ああ、くるう……………」

「イケツ、両穴でちんぽを咥え込んで、種汁をゴクゴク飲みながらイケ、イケよっ！」

高みの一歩手前まで来ていた女体内部で、濃厚な精液がびゅるびゅると迸った。膣内も尻穴内も、余す所なくドロドロに染め上げられる。

「あひい、いくっ、あっ、あっ、あっ、イケっ、イケウウウウウウウ！」

魔女に迫られた時にも口にしてしまった言葉を、今度は下劣な異性に叫ばされた。

赤らんだしなやかな背中がグツと仰け反り、大きく弾んだ巨乳の勃起から乳白色の体液が飛び出て宙空に放物線を描く。雫の一部は、魔女の額　　王女が囚われた宝石に振りかかった。

「あ……………はうあ……………姫様ごめんなさい……………姫様でない相手に気持ちよくさせられて……………イカされて……………はあ……………」

絶頂直後の脱力に負けて崩れるアスカを、男が胸板で受け止めた。

「ぐへへへへ、おいおい寝るにはまだ早いぜ？　料金分は楽しませてもらうんだからな」
我が物顔で肩を抱き、起こした顔をねつとりと舐める。肉花卉はまだ大きく広がったまま。それは勃起が健在であることを示している。

牝悦でのセックスの喜びを知った顔で覚醒と失神の狭間を漂うアスカの様子を、魔女は満足気に見つめていた。

最終章 アスカの選択

「これで膜は元通りだ」

アスカが娼婦の真似事をやり遂げた翌日、魔女は約束を果たした。

王女と女剣士の相部屋の、アスカがソフィリアの股間を赤く染めたベットの前。そこに王女が立っている。スカート両端を摘み上げ、無毛の股を晒しながら。

可憐な姫君の美顔は熟したトマトと同じく真っ赤になっていく。あどけなさが残る目はギョツと閉じられ、まつげが羞恥で揺れている。その振動が波及しているかのように、スカートを摘む指も小刻みに震えている。

ツルツルの蓄じみた女性器から、魔女の中指が引き抜かれた。お腹に指の腹を向ける体勢で侵入していた細指は、ねっとり濡れていた。おそらくは膣を潤している汁のせいだろう。まさかあの姫君が、指挿入だけで興奮汁を垂らす筈はない。

挿入直前、呪文によって暗い紫色の光を放っていた細指は、今は何の変哲もなかった。

「確かめたいであろう？ アスカ。自分の指で確かめるといい」

呼びかけられたアスカはギクリとした。恥ずかしさで全身が紅潮する王女の様子に興奮を覚え、見入っていた最中だったからだ。ひよっとしたら、自分が欲情していることを見

透かした上で話かけてきたかも知れない。

「い、いえ。あなたは約束を守る人だ。なのに、確認するなど侮辱です」

「気の回し過ぎだ。わらわは気にせんぞ。遠慮せずに確認してみる。あんな、程度の低いゴロツキどもに抱かれるのを我慢するほど、王女の肉膜を破ったことを気にしていたのだらう？」

涼しい顔で心に突き刺さる言葉を並べ、女剣士の手をとる。利き手の中指の根元を指で挟み、無理やりに姫君の女性自身に入れてやる。

「あ……アスカ様の指が……」

粘っこい水音と共に、第一関節までが中に埋まる。潤いのある肉が四方八方から迫り来て、新しくやってきた来訪者に抱きついてくる。

「ついでに締まりも直しておいた。天然の処女性器と遜色ないキュウキュウ具合だぞ。もつとも、男根で愛でられる快感は身体と脳が記憶として覚えているがな。処女でありながらオナナでもある。男性器を植えつけられたお前とある意味同じだ」

意味ありげに語り続ける魔女だったが、アスカは上の空だった。指を締めつけてくれる膣肉の感触に意識が奪われている。

「はあ……はあ……姫様のここ、凄く狭くて……私のを入れたら一体……」

「最終章 アスカの選択」
下腹がジクジク疼く。性交時の百倍は希釈された甘い痺れが股間に広がっている。自分

の陰核に血が流れ込み、硬度を持ち始め、男の性徴を現し始めている。

アスカの男根は、男性的な欲を覚えない限りは無辜のクリトリスであり続ける。そのため、オナナの面が強く出ていた男達との夜では、膨れ上がることは一度もなかった。

（姫様の女性器……………姫様あ……………）

牡の衝動に突き動かされる。指を鉤状に曲げると、手首をそつと前後させる。中はまっ
てましたと言わんばかりに締めつけを強くし、男根の射精を促す時と同様にぜん動した。

「ふうあ……………ああん……………お、お戯れはお許しを……………んんっ」

純白スカートを摘むグローブがキツク握られる。哀願する声は上擦っているが、仄かに濡れた響きを纏っていた。

「あ、すみません……………つい……………えと……………」

名残惜しかったが、静止の声を聞き入れてやめる。願いを聞き入れないことで、彼女を苦しませる結果がまた起きないとは限らないからだ。さつさと魔女の指から開放されようと思いつつ、指の形を元に戻して狭さ具合を確かめる。

「確かに戻っておられますね」

魔女は満足そうに頷き、掴んでいた手を自由にする。そつと指を引き抜くアスカ。

「んはあっ」

指の腹の山頂が膣口を通り過ぎ、残り部分の輪郭に沿ってヌルンと指が抜かれた刹那、

王女の口から艶かしい喘ぎ声が飛び出した。

「ひ、姫様っ？」

アスカが珍しくギョツとした。

「あ、ち、違うんです！ これはその……」

うるたえる彼女が跨ぐ床に、ぽたぽたと水滴が落ちている。それは甘酸っぱさをくゆらせており、匂いはアスカの鼻へも上ってきた。自重した牡欲を刺激する香りだった。直前に聞いた嬌声もいけなかった。

「はあ、はあ、はあ…… ああ、指などでなく私のもので……この可愛らしいお穴を」

「ところで、お前の目はどうする、アスカ」

二人の世界に没入しかけた所で横槍。

「変装がてら目を治してやったが、後から戻して欲しいと言っていたな」

魔女の言葉は頭を冷やす冷水となった。正気に返る女剣士。

「はい。この目は、前の状態に戻して下さいますか」

「何故だ？ 慣れていたようだが、両目が見える方が都合がよいだろう」

「目の傷は、私に必要なものですから」

「最終章 アスカの選択」
愛欲に溺れかけていた呆け目から一転、鋭い眼光が宿る。魔女はそれ以上にも言わない。呪文を唱えて黒ずんだ紫色に変わった指を、治してやった右目に近づける。

蠟燭が消える直前に起こるゆらぎめいた輝きが起こり、光が消えた後には、斜めに傷ついた女剣士の目が現れた。

「ありがとうございます。約束を守り、姫様のお身体と私の目を戻して下さい。心により感謝します」

道具袋から眼帯を取り出し、つける。王女の前に立ち、数歩下がる。自然、姫君も後退してベットシーツの端がドレスに触れた。

「今から……またあなたに挑戦します」

一字一句を噛み締めて、ゆっくりと言い放つ。言葉の意味を思い知らせる意図から、刀の鞘に手を乗せた。

「ほう」

魔女の眉尻が面白そうに跳ね上がった。部屋の空気がみるみる硬化していく。王女がアスラの肩に触れる。彼女も緊張しているらしく、手の平が小さく震えていた。

「藪から棒だ。それに物騒だな。同床した相手を斬ろうというのか。わらわの腕の中であんなに可愛らしく鳴いてくれ……与えた犠牲も気に入ってくれていたのだろうか？」

女剣士にとっては、身を切られるのに等しい忌まわしい台詞だった。だが、妖女が言っていることは全て事実。反論しても意味がない。耳を塞いでも慰めにさえならない。

「姫を……いるべき場所に帰すのです……」

ここには、魔女に何をされるか分からない。自分と一緒にいては、また傷つけてしまっただろう。冒してしまった身体の無垢さが取り戻されたのは僥倖だった。清らかな肉体内に送り届けなければならない。

「わらわを殺せる見込みはあるのかな？」

（そんなもの、ないに決まっている）

おびただしい数の眷属を従え、稀代の魔法力を発揮できる。加えて出鱈目な回復力。だが、回復の暇を与えずに切り刻み、肉塊にしてやったのなら？

そもそもできるかどうかさえ怪しいが、そんな手段しか思い浮かばない。

斬りつければ発情体液のしぶきが上がるが、浴びてしまっても今の自分なら幾らかは耐えられる筈だ。初めて戦った時と違い、性感をよく知っている。そして何より、成し遂げたいと強く思う目的もある。それを抛り所にして精神を集中させれば。

刀の柄に添えた手に力が入る。

「いいだろう。ホールに降りるぞ」

アスカは首肯し、王女の手を引いて魔女の後ろを行く。結界は素通りでき、あっけなく階下に。そして、二人が対峙する。

「姫様、おさがり下さい」

「どうかご無事で……」

優しい姫は、心配して戦いを止めさせようとするかも知れないと思っていたが杞憂だった。決意を汲み取ってくれたらしい。とてもありがたかった。

「こい。それとも、こちらからいこうか？」

身体を前のめりにし、アスカが駆けた。初めから全速力だ。彼我の戦力差は明白。圧倒的に劣勢で、策もないのであれば、本領を発揮される前に決着をつけるしかない。

「ふふ、最近の牝顔など影もない。まるつきり、初めて会った時の戦士のままだ。しかも今度はわらわを殺すという」

唇を動かす。紡がれた肉声を聞くに、例の不可視の刃射出の魔法ではないようだ。残り十歩ほどまで肉薄したアスカへ向けて左手を突き出し　触手が飛び出した。

「くっ！」

森の中や、初戦敗北後にいやという位に見たあの蛇じみた化け物。全身は例の発情体液で又ラ又ラ。早速、濃厚な牝狂わせ体液を吐き出そうとしている。宙空で、先端がグググと膨らんでいる。

急停止して迂回する女剣士。異形はしつこく肉端を向け、体液を放った。白濁の帯びは高速で動く彼女を捕らえられず、空しく放物線を描くだけ。

「まだまだゆくぞ。たつぷり浴びせ、性交をしたくて堪らなくしてやる」
のべつ幕なく放たれる触手と白粘液。その全てを回避するアスカ。

(敗れはしないぞ……姫様を本当の居場所へお連れするのだ……！)

強く思い、床を蹴る。その勢いを乗せた刀が魔女の肩に。
ギイイインツツツツツ！

弾かれる白刃。魔女の周りには見えない魔力障壁が張られているようだ。しかも今回の
は前回のものよりも更に硬い。刀を握る手がじい〜んと痺れている。

「砕いて見せる！ 姫様のためにつ！」

結界を破ろうとした際には沈黙していた刀身が青白い輝きを纏った。最初の戦いで魔女
の障壁を砕いた時の光量はおるか、広いホールを昼間の明るさにする大光量。

刀は、持ち主の意志力に比例して光る。これほどまでに輝かせるほど、今のアスカの意
志力は強いのだ。

「なんとっ」

初めて見る魔女の大きな驚愕。目を剥く妖女の身体が袈裟がけに斬られる。そして、忌
まわしい白いしぶきが噴き上がった。

「最終章 アスカの選択」

アスカはかわそうともしない。撥水機能がある防護服に当たるがままにさせ、顔にかか
つても眉根に皺を作り、歯を食い縛るのみ。

無論、身体は反応している。火照り、意識に桃色の霞が降りてくる。蜜壺内部には熱っ
ぽい粘り汁が滲んでおり、内股は切なく引きつっている。肉悦の味を知り、何度も乱れに

乱れてしまった肉体であるため、媚液には酷く従順だった。

だが、それら全てを、ソフィリアの顔を思い浮かべながら、自分がやるべきことを強く意識することで、真っ向からねじ伏せる。

「ハアアアアツツ！」

手首を返し、振り下ろした刀を垂直に跳ね上げる。

腕を切り落とされる寸前、魔女が身を反らした。初めて見せる回避運動らしい回避運動だ。刀は妖女の腕を浅く切るに留まった。大きな傷をつけられた黒衣装は用を成さなくなり、ハラリと床に落ちていく。熟れた乳房が転げ出て、下半身までもが露になる。

と。

「な……っ……………」

激流の勢いで人体の急所を薙ごうとしていた剣士がピタリと静止する。その目を釘付けにするのは、魔女の股間。正確には陰核がある辺りに生えたもの。

牡棒だ。天井を貫かん勢いで勃起している。

女遊びを重ねたあの男達のものと同じくらいにドス黒い肉幹に、やはり同じくらいに禍々しい紫がかつた桃色の亀頭。

ただし、肉幹の長さはアスカのそれに匹敵する程。あの者達など比べ物にならない。しかも、幹には真珠大のコブがびっしりついており、肉棒が脈動するのと同様にドクドクと

ビクついている。

亀頭の表面にしる、ツルツル具合は鏡じみており、それにより肉のプリプリ度合いが強調されている。肉端自体も裾野が鋭い鋭角三角形であり、いかにも女の凸凹を奥深くまで擦り上げそうな作りである。

（こんなものに膣の中をかき回されたら……！）

牝らしい思考が割り込んでくる。媚薬体液で発情していた肉壺の中身が、空虚感を訴えるが如くキュンキュン疼き、内部を潤す蜜の熱さも量も増す。穿いている黒猫禪の前面が徐々に大陰唇へ張り付いていくのが感じられた。

「しまった！」

ホールを満たしていた刀身の光が小さくなっていく。意思が乱れている　魔法の男根に心奪われている証左だ。

「集中を乱すな、アスカ。姫様を送り届けると決めただろうっ」

吼えるが、美味しそうな餌を見て以降、媚薬汁の影響を突っぱねられなくなってきている。もしも血液であったのなら、とつくに絶命している量が噴出しているというのに、白い血は依然として噴水の勢いで女剣士の身体に殺到してくる。このままでは。

「最終章 アスカの選択」
刀を握る手に力を入れ直す。足を踏み出し、腕をしならせ、力が乗った刃を敵の身体に
食い込ませ　られない。

どうしても刀を振り切れぬ。手の震えを止められない。

程なくして、刀がただの白刃に戻った。

「分かったかアスカ。お前はもう、昔のお前ではないのだよ」

デジャビュだった。深手を負った魔女が抱きついてきた。肉体からは女を牝にする汁液がドバドバ溢れており、人外の肉棒に魅入られた女剣士を覆いつくす。

魔女は外見の痛々しさとは正反対の喜色を浮かべながら、彼女の頬に頬擦りをして白濁を塗りこみ、防具と防護服を崩しては内部の女肌に自分の体液をすり込んでいく。

「あはあッ……くう……ハアハア……身体が……っううう！」

媚薬汁をここまで塗りたくられては、耐えることなどできはしない。肉悦の味を知っている女体は熱く燃え盛り、更なる刺激を求めて疼いている。湧き起こる強い肉衝動は、アスカの良心が抛り所にした、王女を送り届けるといふ決意さえも侵食し始める。

（ああ、遅しい男性器が私の太ももに当たって……なんて熱いんだ……イボの一つ一つが脈打って……こんなもので女性器を犯されたら、どうにかなくなってしまいたいそうだ……っ

……私は何を考えている……流されてはいけないのに……ッ）

なけなしの意思力をかき集め、相手を引き剥がそうとする。

「まだ抵抗するか。大したものだな」

感心する魔女は、アスカの弱弱い手を自分の乳房に導いた。手の平の中心を乳首に置

かせ、上に置いた自分の手を動かすことで彼女の指を動かし、袈裟斬りの大傷が走る熟れた肉果を揉ませる。

「どうだわらわの乳房は。好きにしていいいぞ……お前に斬られて少々いびつになっているが、遠慮なく揉みしだくといい」

言いながら、アスカの手を操る。揉まされているアスカは、股間がギユンと熱くなるのを感じた。全身を蝕む熱さよりも鮮烈で深い、身に覚えのある熱さ。案の定、クリトリスが水を含んだ綿と同じくずっしりと重くなっていく。

「なんだ、胸を揉んだだけで……初心よなあ。殺そうとした女の胸だけで欲情してしまうとは」

牡棒と化している陰核に利き手を伸ばし、幹の部分をそつと掴む。アスカのそれは、もうすっかり男性器と同じになっていた。魔女に生やされたばかりの時に見た醜さはなく、肌と同じ色ツヤは子供と同じ未使用感を感じさせ、雄々しく振り返る様と亀頭の膨らみ具合は歴戦の女たらしと思わせる。

「これをわらわの肉穴に入れたいか？ いや、入りたいたらう？」

露出している肉峰を、男根の裏筋に当たる部分へしきりに押し付け、微細に腰を振り、情欲を煽ってくる。利き手はアスカの手に戻し、強制胸愛撫を続行させる。

必ず倒す決意し、常人ならば瀕死の重傷に値する傷を与えた女に遊ばれているというの

に、牡棒の猛々しさも、牡肉部に起こる甘いひりつきも一向に弱まらない。掌に感じるまろやかな感触が男欲に拍車をかける。気を抜けば、優しく囁いてくる低い美声に頷いてしまいそうだ。

「そんなことは……そんなことはあ………」

だが、良心の剣が峰で踏みとどまる。ここで頷けば、目くるめく官能の世界に溺れられるだろう。しかし、そうすることで自分は本当に引き返せなくなる。

少し前の 性悦を知らない自分なら、肉棒から目を離せずに不覚をとるなどという、恥ずかしさ極まりないことはあり得なかった。

普通の身体ではなくなった。心も、肉の心地よさを知り味を占めている。

けれども、自分で決めた使命よりも快楽を優先させる情弱にまで墮落してしまう訳にはいかない。姫様をお救いすることを諦めるのは嫌だ。

「強情な。ソフィリア王女はあんなに素直なのになあ」

「つつ………な………に………」

魔女の目線が行き着く先では、王女は綺麗なほつぺたと豊かな胸を床に押し付け、大股開きの膝立ちでお尻を高く上げていた。普段の清楚な立ち振る舞いからは想像できないあられもなさ。身に着ける衣装が、彼女の清純さを具現したかのような真っ白いドレスであるだけに、非常識さが際立つ。

「んんっ、いやっ、アスカさま見ないでっ、こんなわたしを見ないで下さいお願いです……あふう……お尻が　ああッ！」

王族少女のために作られた絹のフリルニーソックスからはみ出している、むっちりと肉付きのいい太ももの先、たわわな女尻の中央で、又ラ又ラの粘液を纏った一本の太い触手がピチピチ跳ねている。その頭は姫君のお尻の内部へ入り込んでいるありさまだ。

「ひいいつ！　な、中で、また吐き出して………んっ、あうっ、お……お尻が、熱い……いふうんッ！」

清楚な王女の髪は乱れ、顔は赤リンゴと同じく紅潮していた。嫌がっている風な台詞を吐く口の奥からは舌が突き出し、口の端からは唾液の筋が垂れている。

青息吐息の清女の周りを触手がグルリと囲んでいる。王女に無礼を働いているものも含め、おそらくは魔女が放ちアスカが避けた連中だろう。回避された後も戦いに参加するところがなかったが、姫君を襲っていたのだ。

又メ又メの異形たちは、抵抗できない姫に殺到し、持ち前の器用さで彼女の衣装を脱がしにかかるとい、いやっ……脱がさないで下さい……あ、んああっ、お尻、お尻に入ってくるう！」

「最終章　アスカの選択」
全く意味がない。

胸元も、ロンググローブも、コルセットも、スカートさえも剥ぎ取られ、姫君はニーソックスと手首にかかる腕輪、それに王族であることを示すティアラのみで格好になった。まいった。

露出させられた肉体は、全身が興奮の赤に染まっており、うっすらと汗ばんでもいる。汗が染みこんだ絹の肌はしっとり潤い、セックスとは無縁そうな清純なお姫様はツヤツヤと輝き、オンナとしての艶かしさを醸し出している。

「こんな格好にされて、あぁっ！ お尻に触手が入ってきて……気持ちよさを感じさせられて……アスカさまにも見られて……いやぁ、こんなのはいけないのに……わたしはこの国の王女なのに、でも、お尻もちいいっ！」

触手を呑み込んだお尻が左右に振られ、その拍子に触手と肉穴の結合部からツーツと粘っこい白粘液が垂れ、清らかなフリルを汚していく。

高貴な女性は交尾中の牝犬と同じく、ハアハアと熱っぽい吐息を繰り返し、お尻を蹂躪する触手の一挙一動にピクピクと反応している。

「処女膜を許す代わりに、王女には後ろの肉穴遊戯に付き合っていたら良かったからな。今では触手も平然と呑み込める大器だ。お前が三穴制覇を求めた時も、痛みよりも快感を感じていた筈だよ」

「そんな……姫様も……私と同じく身体を弄られて……」

「しかしだ。どんなに尻穴を辱められて欲深くなっても、王女は、前の穴だけは手をつけなかつたがな。股間を愛撫しても、舐めても、陰核をねぶっても、汁をすすっても、それ以上のことをねだることはなかつた」

（私は……姫様のお心を踏みにじったのか……）

王女の処女を劣情のままに散らしたことへの罪悪感が、またのしかかる。

「心を痛めることはないぞ。膜など、わらわならいつでも直せるし、姫もああいう性格だからな。お前を恨んではいまい」

魔女の身体に再生が起こり始める。遠くにいた王女が、お尻に快感を与えられているはしたない格好のまま触手の群れに引きずられてくる。

「王女よ。このアスカに、尻の様子をよく見せてやれ」

媚薬体液の海に沈められ、気力が萎えて四肢にも力が入らずに這いつくばるだけの女剣士の眼前に、ドス白い汁に汚れたヒップが据え置かれた。

「いやあ、見ないでアスカさまっ、見ないでえっ！」

幼女と同じく稚拙な言葉を繰り返す。豊かなお尻は肌と同じく汗ばんでツヤを帯びており、尻穴の延長線上にある大陰唇の間から、トロツとした愛液がとめどなく溢れている。

彼女が快感を享受している証拠の汁だ。

「尻だけでは十分でないな。蛇じみた化け物に尻穴を犯されてよがる、国民から愛される

王族娘の顔も見せてやる」

魔女が呪文を唱え終わると、触手に悩まされているお尻のすぐ横に、王女の顔が浮かび上がった。幻の類ではない。盛んな血行のせいで平素よりも色濃い桃色の唇、ただよってくる汗と嗅ぐ者を安堵させるほどの甘い体臭の匂い。現実感が溢れている。そして、

「え……どうして……わたしがアスカさまと向かい合って……」
彼女にもこちらが見えている。

「一階と二階の境目に施した結界を応用した術だ。王女の首辺りに結界を張り、その出口を尻の横に繋げたのだ」

いつの間にか、魔女の身体はすっかり元通りになっていた。しかし、服は破れたまま。魅惑的な牝の身体が惜しげもなく曝け出されている。股間に生えるイボイボ牡肉棒も、勃起した状態だった。

「わらわに齒向かった罰だ。そこで愛しの姫が、自分が殺し損ねた女に尻を犯されて乱れるさまを……」

また魔女の口元が動く。アスカのお尻が紫色の光に包まれた。

「快感を共有しながら見ているがいい」

言い終えるや、王女のお尻に入り込んでいた触手が白濁に変化して爆ぜた。

「んんっ！ お……お尻の中全部が……濃い粘液で満たされて……うくううん……」

散々いじられて上気した尻タブの間から、ぬるつと白い筋が這い出てくる。

そんなヒップに手を伸ばす魔女。十指を広げ、外に張り出したたわわな尻肉をぎゅっと掴み、アスカを見とれさせた、真珠大のコブがびっしりついた肉魁偉の先端を、媚薬体液を垂れ流す窄まりに向ける。

「だ、だめです……そんなものを挿入されたら……アスカさまが見ているのにつ」

「アスカの痴態をじっくり見てきたというのに、自分が乱れるさまだけは見せられないと言うのか？ それはあまりに勝手というものだ……姫君が尻好きであることを、見せてやるべきではないかな」

にゅじゅり……じゅぷぷぷ……っ。

鋭角三角形を形成する紫がかった肉端が、ドス白い粘液を潤滑油にして王族の尻穴に入り込んでいく。

「ん……あっ……入ってくる……擦れ……るっ、コブが立て続けにゴリゴリって……

……あふうあアツ！」

「くあつ……私のお尻も……何かが入って おおおつつつつつ！」

アスカのお尻の中にも圧倒的な充足感が広がっている。イボで一杯の、しなやかで硬くて猛烈な熱さを持った何かが挿入されているかのようだ。

「最終章」
「感じているな……その快感は姫が感じているものと同じものだ。二人の感覚を繋げてや

ったのだよ。王女が感じる心地よさを、お前も楽しむといい」

挿入すると同時に、魔女は王女の体勢を四つんばいに直し始める。彼女は抵抗することなく力の導きに従い、交尾中の牝獣の格好になつていく。

姫はべつたりと手をついて、顎と胸を床に接地させ、自分の尻を供物に見立てて発情ヒップを高く上げる。太ももは、深く挿入できるよう、左右に大きく開いている。触手を相手にしていた時も似た姿であつたが、今度のはより恭しさを感じる。

「そんな、姫様がこんな格好をするなんて……しかも……」

表情が淫蕩に蕩けている。穏やかな湖水を彷彿とさせる清いおもては影もない。とろんと下がった眉尻とまなじり。目は見るからに潤んでいる。皺がよつた眉間のそばではまつ毛がヒクヒク揺れている。口の中から突き出た小さくて赤い舌がわなわな震え、イボ男根が奥に進む振動で唾液の雫がぬるーつと垂れた。

とても王族の顔とは思えない。まるつきり、変態セックスに狂喜する牝のそれである。だが、おそらくは自分の顔も大差ない。

「んあああつ、擦れてるツ、大きくて硬くて柔らかいコブが私の中を抉って……あうう……中の肉が巻き込まれてる……奥の方まで……はあ、はあ、はあ、くああツ！」

膣内に男を迎え入れて擦られた時よりも濃厚な愉悦が襲い来る。コブがお尻の中を擦るだけで全身から力が抜け落ちて、顔の筋肉が弛緩する。目の前がぼやけているのは、法悦

の涙を流しているからか。

お尻は性感帯でないというのに、性感帯よりもずっと悦びを感じられるというのはいったいどうということなのか。本当に姫様の感じていらっしやる快感なのか。

「いいいっ……コブがグリグリって入って……あああ、アスカさまが見てるのに気持ちいいのが止まらないっ……！！」

「当然だ。そのように馴致してやったのだから。そろそろ本格的に始めるぞ」
ぐびゅっ、じゅりゆるるっ、にゅずぶぶぶぶぶつ。

捧げられた尻タブに下腹を密着させた後、魔女の細腰がゆっくりと下がり始めた。埋没していた凸凹だらけの肉幹には、白い潤滑汁とお尻の内部から分泌された汁とが絡みついており、シャンデリアの明かりを受けてヌラヌラと光っている。

「んはあぁっ……めくられてるみたいなのこの感じ……あくうっ……んんっ……入ってくる時の、あぁっ、目一杯広げられて……イボに擦られる……このっ……あはぁっ」

亀頭が抜ける寸前まで下がった後は、また腰が進む。王女の体液で大分薄れた触手濁液が押し出され、尻穴から肉壺へと伝っていく。汁は行き着く先で、コンコンと湧き出る愛液と混ざり合い、床にポタッポタッと落ちて水溜りとなっている。

「うくうっ……あんなに姫様の愛液が……はぁっ……」

「最終章 アスカの選択」
魔女が言うとおり、自分が感じる尻悦は本当に王女のものなのだろう。姫は異形の牡棒

で尻穴を擦られて快感を得ているのだ。生々しい牝臭を漂わせる愛液が派手に滴っている理由は他に考えられない。

「手をつけたのは尻だけではないぞ。王女は何日ここにいると思う。その間、このわらわが何もしなかったと思うか？ 教えてやるといい姫よ。どんなことをされたのかを」

トロンとしていた王女の瞳に、かすかに良心の光が宿った。しきりに喉が小さくなり、喉奥から漏れてしまいそうな言葉を漏らすまいとしているかのように、口が強く引き結ばれる。

「そんな恥ずかしいこと……んっ、はううう……」

拒絶を見せる姫の頬と、上体を倒した魔女の頬が合わさった。妖女はそのまま頬ずりする。強張っていた王女の顔がわななき、緩む。

その直後、口内粘液塗れの魔女の真つ赤な舌が彼女の頬やうなじを這い出した。

「ああんっ、だめ……力が抜けて……あんっ……」

「言うのだ……れるっ……わらわに逆らいきれぬ筈はないだろう？ ちゅむっ……お前の身体は、肉壺を除いて隅々まで手垢をつけてやったのだからな……れるっ……快感で意志力を削ることなど造作もないのだぞ」

緩やかに尻を振りつつ、床にキスをしていた胸を利き手でやわやわと揉む。反対の手では五指を羽ペンの羽にして、興奮で膨れた乳房の表面を何度もそつと撫でている。

「さあ、言え、アスカに聞かせてやれ」

「はあああ、い、いいいます……いいいますうう……」

見ているだけで股間が疼く濡れ顔を晒し、王女が告白を始めた。

「あのイボだらけのお……おちんちんを……上手にできるように指示を受けながらおしゃぶりして……白くてネバネバで生臭いお汁を飲んだり……」

「口に含んだ時や、牡汁を喉に流した時はどんな気持ちになった？」

「最初は惨めで……嫌で嫌で仕方ありませんでしたけれど……だんだん胸が熱くなって……」

「背中がゾクゾクして……嫌でなくなつて……お汁も嘔吐感に襲われましたが……何回も……」

「……膣を許してもらつたために飲んでいる内に慣れてきて……いい飲み心地だと……」

恥じらいながら、ポツポツと話している。それが王女自身の快感を煽っているのか、王女のお尻と一心同体であるアスカのお尻が更に気持ちよくなつていく。

「胸で、おちんちんを挟んでゴシゴシ擦った時も、始めは気持ち悪いと思いましたが……」

おちんちんから乳房に伝わってくる高熱で、胸が芯から蕩けていく感じが堪らなくなつてきて……硬い凸凹を擦っていると感じるじんわりとした痺れも病みつきになつてきて……

目の前で先走りのおつゆが溢れてくると、上手くやれているという達成感で、わたしの胸ももつと気持ちよくなつて……トロトロのおつゆも一際美味しく感じられました……」

パイズリ奉仕をしている時のことを強く思い出しているのか、目に宿る陶酔の色が濃く

なっており、綺麗な口からは舌が出て、しきりに唇を舐めている。

「胸はアスカにも使ってやっていたな？」

「はい……アスカさまのおちんちんも……コブはありませんが、大樹と同じくどっしりと起立していて、顔を出している先端から漂う、女性にはない男性特有の匂いにはとても心を揺さぶられて……ご奉仕している時は、内心ドキドキしていました……精液も、とても美味しくいただきました……その節はごちそうさまでした、アスカさま……」

自分と魔女しか知らない恥部を晒していく内に羞恥心がなくなっただのか、最後の言葉はアスカの顔を見て放たれた。

仕方なく言っているという風はなく、非常識な吐露を続けることに背徳の快感を感じている風にアスカには見える。自分が、男に抱かれながら王女に謝り、より大きな快感を得ていたのと同じことだ。

「わらわのものとアスカのものでは、どちらがより好みだ？」

「そ、それは……アスカさまにはコブがありませんから……」

王女の蜜壺から愛液がドブツと溢れた。背伸びをしている猫と同じく傾斜を作る背中がブルツ、ブルツと震えている。

「だそうだ。残念だったな。お前が慕い、一生懸命尽くそうとする王女は、わらわの肉棒の方が好みらしい。女が鳴かずにはいられない物であっても、それが普通の範疇にある限

りは、王女は満足を得られないのだ。つまり、わらわの異形性器からは離れられないということだ」

「はい……わたしはきつと、このおちんちんでなければ………嫁いで子作りをしても、肉の悦びを享受することは叶わないでしょう……でも、アスカさまが勝利した時は、運命と思いい城に帰って姫としての使命を果たすつもりでした……」

後半、王女の顔に影が差していた。城に戻り王女として暮らすことは正しいことだとは思っている。しかし、心の底には別の気持ちがある。

「姫様……」

心身ともに清らかだと思っていた姫君が、肉の悦びの虜となっている。衝撃的であったが、確かにそうかも知れないとも思う。

実際、コブ牡棒でお尻を擦られる快感は、女の喜びを知った身には酷く魅力的な誘惑なのだ。それは自分が感じているものではないものの、そっくり同じものを得られるのであれば病み付きになっても仕方がない。

「最終章 アスカの選択」
これだけの威力を発揮する、牝としてひれ伏したくなる魅惑的な勃起を、口でしゃぶらせていただけの光栄は、胸で揉んで気持ちよくしてさしあげられる嬉しさはいかほどのものであるだろうか。自分が、敬愛と愛欲の感情を抱く王女に献身する時の充足感さえ心身を心地よくさせるのに、それに肉体的な快感が結びついたら。

「んはあああつ、お尻の奥まで抉られるうツ！」

魔女は上体を起こしていた。たわわな尻を握り直し、アスカを買った野卑な男達に勝るとも劣らない激しさで腰を振っている。不敵な笑みを浮かべながら、額に浮いた汗を拭うことなく一心不乱に尻を掘る様はあの男達などよりも遥かに猛々しい。思わず、心身を預けたいという気になってしまう。

受ける王女は、王族であり、救出を試みた女剣士が見ているにも関わらず、はしたないというのも生ぬるい、牝獣じみた喜悦の咆哮を上げる。

「はあ、はあ、姫様……」

独りでに、そして本人が気づかない内に、アスカの身体が動いた。捧げるように大きな尻を掲げると、太ももを大開きにして膝立ち。頬と胸は床と密着。王族の娘がとっているのと同じ、ケダモノの交尾体勢だ。

露になった尻穴は快感を感じる度にヒクヒク開閉し、肉花からは粘っこい糸を引いて愛液が垂れている。肛姦遊戯を楽しむ二人の美女から漂う汗に体臭、そして汁臭に混ざり、アスカ自身の牝臭が混ざり合う。

「ああ、イクつ、お尻がイキますつ、んふうツ、あふつ、んんツ！」

絶頂申告を繰り返していた姫の背中が大きくブルツと震えた。

「先走りのお汁が、奥に……イボイボおちんちんも凄く硬く、太くなって……はあ……あ

ああああ……出されるのですね、あの、ドロドロの熱い精液を……わたしのお尻が、濃厚なザーメンで満たされる……んくうっ！」

美術館に飾られていてもおかしくないたおやかな美顔が、肉の心地よさに蕩けきっている。自分をさらい、閉じ込め、淫らというのも不相応なレベルまで墮落させた女の、煮え滾る体液をお尻の内部に浴びたくて堪らないという風だ。

「んふう、わ、私にも出される感触がくるのだな……はあっ、あああ……」

心身をグズグズにだらしなくさせられる中、王女と同じ快感を味わえることに嬉しさと待ち遠しさを感じるアスカ。相手が敵であることも、お尻という背徳の場所で快感を感じさせられているということも忘れていないが、常識的な嫌悪感よりも、あつてはならないことで悦楽を享受しているという意識が身体の甘ったるさを加速させる。

「く、ふふふ、出すぞ、イクぞ、このわらわの汁で満たしてやる……わらわの精汁は、限界まで溜め込んだ男のそれよりも女にとつては美酒となる……発情成分だけではないぞ？ 粘りも、熱さも、種の量も男とは訳が違う」

下腹を叩きつける勢いがいよいよ増し、粘着質な水音も、柔尻との甲高い衝突音も大きくなつていく。

「最終章

最後の瞬間、魔女のイボ勃起が快感で飼い慣らされた王女の奥深くまでを抉った。

「はああああああ……ビュクビュク出てる……う、濃くて熱い精液が、わたしの

お尻の中を全部……ドロドロのが中のお肉を全部覆い尽くして……はああ……イクウ……
……お尻に濃すぎるザーメン注がれてイクッ、王女なのに、お尻でイクウウウツツ！」
お尻を上げた四つんばいの裸身が、伸びをする牝猫と同じくピーンと緊張し、贅肉がな
いなだらかなお腹がビクビク波打った。身体は興奮の色で染まりきり、まるで全身が『イ
ク』と叫んでいる風だ。

そしてアスカも。

「くううツツ！ 奥に……奥にかかるうっ！ ん、中がネバナ汁でべつとり汚されて
いく……はー、はー、んくっ、あううううツツツツ！」

現実にはアスカの尻内は空洞であり、魔法によって共有させられた感覚に勝手に反応し
ているのだが、まるで自分が精を注がれているように思えてならない。

グツと膨らみ、その逞しいカリで尻肉内部を外に押し広げつつ、紫がかつた亀頭の先か
ら、性欲溢れる男達顔負けの粘液が放出されている。それは奥深い所まで飛んでいく。端
にべつたり付着する衝撃は、頭の芯を揺らす程の甘美感を与えてくる。

質だけでなく量にも目を見張るものがある。ほんの少しの時間で前方を白濁で埋め尽く
し、それだけに止まらずイボイボ勃起と肉壁の間に染み入るほどに多量なのだ。眼前にあ
るお尻と牡棒の結合部からドロツとした雫が漏れ出して、床にボタツと落ちていく。

「あんなに濃いのが姫様の中を……ああ……」

合体部分からくゆる匂いも、床にできていく白い水溜りから立ち上る匂いも、常人にとつては、鼻が曲がりそうなほどに強烈な生々しい臭いであるのだろう。しかし、性悦にはまり込んでいる女剣士には、自身をうっとりさせる芳醇な精臭であった。王女も同じ感想らしく、自分が射精されている様子をトロンと眺める顔の鼻は、深呼吸しているように時々大きく開いている。

「あうんっ」

魔女が腰を引き、コブイボ牡棒を抜き去った。ドス白い粘液と王族女性の身体から分泌された汁に塗れており、王女の内部を蹂躪した痕跡が明瞭に残されている。しかも、あれほど射精したというのに、萎える兆候がまるでない。

何度も擦られ、精を浴びせられた王女はくたたりと倒れこんだ。魔女は一瞥すらせず、アスカを傲然と見下ろす。女剣士は、交尾中の牝犬と同じ姿勢のままだ。

「お前も……………」

たつぷりとタメを置いた後。

「して欲しいか？」

蚊帳の外でじつとしていた触手達がアスカに這いより、纏わり付いて彼女をゴロンと仰向けに寝かせた。次いで、魔女に崩されていた身体を完全に剥く。

肉体は、男と一戦交えた女と同じくらいに紅潮しているだけでなく、汗ばみの艶を帯び

ている。

ただでさえ熟れた肉梨巨乳は興奮で膨張しており、乳輪も縁ギリギリまで水を張ったコップの水面と同様に膨れている。発情度合いを顕著に示す乳首に至っては、ビンビンに強張っているうえに、刺激が欲しいと言わんばかりにドクンツ、ドクンツと振動している。

「どうだ？」

あられもない上半身を目にした後、下半身に視線を映す。大きく開かれた股の間にある肉蜜の入り口は、愛液でべとべとになっている。男との本番セックスを経験した後も、蕾のように慎ましやかだった花びらが、パクパクと緩慢な開閉を繰り返す。そのあわいからは粘着質な筋が湧き出ていて、トロトロの滝となって床に流れている。

魔女はこれ見よがしに腰を突き出した。穏やかな姫君を牝に変えて乱れさせたコブつきペニスが女剣士の瞳に映る。

身体が示している通り、アス力は発情しているどころではないものの、ねだることは屈服宣言に等しいという直感が、最後の一線を越えさせないでいる。

女剣士の顔が、良心と快楽を求める感情による葛藤で小刻みに震える。と、魔女が覆いかぶさってきた。

さすさす……………にゆりゆつ……………じゆにゆつ……………しゆぶぢゆる……………。

体重を殆ど感じさせない柔らかな肉体が押し付けられ、乳房同士がおしくらまんじゅう

を繰り広げ、乳首同士がつばぜり合いを展開する。硬く強張った魔女の乳頭で、発情して敏感になった乳輪がコリコリ擦られると、甘く鋭い電流が身体を突き抜ける。

魔女の悪戯はそれだけに留まらない。自身のイボ勃起を、ぐしょ濡れの花弁にぴったり密着させ、そのまま上下に擦りつける。凸凹の表面が、肉悦に敏感になった大陰唇をくすぐり、その奥にある快感器官 クリトリスに振動を送る。

「あああああ……くふうっ……はうあっっ……はあ、はあ、はあ、はああッ！」
喘がされるアスカ。紡がれる鳴き声は熱い湿り気を孕み、交尾を切望する牝の哀願が混じっている。擦られる肉花弁から出る蜜の量が増す。

「欲しいであろう？」
いやに優しい囁き。王女に痴れた告白をさせた時と同じく、頬やうなじをねろねろと舐め始める。この感触までは共有できなかったが、なるほど、肉の柔らかさと体液のヌメリを伴うスキンシップをされては、言うことを聞きたいと思えてくる。

生温かくてプリプリの舌が、唾液を纏いヌメヌメと這い回る感触は花弁の芯をジンと疼かせる。舐められる際には、口の奥から熱い吐息が吐きかけられ、水気の多い空気塊で広い範囲がくすぐられると背筋がゾクツと粟立つ。

そうして思考がおぼつかなくなり、鼓膜を揺らす声に従いたい衝動に駆られてしまう。「我慢することはない。王女だけが快感を楽しめるとするのは不公平であろう？」 首肯す

るだけだ。それだけで、お前も同じ心地よさを得られる」

耳の縁を優しく舐めながら続ける。

「やせ我慢はするな……もう、お前も以前のお前ではないのだ……そこで満足そうに失神している王女と同じく、わらわが与える肉の悦びでなければ至福を感じることはできなくなっている……そうであろう？」

唇を窄め、耳穴にふうつと息を吹き込む魔女。

「女に欲情すると男根が顔を出す身体……そんな肉体を肯定する者が、この屋敷の外にいらんと思うか？ 牡の欲望がもたげても、お前は自分で慰めるしかない。だが、それで満足できるかは怪しいものだ。男どもが夢中になる、グジュグジュの肉穴を満たす心地よさも、女の柔肉に包まれて気兼ねなく精を放つ快感も知っているからなあ」

唇が赤い頬に移る。れるれろと舐め、ちゅぱちゅぱと吸い上げる。

「そして今だ……わらわのオトコを目にし、その力のほども知ったというのに、ここで拒絶して後悔しないと断言できるのか？ お前が我慢している間、従順な王女は思う存分、外界では得られない女冥利を貪るのだぞ？」

「そ……それは……」

気持ちはいいが焦れつつたさの方が強い愛撫と、墮落を誘う甘言により、心における肉欲の版図が広がっていく。

「ほうら、表面を擦られるだけでなく、煮立ってトロトロの腹の中をこれで満たして欲しいだろうか？ 強く抉って欲しいだろうか？」

その通りだ。

コブだらけの勃起で抉って欲しい。

姫様の内部を穢し切った垂涎ものな牡汁で、自分の膣内も汚して欲しい。

もうどうしようもない。

我慢しても意味がない。

魔女は真実を言い当てている。こんな身体を認めてくれる人間などいやしない。

ここから離れたら、拒絶される恐怖をずっと意識して生きなければならぬ。

教え込まれた、肉欲を満たす喜びもここでしか味わえない。

魔女から離れてしまったら、身体の疼きに懊悩することになる。一生だ。

そして、愛する姫様を置いてここを離れたくはない。

もしも姫様が元の生活に戻れば、どれほどの苦痛を強いられるだろう。

魔女を倒し、連れ帰るなど浅慮でしかなかったのだ。

なら、自分がとるべきは。

それは、禁欲的な女剣士として生きてきた半生を否定するものであり、それ故に未練を感じはしたが、振り切った。

「ほ、欲しいです……下さい……私も、姫様のように……」

普段の凜呼とした声とはまるで違う、魔女の囁きにも劣る音量と弱弱しさ。彼女にしてみれば、意志力を総動員して声帯を一杯震わせているのだが、これまでの人生で染み付いてきた戦士としての自分が奥深い所で告白を邪魔している。

「よく聞こえんな。いつもと同じく決然かつ明快に言ってくれぬか？」

魔女の求めは揶揄を含んだものでなく、むしろ敵かさえあった。話でしか知らないものの、騎士の叙勲式とはこういうものなのかも知れないとふと思うアスカ。

『儀式めいた雰囲気の中、気を取り直してすつくと立ち上がる。背中を反らして胸を張り青光のアスカ』と呼ばれるキリツとした凜々しい顔になる。

そうして堂々と言った。

障害となっている過去の自分自身を根こそぎなぎ払う心持ちで腹の底から。明確に。

「わ、私をあなたの女にして下さい。姫様だけが、気持ちいい思いをするなど耐えられ

ない。私も、そのイボだらけの逞しいお……おチンポで……お、おまんこを擦られる楽しみと、ドロドロの熱い精液を中に浴びせられる悦びを味わいたいっ！」

これまでの性生活で覚えた卑語を駆使し、魔女が望んでいそうな台詞を作る。それは自身の願望表明でもあったが。

「承知した。アスカよ、お前はもうわらわの女だ」

魔女がニヤリとした。愛人契約が成立したという証だが、不思議と屈辱を感じない。逆に心身が軽くなった気がする。

呪文を唱える魔女。すると、大きなベットが出現した。大人三人が雑魚寝してもなお余裕ある広さであり、まるで洗い立ての真っ白い寝具で固められている。

「あっ」

魔女がアスカを抱え上げる。両膝の裏と背中を支える、俗に『お姫様抱っこ』と呼ばれる抱え方だ。気恥ずかしくて堪らなかったが、胸がドキドキした。悪くない。

アスカをベットに仰向けに寝せると、魔女は上から見下ろす。

「まずは処女喪失のやり直しだ」

王女の膜を治したのと同じ方法で、アスカの純潔を戻す魔女。身体の内部は見えないので詳細は分からないが、何となく膣内が狭まった気がする。アスカは思った。

「もう少し汁を出した方がいいかな」

実際は、アスカの花弁は充血し、ヒクヒクと開閉を繰り返している。ぼつてりと膨れた肉の合わせ目にしろ、発情臭をくゆらせる蜜がトロトロと溢れている。牝穴に牡肉棒を嵌め込むのは造作もないだろう。いくら処女の狭い肉筒に戻っていたとしても、どんなにイボ勃起が魁偉であっても、ずるりといく筈なのだ。

「ああっ、舌が……私の内部が舐められて……… あふうんっ！」

高く、不規則で、下品な水音が木霊する。蜜壺に顔を埋める魔女は、湖水に口をつける動物じみた穏やかさを保っているというのに、その舌がいやらしく蠢いている。

ぐっしより濡れて赤熱した膣肉の一部一部にねっとり舌を這わせながら、尖らせた舌先で肉の凸凹を執拗に舐め、同時に自身の唾液を送り込む。膣内舌愛撫を受けるアスカからは、ますます女汁が垂れる。魔女はそれをすすする。

股間に吸い付いた妖女の頭に、堪らなくなったアスカの手が伸びる。それ自体が芸術品と言える流れる髪をくしゃくしゃにしながら、怖がりの子供が母親に抱きつく必死さでかき抱く。

元々、自身の体液を飲まれることに性的な興奮を起こす性格であったことに加えて、欲望に対して素直になり、そして敵に対してすっかり兜を脱いでしまっている。しがらみのない彼女の心は丸裸に等しく快感に従順なのだ。

「あんっ、そ、そこいいっ、くううっ、あはあっ、だめですっ、そんなにした　ッ！」

べつたりとした舌の腹の感触。プリプリという尖った舌先の触感。ただでさえ感じ易い器官であるというのに、昂ぶって敏感になった今では、魔女の真つ赤な舌が自分の内部でどうのたうつっているのかがありありと頭の中に浮かんでくる。

それを意識するほど、牝穴はカアツと熱くなり、女汁の温度も匂いの濃さも上昇していく。鼻と股の間では距離があるにも関わらず、まるで発情した女の性器を鼻先に突きつけられたかのように、鼻が己の汁匂を明確に嗅ぎ取っている。

「ふう……これ位でいいかな」

女剣士の手首を掴み、初夜で恥ずかしがる乙女の太ももを開かせるひっそりとした所作で脇にどける。

牝の匂いで充満した股間から、魔女の美貌がゆっくりと離れる。陽の下よりも仄暗い月夜が似合う端正な顔は、目も眉もキリリとしている。

しかし、その鼻と口元。ともに愛液でべとべとであり、所によってはアスカの花弁とぬたーっとした細い糸で結ばれていた。

「ゆくぞ」

何事かを呟く。すると、魔女の下半身が丸裸になった。ムツチリと張り詰めた、興奮しているだろうに白い太ももと、太ももからはみ出すほどのたわわな柔肉尻が露になる。

股間も無防備だ。性別がある楽しみを奔放に享受する性格でありそうだというのに、王

女やアスカのそれよりも熟しており、こんもりと盛り上がった土手が二つ並んでいる光景を連想させる肉付きなのだが、外見は整っている。

だらしなく広がるということも、色素の濃淡にムラがあるということもなく、処女の局所がそのまま円熟したという風だ。

その少し上、奥に陰核があるべき場所には例のコブ剛棒が泰然と控えている。綺麗な部分しか知らないアスカの前で王女に恥部を晒させ、打倒を固く決意した女剣士の剣腕を無効化した肉の塊。牝の弱み。

「はい……………」

見つめる魔女を見つめ返し、「抵抗しません」の意思表示として、手を脇に投げ出したままにする。

「わらわのは、お前には少し大き過ぎるかも知れん。お前の肉穴を広げてくれるか」
自分の性器穴を広げる。魔女の愛人宣言をしたアスカにも、それは羞恥心を激しくかき立てる行為だ。

だが、背筋に妖しい寒気が走る。発情で火照る身体に、羞恥の悦びがくべられる。

「わかり……………ました……………」

両方の太ももの付け根に両手の掌を置き、人差し指の指の腹を花卉へ押し付ける。肉花びらは見た目よりも柔らかく、力を入れるとあっけなく肉の中に沈んだ。一面に広がる愛

液によるヌメリは、自分が発情していることを強く自覚させる。

「これで……どうですか……」

恥部へ密着させた指を外側にいかせる。二本同時にだ。女だけにある股間の凸凹が扁平に近くなり、奥に隠されていたサーモンピンクの肉花が姿を現す。むわっと、生々しい匂いを纏った牝の蒸気が上がった。

「まだ不十分だ。奥にある肉穴の入り口も広げるのだ」

大陰唇だけでなく、小陰唇と膣口も拡張しろという命令は、アスカの羞恥心をいつそう膨れさせる。しかし、辱めを受けることに愉悦を感じるという変態性も刺激される。黒い喜びを享受する証として、肉蜜壺から放たれる汁の匂いに変化していく。

「はい……」

人差し指を肉穴内部に食い込ませ、ピンク色の濡れ肉もくぱあと広げる。穴肉の締まりでせき止められていた蜜汁が滝の勢いで肌を伝う。

「ふふ、中のゆだった肉まで丸見えだ。そのまま押さえていてくれれば、挿入できるかも知れんな。いいか、その体勢を維持している。お前が待ちかねていたものを、今いれてやるからな」

「最終章 アスカの選択」
勃起の根元を掴み、宙空でピンと固定させ、ぶっくり膨れた先端で狙いをつける。肉端の延長線上には、ぐっしより濡れた桃色の肉壺。

魔女は膝立ちとなっており、すり足でじりじり寄ってくる。下半身はあられもないが、上半身は例の魅惑的にして上品な黒衣装。戦いに敗れ、屈服し、自分は勝者の自由になっているのだ、殺そうとした相手に股を開いているのだと意識させる。

倒錯感に呼吸が乱れる中、女剣士は大きく股を開いて下半身をM字にする。魔女が挿入し易くなるだろうと考えて。

「いくぞ、アスカ……………」

妖艶な笑みを浮かべながら、トロトロの牝穴に亀頭を入れる。

「んんっ………… ああああああっ……………」

穴は目一杯広げていた。しかし、亀頭の太さは拡張後のそれを凌駕している。広がった肉穴を更に押し広げるのだ。

悲鳴を上げたアスカだが、その声音に孕むのは痛苦ではない。子孫を残す本能に突き動かされる牝ケダモノが垂れ流す喜悦である。律儀に指で肉花弁を広げたまま、肉棒が埋没していくのを、叫びながらうつつとりと見つめる。

肉棒の中で一番胴回りがある亀頭は膣口を超え、処女の狭さを取り戻した肉筒の中を進んでいく。ぴったり閉じた膣内が力づくでこじ開けられ、イボだらけの肉幹が複雑な凸凹を研磨する。

一ミリ一ミリ進む度に、アスカの背中が強張り、はぁーっと熱い吐息が吐き出される。

対する魔女も、彼女ほど露骨ではないが、紅潮を続ける艶やかな唇から熱っぽい息を漏れさせる。

「んああっ、そこはあっ」

肉端が一際狭い場所に来た。処女膜だ。

「お前の処女をいただくぞ」

アスカの手を取る。彼女の手は、滑らかに妖女の掌を求めた。女剣士と魔女。敵対していた二人が、恋人同士のように手を取り合う。

ただし、上下関係は明白だ。アスカには普段の凜とした様子が微塵もなく、発情期のケダモノじみた相貌である。対する魔女は、拒絶されても姦計の末に征服した敵剣士との性行為に喜悦を感じている風だが、おおむねいつも通りの余裕顔。

「あっ……くううっ……んんっ、突き破られるっ……！」
ブチリ。

先日体験したのと遜色ない強烈な痛み。一生に一度しか感じる事ができない筈の痛みを再び感じている。

「はああああ……この痛み……痛むけれど……あっ、くふう……」

「最終章 アスカの選択」
嫌な痛みではなかった。痛むことに多幸感を感じてしまう。体内を占める勃起の存在感に、手を握る強さが拍車をかける。

「わらわに膜を破られて嬉しそうだな……痛いのも気持ちいいか、可愛いやつめ……肉穴がぎゅうぎゅう締めつけてきおる……まるで精の迸りを催促されているようだ……ねだらなくとも、穴の内部をほぐした後にたつぷりと注いでやるわ」

膜を破った後、最初に処女でなくしたあの男は暫くじっとしていたが、魔女はすぐに腰を進めた。

「ああ……くる………遅しい肉棒が私の奥に入ってくる………はあ〜」

痛みが増大することはなかった。セックスに慣れた女の身体と同じく、結合している牡棒の感触が楽しめる。身体を元に戻しても、心身が覚えた性交の記憶は消えないと魔女が言っていたことが思い出された。

「んくうっ………お、奥に………あああつ、熱い………！」

ほどなくして、魔女の先端が子宮口に着いた。ドクドクと脈打つ表面の熱い生命力が、最奥の肉に伝わってくる。何もされていないのに、身体の熱が上がっていく。肉壺に肉棒が埋まることで押し出される愛液の量が増え、周囲を漂う牝の匂いに深みが加わった。

「わらわに擦られる快感を堪能するといい」

じゅにゅ………ぎゅにゅちゅ………じゅずつ、にゅじゅず。

上体を起こした正上位で抜き差しを行う魔女。浮いたアスカの太ももの下に自身の膝をどっしり据え、握った掌に力を込めつつ、牝の勢いで腰を振る。長い髪と、髪につけたア

クセサリーが宙を舞う。

「あつ、あつ、奥に響くつ、すごいっ、イボが擦れて、ふああっ！」

ベットで仰向けのアスカから嬌声があがる。男達のものよりも長く、太く、その上、女の凹凸をイボでゴリゴリ擦られる心地よさはどうだろうか。鮮烈な快感が頭を突き抜け、どんどん体温を上げさせられ、熱くなった身体は快感に敏感になり、セックス特有の快感が増大していく。

奥深くまで差し込まれ、太ももの付け根同士が衝突する際の、身体を芯から揺さぶる衝撃は、強い牡に抱かれているという意識を強くさせ、魔女への迎合心を濃くさせる。

「あんっ、いいっ、もつと、もつと突いて下さいっ、んああっ、子宮まで響くつ、すごいっ、あの男達よりもずつといいっ、くうっ~~~~~！」

抵抗心が溶け去った女剣士は、倒そうとした女の腰振りにわななき、もつとして欲しいと正直にねだる。

「そんなにいいか。どこがいいのだ？」

「お、おまんこですつ、逞しいイボペニスで満たされたアスカのおまんこですつ……あんっ、いいっ、おまんこいいっ、気持ちいいっ！」

「最終章

アスカの選択」

学習した卑語を口にすれば、奇妙な浮遊感が心身に降り、快感が大きくなる。その味を占めた牝剣士は、乏しい知識を総動員させる。

「アスカさま……………」

唐突に第三者の声。お尻で失神させられていた王族の娘だ。

「ひ、姫様っ……………！」

想いを寄せる姫君が、ベットの下からこちらを見ている。魔女と仲睦まじく手を握り合
い、腰をぶつけてもらうことに没頭している自分を。結合部の下にあるシートには女汁に
よる大きな染みができている。片思いの女性に、浮気現場を見られたのと同じである。し
かもこれで二度目だ。

「起きたか。アスカはわらわの女になってな、今、初体験のやり直しをしている所だ。見
届けてくれるか、王女よ」

魔女がアスカのお尻を持ち上げ、俗に言うまんぐり返しの体位をとり、彼女の身体ごと
身体を捻る。牝剣士とお尻好き王女の目に、結合部の様子が映った。

常に優雅さを失わなかった妖女が、みつともないガ二股で、足を踏ん張りながら股間の
中心を上げ下げする。肉棒が引き上げられる度に、張り出した亀頭冠と肉竿についた無数
のコブの谷間がおびただしい量の愛液をかきだす。飛び散った雫は、双方の下腹や太もも
を汚すに止まらず、アスカのお腹に垂れていく。

「あうっ、くうんっ、姫様に見られてる……………姫様がじつと見てるっ」

逆さな上に法悦の涙でよく見えないが、王女はこちらを見つめている。言い訳のしよう

がない。自分は愛欲込みで慕う女性の眼前で、他の女性に抱かれ、女の悦びを感じてしまっている。男達との時よりも盛大に。

「よく見てもらえ。愛しの王女に、自分が他の女で楽しんでいる所をな」

魔女の屈伸が早くなる。子宮口が連続して叩かれ、引き抜かれる際の、コブの凹凸に絡まった膣肉が全てもつていかれるような心地よい排出感が立て続けに起こる。

あまりの快感に頭の中がぼやけ、良心がなりを潜める。代わりに、不貞を働く背徳感を求める感情が幅を利かせる。王女が見ている前で、男達と性交した際に感じた、あの黒い快樂。

「姫様見て下さい……私のお、おまんこが、この方の……勃起コブおちんぽでズリズリ擦られています……くふうん……すごくいいんです……はああ……あの男達など比べ物にならない……こんなものをお尻にくわえ込んでいた姫様がうらめしいです……んんっ、私も早く降参して、愛人になってしまっていればよかったです……ああンツ」

初めは途切れ途切れであったが、破廉恥な台詞を紡ぐ度に異様な興奮が湧き起こり、徐々に舌の滑りがよくなっていく。

「最終章 アスカの選択」
「私は姫様をお慕いしています……はうっ……姫様の前で他人とセックスするのも好きな変態なんです……くふうんっ……あくうっ、か、感じてしまう……おまんこいいっ……大好きな姫様に見られるとどうしようもなく興奮する……ああ、姫様、こんな変態があな

たを好きになつてすみません……ごめんなさい……んツッ！　ゴリゴリくるうツ」

魔女の抜き差しを受けながら異常な懺悔を続けた。声が甘つたるい嬌声じみていき、肉花弁からかき出された蜜が、お腹から胸、胸から喉、喉から顎へと伝い、アスカの牝顔に移動する。性交による紅顔に、女蜜のテカリが付加されて顔の輝き度合いが引き上がる。

と、唇に柔らかい感触が。

「むちゅっ……ちゅるう、わたしも同じです……お尻をされるのが好きで好きで堪らなくて……わたしによくしてくれるアスカさまの前だったのに、すぐ興奮してしまつて……わたしも異常なんです……女なのに……」

自身の唇を重ねながら語る王女。口付けは子供の傷を舐める動物の母親めいた優しさで満ちており、日向でゆりかごに揺られている錯覚に陥るほどだ。

「お前達を知る肉の悦びなどはまだ序の口だ。互いに互いを墮とし合わせ、性のくびきを魂の芯まで食い込ませてやる……ふふ、愉悦の種は尽きぬか」

夢中でキスをし合う二人を尻目に、密かに呟く魔女。

「あふうああつ！　はげしいっ、おまんこ熱いつ、ぐじゅぐじゅおまんこがあ」

馬の手綱を引き寄せるように抜き差しを加速させ、想い人との口付けを堪能する情婦の心を奪つてやる。

「そろそろ区切りのようだな。子宮が降りてきている……子宮口に深く突き刺すこの感触

は堪らないな。あの下衆どもではないが、やはり鍛えている女の中は一味もふた味も違う……自分を倒しに来た者だというのが更にいい」

蕩けきつた牝剣士の顔を見つめながら唇の端を吊り上げつつ、精の放出を目指す。

「あーっ、はーっ、はあ、はあ、あっ、あっ、あっ、イクツ、おまんこイキそう！」

アスカの目の前で星がチラつき、耳も遠くなる。自分が何もかもから離れて、高みへ飛ばされる時の感覚だ。

「絶頂するがいい。同時にわらわの精液を注いでやる。好いた王女の前で、妊娠の可能性を送りながら失神させてやる」

妊娠してしまうかも知れない膣内射精を約束されても、アスカは怯えず、それどころか膣肉の締めつけがいつそう強くなる。敵だった魔女の精液を搾り出そうという反応はそれだけではない。膣の奥は徐々に膨らみ、放出させたザーメンを一滴でも多く呑み込もうと躍起になっている。

「出してっ、姫様の前で妊娠させて……私をあなたの子種で孕ませてっ！孕ませられながらイきたいッ、ああッ、イクツ、イクウウウウウウウウ！」

アスカの全身がビクンビクンと跳ねた。真っ赤になった身体の背中が弓なりに反れ、限界まで強張る。

「最終章
「んっ……おおお、いい締りだ……出すぞ……たっぷり出るぞ……見ている」

墮落させた二人の視線を集めた刹那、種をねだる蜜肉壺の中でイボイボ勃起が精汁を放った。亀頭は降りてきた子宮口に深々と突き刺さる。子宮口を抜け、子宮へ通じるピツチり肉道に包まれる中、鈴口がヒクつく。

「んあああああああツツツツ！」

性交で煮立っていた膣内にさえも熱いと感じさせる、灼熱の精液が爆発。粘り気も凄まじく、そして重い。ザーメンをゼロ距離から浴びる最奥は、ベツタリとへばりついた牡汁のために、充血した乳首並の重量感を感じさせる。濃厚な精液が肉皺の隙間に染み込んでいく様子も感じる。

「あ……………あ……………」

男達のものよりもずっと優れた肉棒で処女喪失をやり直しさせられた。男達のものよりもずっと魅力的な精液で、彼らの膣内射精を上書きされた。

思慕の念を向け、守ると決めた王女の前で。

敵対し、殺すとまで決心した魔女により。

抗い難い牝の旨みを教えられた。

（気持ちいい……………）

膣内射精を受けながら絶頂失神に落ちていくアス力。

森に入る前では、決して浮かばなかった淫蕩な笑みが浮かんでいた。

エピローグ

「そんな……受け止めた……！……うううつつ……だめ、返されるっ！」

青い魔道娘　確かエリカと名乗ったか　が絶望の悲鳴を上げた。

「まさしく全身全霊をかけた一撃……軽くはなかった」

細い刃一本で受け止めていた空色の魔力球を、刀を前方に振り抜くことで弾き返す女剣士。彼女との間にあった樹齢数十年級の太い樹木を何本もなぎ倒し、大地を抉って醜い大傷をつけた破壊光弾は、民家ほどの大きさでもあったのだが。

弾かれた魔力の塊は、放った本人のすぐ近くの地面に着弾。完全に制御を離れたエネルギーが破壊力の渦となつて猛威を振るう。

「きやああっっ！」

倒れた大木を転がし、枝を吹き飛ばし、湿った土を舞い上がらせる奔流が起きているのだ。直撃こそしなかったが、若い魔道娘も無事ではいられない。枯れ草のように宙へ上がり、地面に落ちる。エリカの身体に、これまで感じたことのない激痛が走る。

「この……妖怪女……恥知らずのいやらし痴女っ」

「エピローグ」
呼吸するのにも強い痛みが伴う中、エリカは悠然と歩み寄ってきた敵をやつとの思いで

睨み付け、勝気な性格が滲み出る甲高くて可愛らしい声で汚い口撃を加える。

「な、なに薄ら笑いしてるのよ。ひよつとして、罵倒されて喜ぶタイプ？」

「言い得て妙だったから、口が勝手に緩んでしまったのだよ。心も元気そうで良かった。痛むだろうが、深刻な怪我はしていない。大人しくしていれば帰れるくらいに回復する」

相手には気分を害した様子がない。子供に食ってかかられても、穏やかに対応する母親じみた懐の深さを感じさせる。態度だけではない。細く整った目には優しい光が点っている。つい先刻までは、見ただけで切れてしまうのではないかと思えるほど、鋭利な輝きが宿っていたのだが。

「その時になったら帰って欲しい。向こうの彼も、あのまま放置では可愛そうだしな。この決着に納得がいかないのなら、腕を磨いて出直すことだ」

一瞬、離れた所で倒れている同行者をエリカは見た。自分が通う魔道学園で知り合った優男。魔道の腕は十人並みだが、武器の使い方が上手く、双方を組み合わせた戦い方で学園の模擬トーナメントでは脚光を浴びたものだ。

その力は今回の冒険でも発揮された。エリカ独りでは、ここまでたどり着けなかった感さえある。この女剣士　噂を頼りにすれば、アスカという傭兵　との戦いでも勇敢に戦い、気絶するまでエリカの身を案じていた。若さからくる功名心と自惚れの権化になった、馬鹿で可愛げのない女のために最後まで献身してくれたのだ。

「ふんっ、とどめを刺さないと後悔するわよ。回復したらあんな屋敷、魔法でぶっ飛ばしてやるんだから」

言い切つてケホケホと咳をする。

「気丈な子だ」

その時、エリカはハツとした。女剣士の雰囲気が変わったのだ。

「注意一秒怪我一生と言うが、軽はずみな態度や言動は不幸を招くこともある。それが、今の敗北に繋がっていることに気づかないほど愚かではないだろうに」

触手が。ここに来るまでも遭遇した、あのネットネットと不快な触手の群れがどこからともなく現れて、倒れている彼を担ぎ上げて運んでくる。

「まあ……それは私にとっては歓迎するべきことなのだけけれど」

アスカは、自身の身体が火照り出していることを感じていた。いや、始まりは今ではなかったか。戦う前、優れた魔道の使い手娘と、同伴者の強い青年と対峙した時から、そして戦闘中も、冷静に臨んでいる一方、性的な昂ぶりを感じていた。

負かしたら犯す。

彼女達の様子は魔法道具で眺めていた。歳相応の恥ずかしさと、意地っ張りな性格故にエリカは否定するだろうが、彼女は一緒に戦った彼。レックスという名だったか

を頼りにし、強くて深い好意を抱いている。彼も同じだ。真面目な性質をしていて、

下賤な下心などは持ち合わせていなそうな男。そんなカップルだ。

互いの想い人を、他の異性によって乱れさせられる。

そうしようと思うと、触れてもいないのにアスカの股間はズキズキ疼き、熱と汁の増増と化するのだ。

「ひっ、なによコレ！」

身体を動かすこともままならない強気娘の首に、一体の触手が絡みついた。喉笛を軽く絞首する。

「その身体では解けまい。魔力を使い果たしている風だから、口は塞がないでおく。自分の好きな男が他の女に腰を振り、パートナーだけに与えるべき神聖なザーメンを、好きでもない……妖怪女で痴女の私に注ぎ込む様子を鑑賞している」

「そんな……アンタおかしいわ、普通じゃない！」

「その通りだよ」

魔女の虜となり、牝の悦びと変態的な性格を得てしまったアスカ。愛人となった後も魔女や王女との倒錯的な関係はいつそう深まり、非常識な行為が好物となっていたのだ。

「くっ………うふふ、レックスはね、凄く真面目な男なの。オナニーだってしたことがないんじゃないかしら。そんな堅物が、アンタみたいなのになびく筈ない。今の自分を鏡でみたことある？ 汚らしい淫売以下よ？」

彼の性質を思い出し、勝ち誇り、罵る娘。見た目に言及するのは二度目だが、そうされても当然の理由がある。

実際、破廉恥な格好をしているのだ。禁欲的だった女剣士は。

以前は、身体のを防護服で覆っていたのだが、今は上半身のみ。下半身は、股間は黒のローレグビキニで隠しているものの、あとは肌が透けて見えるニーソックスのみという薄着具合。

下着の前部分は大陰唇を覆う程度の面積しかなく、後ろに至ってはムツチリ柔尻の膨らみ具合と丸い輪郭を際立たせるＴバック。

ニーソックスは日々の鍛錬で鍛えられた太ももと下腿にピツチリ密着すると共に、足のラインを引き締めており、肉感的にして流麗な艶かしい脚線美を作っている。

「その最低女に敗れ、これから大事な彼を犯されるのだぞ、きみは」
間近まで運ばれた青年を叩き起こすアス力。

(では始めるか)

すつと目を細め、ドスのきいた声で。

「エピローグ」
「よく健闘したが、ごらんの有様だ。無用な手間をかけさせてくれた礼だ。今から君の彼女を殺す。そこで見ている」

エリカの首に触手が巻きつき、のたうっているのを認め、彼が青ざめた。

「申し訳ないっ！　ここにこようと言ったのは僕なんだ。彼女は、弱みを握って脅かして戦わせていたんです。だから、彼女は見逃して下さいっ」

身体はまだ痛むだろうに、よたよたと地面に額を擦りつける。

「下手な嘘だ。脅かした？　そんな男なら、自分こそ助けてくださいというだろう……だがいい……そんなにあの女を助けて欲しいのか？」

「はいっ、何でもしますから、どうか彼女だけは！」

一生懸命哀願する。チラリと見れば、口の減らない勝気な娘も流石に神妙だ。複雑な表情をしている。彼の想いを見聞きすることで自分の幼さや愚かさを悟り、ようやく後悔しているのかも知れない。こんな彼をこれから犯されることに怯えているとも考えられる。

「そうか……ならば私を抱け」

「……………え？」

「見ての通りの格好は、男をその気にさせるための手管だ。私は常に欲求不満で、股は熱く滾っているスキモノ。男なら誰でもいい訳ではないが、お前のような顔立ちの、しかも私とそこそこ戦えるほどの猛者ならば言うことはない」

木の根元に寄りかかり、もったいぶった所作でローレグ黒ビキニを脱ぎ捨てる。フロント部分の裏側はネットリと糸を引いていた。繋がる先は源泉でもある蜜壺である。そこはぐっしよりと濡れそぼり、全面的にテカリを帯びているのだが、高い木々の間から差し込

む陽光により、宝石めいた煌きを放っている。

ぐつと股を開く。露骨に鼻の下は伸びていないが、魔道娘から真面目と太鼓判を押された青年の目は釘付けだ。息をするのも忘れていないのではないだろうか。

「ふふ、女のここは初めて見るか？ 若しかしたら、見る機会が一生なかったかも知れない部分だ。いいチャンスだから網膜に焼き付けるといい」

股間に初心な視線を感じながら、上半身の防護服を崩す。ずり下げて、肘辺りで引っ掛ける。服の下は以前と同じく裸だった。洋梨型の、もぎ頃の熟れた果実を思わせる乳房が露になる。

乳房は興奮で膨張しており、戦いの後ということもあってシットリと汗ばんでいる。肉壺ほど顕著ではないが、こちらも陽の光を受けてツヤが増し、ただでさえ魅力的な巨乳が扇情的な旨みを見せ付けている。

肉体の興奮は乳輪にも及んでいる。経験を積んでもくすまない肉部がぷくつと膨張し、中央に位置する乳首は男棒の勃起さながらに張り詰めてビクビク震えている。

「ちゅむっ、ついでにオナナの味も味わっておくといい、ちゅるる、もっとも、拒絶は許さないがな。あの娘を殺されてもいいというのなら話は別だが」

「エピローグ」
乳房を掬い上げて量感を誇示しながら、突き出した舌の腹で強張り乳首を舐めつつ、誘惑の言葉を投げかける。

と、エリカから苦悶の呻き声。アスカの命令思念を感じた触手が、締めつけを強めたのだ。魔女と懇意になることで、剣士は魔女の眷属を操る能力を譲渡されていた。

「エリカ……」

目の前に、男なら飛びつくのが当たり前の餌がぶら下がり、しかもそれを咎められる理由がないというのに、彼は小刻みに震えている。苦悩している様子だ。意中の娘とあられないアスカを見比べる。

「いいなりになっちゃ駄目よ……そんなビツチとセックスしたら、アンタの男としての価値が下がっちゃうわ……いつか……す……好きな人ができた時に後悔するに決まってる……アタシはどうなってもいいから……」

死への恐怖から脂汗が垂れているが、紡がれる声音は力強い。ただし、喋り方が震えている。台詞の内容から察するに、自分への未練を断ち切らせようという意識のためだろう。好きな男に『アンタなんか何とも思っちゃいないんだからね、勘違いしないでよ！』と信じ込ませる辛さ故の。

やがて、青年が向き直る。表情から固い決意がうかがえる。

「あ、あなたを抱けば僕らを見逃してくれるんですか……？」

「ああ。私の興味は肉欲を満たすことだけ。他人の命などはどうでもいい……が、私は気まぐれでもある。早くしないと、小生意気なガキどもを絞め殺したり、切り殺す楽しみを

得たくなるかも知れないぞ？」

「……抱くつて、セックスするつてことですよね……どの位すればいいんですか……」

「ほう、やはり抱く、は抱擁でなく交尾だと分かっていたのか」

意味ありげにエリカへ流し目を送る。彼女は無言だが、思いもよらない青年の博識ぶりにか目が丸くなっている。

「そうだな……私の膣内で、キミの精子をぶちまけてくれれば満足するかも知れないか。その時にならなければ分からないが……いずれにしろ、私がいいと言うまでは付き合ってもらおうか」

「分かりました……」

夢遊病者の足取りでアスカの前に行く。そこで、エリカを見る。その瞳は罪悪感で濁っており、謝罪の念を色濃く表わしていた。

「貞操観念が強いものだな……さあ、ズボンを脱いで見せる」

傲然と言い放つ場の支配者の言葉に、青年は渋面でベルトを外し、ズボンを下げた。

「ふむ、よく鍛えられた身体と同じくなかなか立派なものをもっているではないか」

「エピローグ」
と、皮を被っていないに露出しているピンク色の亀頭が印象的だ。その色艶は初々しいものの、牡として牝を喜ばせる才能もあるようで、亀頭の段差は咲いた花と同じく外側に張り

出している。

幹の部分は直線的であり、すっかり勃起したのならピーンと直立することだろう。見た目がよい男根は、見ているだけで欲情を刺激する。

「今は私だけを見るんだ……ほら、このおまんこはお前のものだぞ……」
空いている手で、蜜をだらだら垂れ流す場所を広げて見せる。ぼつてりと膨らんだ大陰唇は見た目に反して柔らかく、あつさり指で開かれ、サーモンピンクで楕円形の肉穴が青年の瞳に飛び込んでいく。

苦みばしった青年の目が見開かれる。股間に生えたものは、グングン張り詰めていく。

「さあ、こい……その立派なチンポを、色狂いのオンナにぶちこむんだ……こんな女に戦いで負けて悔しいだろう？ 惨めだろう？ それを、セックスで晴らすんだ……好き勝手に弄んで、ザーメンを無責任にドクドク注いでやれ……妊娠させて後悔させてやるんだ」
これは復讐だと囁くことで、好きな女の前で他の女を抱く苦しみを削ってやる。

「それに、そうしなればあの娘が死んでしまう……仕方ないだろう？ あの娘を助けるためだ……他に手はないのだから、どうして気にする必要がある」

好きな女を助ける唯一の手段。その泣き所も突いてやる。膣内を指でかき回しながら。ぐちゅぐちゅと鳴り響く淫猥な水音と、むわんとくゆる牝汁臭が男の欲望を刺激して、敵の女が教える屁理屈をもっともらしく感じさせる。

「そうだよ……仕方ないんだ……エリ力を助けるためには……」

自分に言い聞かせるように呟くと、食虫植物に飛び込む虫と同じ勢いで、アスカの前に
跪き、完全に隆起した肉棒を突き出す。

「うそ……レックスが……」

蚊の鳴くような驚愕だったが、アスカには心地よかった。

敵の肉穴へ、ウブな亀頭が入ってくる。

カリが膣口を超えた辺りで指を離し、迎え入れた牡部を締めつける。

「うっ……あああ……… 凄………これが、女の人の中………熱くて、柔らかくて……」

………それにグジュグジュって……」

ありきたりな感想。けれど、それは相手に心を許しているからこそ出るものだ。

「もつとこい。根元まで刺せるから。全部包み込んでやる」

子供をあやす所作で背中を抱くアスカ。まるで、年下男性に性の手ほどきをしているお

姉さんである。

「はい、はい………くああ………」

濡れた熱い膣肉が、若い勃起に絡みつく。パートナーが見ているというのに、青年は夢
中になって女の中に入っていく。

「エピローグ」
「いいぞ………なかなかの物だ………若さ特有の硬さ………っう、このビクビク脈打つ感じ

……密着した私の肉も震わせて……ずつしりくる重さも堪らない……はあ、私の身体に芯棒を入れられているようだ……んんっ」

膨張した肉棒に押し出され、蜜壺から牝汁が溢れる。青年の下腹にしぶきがかかるが、彼は全く気にしない。二人の結合部から垂れ落ちた雫は草のじゅうたんに落ち、小さな水溜りとなっていく。

と、アスカの目が閉ざされ、心地よさそうにまつげがヒクついた。

「先っぽがコリコリって……はあぁ……」

愛液塗れの大陰唇と、同じく蜜塗れの肉棒の裾が合わさっている。

「くふう……奥まで……子宮口にお前の亀頭が届いたのだ……私の一番奥にむにゆりと触れているぞ……ふあぁあぁ」

現在では魔女のイボ肉棒の鑄型に等しい蜜壺の最奥には、本来ならばそれよりもずっと劣る青年のものが到達することはない。

それなのに届いたのは、子宮が降りていたからだ。

想う娘の前で、その娘も青年を想っているのに、敵の女に夢中にさせる背徳。その愉悦でアスカは興奮し通しなのだ。

「では、本格的に始めようか。女とのセックスは初めてなのだろう？ 焦らず、ゆっくりするんだぞ……ほら、腰を動かして……いち、に、いち、に……そうだ、上手だなその調

子だ」

音頭をとって抜き差しを手引きする。青年の動きはぎこちなく、童貞であることは明白だった。だから、萎縮させないように、優しく囁き、上手にできれば褒めてやる。

想い人を人質にする卑劣な女と性行為をしているというのに、彼は熱っぽい呼吸を繰り返しながら、年上女性の導きに従う。その様子は、知らない者が見ればとても仲睦まじいカップルに見えたことだろう。そうでないにしろ、少なくとも、キャンキャン騒がしい高慢な娘と一緒にいた時よりも、青年の表情は喜びで満ちている。

「なんでそんなに嬉しそうなのよ……いやあ……そんな恥知らずなスケベ女にうっとりしないですよ……」

魔道娘のつぶらな両目に涙が一杯溜まっていた。声も涙声だ。ついさっきまでの威勢のよさは微塵もなく、二人の性交を見ながらガツクリとうなだれている。

「すごいっ、僕のがぬちよぬちよの肉でギュウギュウ締めつけられて……くうっ、奥に当たるのが気持ちよくてっ、ああっ！」

コツを掴むと、青年は自由奔放に腰を振り始めた。好きな娘の前であるということ忘れていた。思うがままに、初めての女体の味を貪っている。

「エピローグ」
「んんっ、はあ、元気がいいな、あふう、奥に響くう、ふふ、そんなに夢中になっていいのか？ 恋人が見ているぞ？」

「あ……………でも、エリカは彼女じゃ……………僕のことなんか何とも思っていないから……………それに、これは彼女を助けるために仕方なく……………ううっ！」

「なんだ、恋人ではないのか……………ふうん、恋人ではないのか」

後半は意地っ張りな娘に向けた言葉だった。アス力は意地の悪い目で彼女を見据え、言い放った。

青年の台詞と破廉恥女の視線に打ちのめされたエリカは唇を噛みしめる。小さな手は生い茂る雑草を地面ごと抉っているのだが、目からは大粒の涙が零れ始めていた。

「でも、キミは彼女を想っているのだろう？　だからこそ、こんな危険な場所に同道したのだ。違うか」

「そうです……………僕はエリカが好きだから……………心配で……………でも、彼女は僕のことを迷惑としか思っていない……………んはあっ」

「片思いでも、彼女を助けるためでも、好きな娘の前で他の女とこんなことをするのだ。

一応は、謝っておくべきではないかな？」

「はいっ、謝ります、エリカごめんっ、君を好きなのに、この人とセックスしてごめんっ、ごめんなさいっ！」

謝る時も、腰の動きは止まらなかった。口から謝辞を叫んでも、見つめる先はアス力である。

「はあっ、はあっ、うくっ、ああっ、出そう……射精しそう……！」

膣内を擦り上げる勃起が、射精前の膨らみを見せ始めた。降り続ける子宮口にぬっちょりとめり込む度に、受け止められた湿り肉の中でビクツビクツと震えている。

「んっ……いいぞ、童貞喪失射精を私のおまんこの中で済ますといい……あふっ……あのエリカではなく、この私の痴女まんこの中でな……」

「ありがとうございますっ！ ああ、出るっ、お姉さんの中にザーメン出るっ、ごめんエリカ、このお姉さん凄く気持ちよくて、止められないっ、君が好きなのに、この人に膣内射精してごめんっ！」

ビククンッ！ ビユッ、ビユウッ！ ビュルルッ、ビュル……ッッッ！
敵の女に筆下ろしをしてもらったペニス、好きな娘の前で盛大に射精した。

子宮口に包まれる中、鈴口は何度も精液を吐き出している。童貞喪失したての勃起が放出する白濁は多量だ。女の奥を染め上げると、膣と肉棒の狭間に入り込み、女肉の細かい谷間に染み込んでいく。

「ああっ……若い精液出てるう……私を倒そうとした青年のザーメン、

「エピローグ」
いいっ……ん……っ……熱い……濃い……おまんこ気持ちいい……
もっとうるだろう？ 射精しながら腰を振って……ほら、頑張らないとあの娘を殺してしまっぞ……それに、もう二度と女の中で射精できないかも知れないだろう……やれる時に

思いきりやっっておかないと損だぞ……？」

それまでの冷静な態度とは打って変わり、射精を浴びた途端に牝顔を晒し、牝声を撒き散らす女剣士。更に吐精を引き出すべく、彼の情欲を煽る。

「は、はいっ！ くっ、はっ！」

息せき切って腰を振る青年。鍛えた筋肉を、射精するためだけに駆使する。

「くう、出入りしながら出てる……突く時はビュルツて出しながら奥に来て、抜く時もドピュって子宮口にかかり……んはあ~~~~、若くて、好きな娘がいる子の精力……なかなかだ、はあ……」

牡性剥き出しで牝剣士を貪る青年。顔が興奮で真っ赤になり、身体が汗まみれになっても初めての交尾に没頭し、睾丸に蓄えられた精子の殆どを敵の女へ差し出した。二人が合体した部分の下には、牝の性汁でできた大きな水溜りが生まれており、交じり合った二人の体液と体臭が、森の匂いを覆いつくしている。

彼に想われ、また本当は自分も想いを寄せていたエリカは、汚らしい女に青年がのめりこむ様子を、目と耳と鼻、それに肌でみて、あるいは感じていた。血色を失い青白くなつた唇は終始小刻みに震えていた。

「さて……」

散々射精して失神した青年をそつと寝かせると、アスカが向き直る。

「次はきみだ」

股間から精液が垂れるのをそのままにしてエリカに近づく。強気娘は意気消沈しており罵りの言葉の一つもでない。

「アタシをどうしようっていうのよ……レックスが約束を果たしたんだから、見逃してくれるんでしよう……？ もう、帰るからどっかに消えて……」

「そうだな。きみの命は助けるが、彼は別だ」

「なんですって？」

青年が眠る木の陰から触手が這い出し、彼の首に巻きついた。

「私の意志一つで、彼の首はいつでも落ちるぞ」

口調は酷く冷たく、エリカには嘘だとはとても思えなかった。

「な……アンタ、さっきまであんなにしっぽりやってた男を殺そうって言うの？ 一緒に気持ちよくなって、アタシに見せつけて……」

「それがどうした。私が聞きたいのは、きみも身体を差し出すかどうかということであり……私がしたいのは、きみとのセックスなのけれど」

「エピローグ」
首に巻きついた触手がじわじわと窄まっていく。このままでは、彼が目覚めることがなくなってしまう。

「待って！ 分かったわ……アタシの身体を好きにきなさい……」

「物分かりがよくて助かる。だが、本当にいいのか？ 彼はきみの前で他の女にのぼせあがり、性交を楽しんだのだぞ？ そんな男のために、身体を捧げるなどとは」

「別にいいじゃない……レックスがアタシを何度も助けたり、支えてくれたりしていたのは事実なんだから……なのに、浮気……彼氏にした訳じゃないから正確には違うけど……ともかく、他の女とセックスした位で見捨てるなんて酷いじゃないのよ……」

苦みばしった顔でポツポツと、けれど最後まで言い切ったエリカ。少し前まであった、剣の先じみた鋭利さが幾分やわらいでいる。丸くなったという所か。

「いい心がけだな。その気持ちをお忘れず、たっぷりと奉仕してもらおうか」
「なっ、アンタそれ……！」

エリカの目が、信じられないとばかりに見開かれる。彼女の瞳に映るのは、アスカの股間で反り返っている男根だ。

「彼と比べてみるといい」

亀頭は紫がかかった桃色をしている、キノコのように鈍く尖る肉の塊。肉幹部分は真面目な童貞だった彼のものと同じ肌色だが、そこかしこに丸いイボが生えている。肉棒の全長は彼の物の五割り増し以上であり、径もずっと太い。

全体がビクビク震える様は、獲物を前に喜悦を上げるケダモノを彷彿とさせ、鈴口からだらだら垂れる先走り汁は、餌にありついて涎を垂らす獣を連想させる。

「では、跨ってくれ。自分で私のをくわえ込むんだ」

少し離れ、青年が眠るすぐ傍に仰向けになって言う。

「そんなものを……そんな所で……！」

エリカにして見れば、異様な肉棒を迎え入れるだけでも嫌であるのに、それを意中の青年の横でしなければならぬなど、嫌で嫌で仕方がないことなのだ。

しかし、拒絶することはできない。彼の命がかかっているのだから。

「わ、分かったわ……」

しばしの葛藤の末に覚悟を決め、よたよたとアス力を跨ごうとする。

「おっと、その前に」

アス力が指示を出す。胸元を開き、下半身の穿き物を脱げという内容だ。本質的に気が強い娘は羞恥から反論しようとしたが、彼に巻きつく触手の姿を見て止めた。悔しそうな顔をしながら、胸元をはだけ、敵の女が凝視する中で下穿きを脱いだ。

「小柄だというのに、なかなかの巨乳だな。乳肌もなめらかでとても綺麗だ。おまんこの毛は剃っているのかな、毛が一本もなくてツルツルしている」

「エピローグ」
乳房は底が深い皿型の、よく育ったたまあるい果実であり、身体が動く度にふるふる震える様から、その柔らかさが伝わってくる。乳輪は大きめで、大人の親指の腹からはみ出すほどか。ツンと立っている乳頭も形が整っている。血色のいい乳肌の中に浮かぶ島めいた

乳輪と乳首は、ともに清楚なピンク色をしていた。

露になった股間もツルツルな肌質をしており、中央に咲く肉の花も、歳相応に腫れぼつているが、まだ踏み荒らされていない雪の積もった草原を連想させる清らかさ。一對の花びらの隙間に走る縦筋は細くピッチリしている。

「そんなにじつと見ないでよお……………」

泣き出しそうな声で訴える魔道娘。キンキン喚き、汚い言葉も使いはするが性根は初心なのかも知れない。

「そうだな。見るのも楽しいが、そろそろ繋がりたい……………さあ、やるんだ」

促された娘は、男好きする半脱ぎの身体を見てますます硬化した勃起を跨いだ。ローブの裾を摘み、大陰唇の真ん中にある細い隙間に、ギンギンに膨れ上がった亀頭の先端を密着させる。

「ごめん、レックス……………」

しおらしい顔が小声で呟き、ゆっくりと腰を下ろす。

「くう……………痛い……………でも、我慢しなきゃ……………う……………」

鈴口からとめどなく溢れる汁が潤滑油になっているとはいえ、清楚な花裂にはアスカの剛端は大きすぎる。ひっそりと咲く肉の花びらが目一杯広がり、受け入れるにはそれでも足りず内部へ巻き込まれている。

「あつく……………だめ、これ以上は……………裂けちゃう……………！」

亀頭の全てと、肉棒部の幾らかが入り込んだ時、エリカの動きが止まった。片目をぎゅつとつぶり、全身でせわしく息を吐いている。

「どうした？ まだ全部入っていないし、一番奥に届いてもいないが」

「ア、アタシの中の狭さから勘付いてるんでしょ？ 処女なのよ、アタシは……………アンタも女なら破瓜がどれだけ痛いかわかってるでしょ？ もう無理……………好きでもない奴を……………しかもアンタみたいな変態オトコオンナを相手にしてるのに、この痛みは耐えられない……………」
血を吐くような言葉だった。この娘のことは深く知らないが、男勝りな性格であることを考えれば、人前で弱音を吐くなどしないと思える。相手が自分を辱める者なら尚更だ。そんな女に許しを請うなど、相当な屈辱であろう。だが。

「分かった。ならばこれでお終いにしよう。彼には死んでもらうが」

アス力は飽くまで冷淡だった。弱弱しい目をじっと見据えて言い捨てる。

エリカがまともに硬直した。化け物を見るような目で、

「……………アンタ最低よ……………分かったわ、アタシも本当に腹を括る。捧げてやるうじやな

「エピローグ」
い、アタシの膜の一枚や二枚。そして、満足させてあげようじゃないの……………」
キツと睨みつけて。

「そうして見逃していただいて、後で絶対に後悔してもらいますから……………今は無理でも腕

を磨いて、いつか必ず殺してやるっ」

瞳の中で憎悪の炎が燃え盛る。

一度深呼吸をすると、それまでためらっていたのが嘘のように、エリカは腰をストンと落とした。

「んんっ……痛っ、いたいっ……くうっっ……これしきのこと……なによ……」

牡棒を迎えて拡張中の蜜壺の入り口から、赤い筋が降りてきた。一瞬だけ、魔道娘の動きが止まったもののすぐに腰が降りていく。

「ふふ……いつでも殺しにくるといい」

アスカが彼女の身体を少し後ろに倒させる。垂直のままに入りきるのならばよいのだけれども、自分のものが大き過ぎるせいで成就しそうにない。そう判断した上で、より突き上げ易い体勢にさせようと思ったのだ。

「う、くっ……っっっ……」

痛むのであろう。エリカは未だに顔をしかめている。しかし、彼女は苦痛を無視して腰を振ろうとしていた。そこへ。

ビューウツッ！ ドピュンツッ！ ビュツッ、ビュルツッ！

「きゃっ……やだ……触手の体液……まずい……これって……！」

アスカの意思で命じられ、いつの間にか這い寄っていた複数の触手が、エリカの顔に体

液を浴びせた。不意打ちに対応できず、彼女の顔が白濁に塗れる。

綺麗な栗色の髪やほっぺたにかかる雫もあつたが、本当の狙いは口であつた。そこが重点的に狙われて、不快なネトネト汁で一杯にされた。彼女は吐き出そうとしたのだが、何しろ大量に入れられている。喉の奥に滑り落ちる分が少なくなかつた。

「知っているのか。ならば説明は不要だな」

ただ、話が早いとばかりのアス力。対するエリカは。

「う……くっ……ああ……これ……話に聞いた以上に……あああああ
あつつつつつつ！」

勝気娘は歯を食い縛り、鼻の頭に寄つた皺をヒクヒクさせるがままにしていたが、ほどなくして決壊。閉じ合わされていた口から、甲高い叫びが上がつた。

濃い空色のローブからはみ出している身体が瞬く間にピンク色へ染まり、そこかしこで汗が噴き出す。汗はすぐに蒸発して、エリカを『水の滴るイイ女』にし、若い娘の芳しい匂いを周囲に漂わせている。

形がよい豊かな胸の先っぽでは、乳輪がぷっくり膨れると共に、美痴女を目の当たりにした浅ましい男の肉棒じみた速さで乳首がピンと膨張した。

「くうっ、こんなの……なんとも……ない……ああんツ！」

「エピローグ」
開いた口を引き締めると、アス力にも明瞭に聞こえる大ききさで歯軋りをする。だが、ア

スカがズンと腰を突き上げると、あられもない声があがった。

「虚勢を張るな。きみが浴び、あるいは飲んだ触手の汁は、普通のものよりも高濃度の特別製だ。身体は正直に反応しているのだ。素直に快感を楽しんだらどうだ？」

緩やかに腰を突き上げつつ、優しい声音で語りかける。

「冗談じゃないわ……うつつ……身体は張るけど、心まで明け渡すもんですか……ア
ンタなんかに負けないんだから……っう！」

身体は発情色、乳首は酷く熱そうに震え、アスカの男根を収めた膣などは女匂をポンプン放つ性汁をひっきりなしに垂らしている。なのに、魔道娘は苦虫を噛み潰した顔を維持している。

「大した精神力……いや、負けん気といった方がいいのかな」

「ふんっ、おだてたって何もでないわよ……はあんっ……さっさとイっちゃいなさいよ……処女のおまんこはキツキツでしょ？ 涼しい顔をしてるけど、実は今にもびゅーって射精したくて堪らないんじゃないの？ んっ、ほらほら締め上げて上げるからっ」

真っ赤な顔で膣を締めるエリカ。単純な締め上げではなく、締めるといふ風に射精を誘うリズムカルなぜん動を繰り返して来る。

「ふふふ、あの気持ち悪いコブ付きペニスが、中でみっともなくビクついてるのが分かるわ……射精するの？ 射精しちやいそう？ いいのよ、アンタを満足させる約束だものね

……思う存分だすといいわ……アタシのお腹をタップタップにしてみせなさいっ」

得意顔で見下ろすエリカ。自分の身体で、敵の勃起を快感でわななかせている実感に、優越感を感じているのだろう。

「そう言うきみのおまんこも、余裕がなさそうに思えるが。中はヒクヒク、汁をダラダラ。処女喪失直後に絶頂を味わえそうだな」

「ふんっ、誰が！……くふう……アンタなんかでイク筈ないでしょ……ん、んんっ……一方的に搾り取って上げるわ……あう……射精し疲れて失神しても、その時は殺さないでいてあげるから安心しなさいっ、真っ向勝負でやってやるんだから」

「それは色々とありがたい。心遣いに感謝する」

突風に逆らわない柳と同じく、激情の権化と化している娘を受け流すアスカ。彼女は仰向けにさせていた上体を起こし、腰を振る娘をふわりと抱いた。

エリカの身体を傾斜させたままであるの、前半身同士が密着するまでには至っていないが、互いの距離は格段に縮まった。

「えっ……」

「エピローグ」
意図が読めない行動に戸惑い、エリカの動きが止まった。アスカが、赤子の眠る揺り籠と同じく、対面座位の体勢になった二人の身体を前後に揺らす。

「あ……あふっ……なに……アソコが痺れて……くうんっ……」

エリカの膣内に穏やかな痺れが広がっていく。内部を外側に押し上げていた勃起の肉コブは、無数にある膣肉のヒダの谷間に深く食い込んでいたのだが、前後に揺れる度にイボと肉の凸凹が擦れるのだ。加えて、潤滑油に事欠かない状況であるので、摩擦はとても滑らか。穏やかにムニユリ、ギョチュリと擦られるのが酷く甘美だった。

「流されてはだめよエリカ……………相手はドスケベ変態女なのよ……………く……………ああ……………」
快感に吞まれそうになっていることを感じ、いけないと自分を叱咤しても、膣内に起る気持ちよさは止まらない。痛みで一杯であった中が、今では燃えているように熱い。

さらに。

「ふああっ、やめっ……………」

「綺麗な髪だ、艶やかでいい香りがする。今は汗も混じっているが……………それにこの肌、ちゅぱっ、きめ細かくて、ちゅっ、紅潮しているのが艶かしい、ちゅっ、ちゅるる」

敵の女剣士はエリカの身体を抱き寄せて、髪の中に鼻を埋めてはクンクン嗅ぎ、首筋に唇を近づけてはねちっこくキスをしてくる。舌を伸ばして、ツーツと肌を舐め、自分の唾液とエリカの汗が混在する皮膚を吸い上げもする。

その所作は壊れ物を扱うような丁寧さ。荒々しさなど微塵もない。ずっと昔、幼い頃に両親がしてくれたスキンシップを思い出させる。優しさが籠もった無償の愛撫は、何物でも感じる事ができない多幸福感を与えてくれて。

「いやあああああつっつ！」

心の底から恐ろしくなった。

大切なレックスを倒された時も、アスカとの力量差を理解して絶望を味わった時も。目の前で彼が敵の女と恋人同士みたいにセックスをしていた時も、そして処女膜が破れた時間でさえも上げなかつた絶叫をあげてしまった。

最悪の辱めだ。

力づくで犯されるのも苦痛だろうが、この女の手管は心の奥底までをどうにかしてしまいいそうな陰湿さを秘めている。身体だけでなく、心にまで触れてくるのだ。

可愛がられて、肉の悦びを味わう。それは恋人同士、伴侶と決めた者同士だけが共有している蜜事である。けれども、今、自分は敵の女にそれを感じている。下らない理由で城を蹂躪し、王女をさらっていった無法者に味方する、しかも、自分達を倒し、異形を生やす両性具有者であり、異常性欲者であるこんな奴にである。

「離せっ、このおっ！」

エリカは力一杯に相手を引き剥がそうとした。このまま繋がっていたのではマズイという直感に従って。この時、言う事を聞かなければ彼が死んでしまうという大問題さえも意識から吹き飛んでいた。

しかし、女剣士のりよ力は凄まじく、全力を尽くしているというのに、まるで山のよう

に動かない。自分のペースで変わらず可愛がってくる。思い返してみれば、充実した肉体を持つレックスの攻撃を受け止め、鏝迫り合いにすらも悠々と押し勝っていた女だ。筋力とは縁遠い魔道に没頭していた自分では歯が立つ筈はない。

「いやっ、やめて……許してよぉ……あふうっ……」

やがて心地よさで身体力が抜け落ちて、エリカはされるがままになった。敵のやり口の巧妙さもあるが、触手の発情体液がすっかり肌に染み込み血に混じり、身体中を蝕んでいるせいもあるだろう。

「大人しくなったな。脆いものだ……セックスは未体験ということ差し引いても、可愛がられることに慣れていないと見える」

敵剣士の目が細まった。一瞬だったが。

相手は、再び完全な仰向けになると柔らかい若腰をガツシリと掴んできた。

「いくぞ、これからが本番だ。気兼ねなく鳴くといい」

ズシイイイーンンンンツツツツツ！

「あああああつつつ！」

力強く突き上げられた。膣肉の谷間に嵌まり込んでいた肉イボが一気に膣を擦り上げ、子宮口に突進してきた先端が子宮までを揺さぶった。信じられないことに、自分は勝手に叫んでいた。突き上げは立て続けに繰り返されたが、その度にあられもない大声を出して

いるというのに、自分の口から声が飛び出るのを止められない。

「だめっ、ああんっ、声でちゃうっ、あふうっ、おまんこ気持ちよくなって、アアー！」

エリカの膣は、アスカの『慣らし』と触手の発情液により、化け物じみた敵女の肉棒に馴染んでしまっている。何度も性交を重ねた恋人同士、もしくは愛人同士と同じく、肉悦を分け合った性器が互いに擦れ合う快感を感じている。

「敵なのにつ、いやらしい痴女なのに、ンアアアッ！」

ろくでなしに感じさせられているという意識は消えていないが、肉と心に感じる悦びの方が圧倒的だ。心地よいスキンシップを交わされた記憶と感触が、堪らない肉悦と結びつき、相乗効果で勝気娘を蕩かせている。

「い、イヤア、イっちゃう、はううっ、いけないのに、殺すって宣言したのに、んあっ！これは初体験なのに、初めてが敵のオトコオンナなのに、イカされちゃう、ああっ、いやなのにイクッ、おまんこイクウウウツツツツツツッ！」

ビクッ、ビクビクビクビクビクビクビクビクビクッ、ビクンツ、ビクンツツツ！

エリカの全身が大きく波打ち、背中が盛大に反り返った。ローブが捲くりあがって露出している箇所は断続的に痙攣している。

「エピローグ」
ふくよかな乳房の先端はピンと尖りきり、牡棒と牝穴の合わせ目からは、肉棒の胴が穴の縁にみつちり密着しているにも関わらず、多量の蜜が染みてきた。

「ん、処女の絶頂おまんこは最高だな……はあ……出るぞ……おおっ、出すぞ、私の……んっ……私のザーメンをきみのおまんこに……っ！」

続いてアス力。降りてきた子宮口に鈴口を突き刺し、遠慮も容赦もなく自身の牡汁を吐き出す。それと同時に、複数の触手が這い寄り体液を飛ばす。

「ふあああっ……！ 熱いつ、熱い精液があっ！」

赤熱した膣内をも焼く熱量が、肉ひだの奥深くにまで染み込んで、膣内射精された記憶が女肉と心に刻み込まれる。発情触手汁が、その度合いを強くする。

「あっ、ああっ、んあああツツツ！ な、中で広がってえ」

放出中の体液は、熱いだけでなく粘っこい。肉棒で突かれる際の衝撃には及ばないものの、べちゃっ、ばちゃっ、と貼り付く感覚が甚だしく鮮烈で、精液の直撃を受けている実感を強く感じさせる。

「忘れられなくなっちゃう……敵の……最低スキモノ女の射精なのに……」

そしてこの充足感。膣内がドロドロの熱い精液で満たされるのが酷く心地よい。敵の女剣士は射精しながら、しなやかな肉の先端を執拗に最奥へ押し付けてくるのだが、射精されながら挟られるというのは、なんと甘美なものなのだろう。

同時にそれは、絶頂後の甘ったるい気だるさを一層こちよいものになっている。相手が敵でなく、あるいは普通の男であったなら、ぬるま湯に浸るように、この快樂に浸ってい

たかも知れない。

「あふああ………ああ………だめなのに………いい………」

悔し顔と、悦楽に蕩ける牝顔が入り混じったエリカ。と。

「ふうっ………ごちそうさま………私も気持ちよかった………では、おかわりといこうか」

「ふえ………」

意味を理解できなかった娘に構わず、アスカは体勢を変える。獣の交尾姿勢へだ。

「え………いやっ、こんな格好でなんて」

四つんばいをとらされたエリカの眼前には、先に失神した青年の顔があった。

「あふっ、あっ、んんっ、レックスの前なのにつ、こんな、ああっ！」

上体を起こして膝立ちになった敵剣士は、男顔負けの雄雄しさで牝犬姿勢のエリカを突きたてる。

突きこまれる度に、若い嬌声が押し出される。眠っているとは言え、好意をいなく男性の前で、他の人間に喘がされるなどんでもない話である。

けれど。

腰がぶつけられる度に、子宮どころか頭の芯まで揺さぶられる心地よさはどうだろう。

「エピローグ」
絶頂により垂れ流された自身の愛液とアスカの精液で、更に滑りがよくなった肉壺で行われる抜き差しは至極スムーズだ。射精しても萎えない勃起と肉イボが、興奮で充血した肉

の凸凹をぐちよぐちよと擦り上げる度に、内股がはしたなくヒクついてしまう。

「眼前に意中の青年の顔があるというのに、他の者……敵にバツクから、しかも醜いちんぽで突かれているのに、派手によがるとはな」

「ああっ、あんっ、あふあ、どうしてこんなに堪らないのっ、んあああっ！」

アスカの口調は酷薄なものであったが、一度弛んだ心身は引き締まらない。彼女の口調で正気に返り、憎い敵への敵愾心を奮い立たせ、この異常な状況から抜け出さねばと思っただけだが、与えられる快感により、種火の段階で消えてしまう。

それどころか、次第に、青年の前で女の声を上げることにより、妖しい悦楽を感じ始める。熱い吐息が彼の頬にかかる、ゾクツと背筋が冷たくなるが、罪悪感よりも背徳の快感の方を強く感じる。

「こっ、殺してやるんだから、こんなこととしてアタシ達を貶めて、覚えていなさいよっ」
せめて口では、と悪態をつく。しかし、その顔は喜悦が濃い。

「ああ、待っているよ。だが、もしも再度敗れた場合は、またこうして辱めてやる」

「あ……また……こうして……ッ、馬鹿にしてっ！」

一瞬、再び辱められる自分の姿が頭に浮かんだ。何体もの触手に囲まれ、自分は中央でアスカに組み伏せられている。ローブも肌も触手体液と敵剣士の性汁でネトネト。汚らしいのに、敵女は頓着せずに対面座位で自分を抱きすくめ、髪や頬を優しく愛撫した後、気

持ちよさそうに震えながら膣内へ何度もザーメンを注いでいる。

自分はそれ以上にあられもない嬌声を上げていた。何度も絶頂し、みっともないイキ顔を晒している。顔同士を突き合わせる体位なので、その顔は敵剣士に見られている。剥き出しの自分を、殺そうとした相手に引き出され、余す所なく。隣では今回同様、倒された青年が倒れているのに。

「では、そろそろまたイかせてやろう……今度は本当に同時にだ……私ときみとで一緒にイクぞ……うくっ……んっ……はああああああつ」

子宮口に亀頭を密着させ、小刻みに腰を振る敵剣士。子宮口への連続突きはエリカの心身を揺さぶり、高みへと突き上げる。

「んあつ、ああつ、イクっ、またイかされるっ、いやあ、一緒になんていやよっ……んんっ、いやなのにつ、だめっ、もうイクッ、中でちんぽがビクビクして、ブクツて膨らんでまた射精しそうで、あつ、本当に一緒にイかされるうううウウウウツツッ！」

絶頂の締めつけがアスカのイボペニスに襲いかかったのと同時に、密着した子宮口に灼熱の粘液が放出された。

「ああっ、また出てる……ああ……」

「エピローグ」
意中の青年を見つめながら、エリカは膣内射精を甘受する。蠟燭の最後のひと揺らぎめいた罵声はなくなり、彼女は夢見心地の表情だ。ぴったりと貼り付いて離れない亀頭から

ドクンドクンと精を送られれば、あふうっ、と短い濡れ声を出し、終わればほうつと熱い溜め息をつく。

またもや触手がやって来て、呆け顔の魔道娘の顔に媚薬汁を浴びせかける。魔液は、肌に染み込み、口内で引っかかり、喉を下り、血と共に全身を巡り、彼女が甘受する変態的な快感を濃厚にし、背徳快感の味を魂に深く刻み付ける。

ほどなくして、彼女の意識は闇にいだかれた。

「幸せそうな寝顔だな」

独り現実に残されたアスカも背悦を教える背悦に満足していた。

自分でも変態的とも、悪しきこととも思うのだが、そういう人間になってしまったのは仕方がない。いまの自分を否定するつもりはさらさらない。

「では後始末を済ませて戻るとしよう。他の人間と抱き合ったのだ、姫様も魔女殿も機嫌を機嫌を悪くしているかも知れない。早く帰って、二人のお怒りを静めないよ」と

言うアスカの牡棒がビクンツと震え、花弁からは蜜がじわつと滲み出た。

彼女は、触手に持ってこさせた道具を使い、眠る二人の介抱を始めた。

彼女達が次に目覚めたのは、森に至近の村のはずれにある綺麗な廃屋でだった。